

大島田Ⅱ遺跡 沼田遺跡

西毛広域幹線道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

群馬県安中土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

大島田Ⅱ遺跡 沼田遺跡

西毛広域幹線道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

群馬県安中土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県が策定した「群馬県がはばたくための7つの交通軸構想」のうち「西毛軸」は、西毛広域幹線道路、国道254号バイパスやJR信越本線、上信電鉄で構成されています。このうちの西毛広域幹線道路は、前橋市、高崎市、安中市及び富岡市を結ぶ延長27.8kmの主要幹線道路で、周囲の渋滞の緩和や、物流の効率化、生活圏の拡大など西毛地域の産業、経済、観光の発展を担う道路です。

平成24年度より事業に着手された安中工区約1.9km内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地における埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関によって協議・調整が図られた結果、埋蔵文化財の記録保存の措置が取られることとなり、平成28年度に安中市安中に所在する大島田II遺跡、平成29年度に安中市下秋間に所在する沼田遺跡の発掘調査、平成30・31年度に両遺跡の整理事業が当事業団に委託され、このほど、発掘調査報告書刊行の運びとなりました。

遺跡の周辺一帯は、古代上野国屈指の窯業地帯であり、多くの古代の窯跡が点在しておりますが、今回の発掘調査では、天明3年の浅間山噴火で降下した軽石によって埋没した水田を復旧した際の復旧坑群を中心とする遺構が検出され、甚大な火山災害を克服し、耕地を復旧して農業生産を復活させた江戸時代の農民たちのたくましい営みの軌跡を知ることが出来ました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県県土整備部、群馬県安中土木事務所、群馬県教育委員会、安中市教育委員会、地元関係者等の皆様方に多大なるご指導・ご支援とご協力を賜りました。ここに篤く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明や、文化財の保存・活用、地域文化の振興に広く役立てられますことを願いまして、序といたします。

令和元年7月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例　　言

1. 本書は、平成28・29年度西毛広域幹線道路整備事業に伴い発掘調査された大島田Ⅱ遺跡及び沼田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 大島田Ⅱ遺跡は群馬県安中市安中字大島田1518、1519、1532-2、1580-2、1581-2、1582-2、1595に所在し、沼田遺跡は群馬県安中市下秋間字柳町698-1、700-1、702-1、714、715、716、同字沼田794、795、796に所在する。
3. 事業主体は群馬県安中土木事務所である。
4. 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

(1)大島田Ⅱ遺跡

履行期間：平成28年12月1日～平成29年8月31日
調査期間：平成29年1月1日～平成29年2月28日
調査担当：小原俊行(専門員)、相京建史(専門調査役)
遺跡掘削工事請負：株式会社歴史の杜
地上測量委託：アコン測量設計株式会社

(2)沼田遺跡

履行期間：平成29年5月1日～平成29年9月30日
調査期間：平成29年6月1日～平成29年7月31日
調査担当：小原俊行(専門員)、友廣哲也(専門調査役)
遺跡掘削工事請負：スナガ環境測設株式会社
地上測量委託：アコン測量設計株式会社

6. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。

第1次整理

履行期間：平成30年6月1日～平成31年3月31日
整理期間：平成30年6月1日～平成31年3月31日
整理担当：石坂　茂(専門調査役)、平成30年6月1日～平成30年8月31日)
高島英之(専門員(総括)、平成30年9月1日～平成31年3月31日)

第2次整理

履行期間：平成31年4月1日～令和2年3月31日
整理期間：平成31年4月1日～平成31年4月30日
整理担当：高島英之(専門員(総括))

7. 本書作成担当は次のとおりである。

編集　　高島英之・石坂　茂

本文執筆　高島英之

遺物観察・遺物写真撮影

縄文土器　　：石坂　茂(資料2課専門調査役(平成30年度))

石器・石製品：津島秀章(資料2課長)

土器・陶磁器：大西雅広(資料1課専門調査役(平成30年度)、普及課長(平成31年度))

金属製品 : 板垣泰之(資料1課専門員)・関 邦一(資料1課専門調査役)

デジタル編集: 齊田智彦(資料1課資料統括・主任調査研究員)

8. 石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。

9. 出土遺物および写真・図面等記録類は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

10. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご助言をいただいた。

群馬県教育委員会、安中市教育委員会

凡 例

1. 本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲した。

2. 本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第IX系(世界測地系)による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。

3. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。

遺構平面図 復旧坑 1/120・1/100・1/80、水田 1/100・1/80、溝 1/100・1/80、木杭列・ピット 1/30、

土坑 1/60

遺構断面図 復旧坑 1/100・1/80・1/60、水田 1/40、溝 1/50・1/40、木杭列・ピット 1/30、

土坑 1/60

4. 本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。

縄文土器 1/3、金属製品 1/2、石製品 1/2、木杭 1/6、櫛 1/2、陶磁器 1/3

5. 本報告書のスクリーントーン表現は以下の通り。

擾乱



水田を掘り込んだ復旧坑



6. 本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図上に「L=○○m」のように表記した。

7. 本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省水産技術事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1988によった。

8. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)名称は町田 洋・新井房夫編『火山灰アトラス』(東京大学出版会 1992)によった。なお、略号は以下の通りである。

As-A…浅間 A、As-B…浅間 B、As-C…浅間 C、As-YP…浅間板鼻黄色、Hr-FP…榛名二ツ岳伊香保

目 次

序
例言
凡例
目次
挿図・表・写真目次

第1章 調査に至る経緯、方法と経過	1	第3章 検出された遺構と遺物	21
第1節 調査に至る経緯	1	第1部 大島田II遺跡	21
第1項 大島田II遺跡	2	第1項 復旧坑	22
第2項 沼田遺跡	2	第2項 土坑群	42
第2節 発掘調査の経過	3	第3項 水田	43
第1項 大島田II遺跡	3	第4項 溝	47
第2項 沼田遺跡	4	第5項 遺構外出土遺物	49
第3節 発掘調査の方法	6	第2部 沼田遺跡	50
第1項 座標の設定	6	第1節 1面から検出された遺構と遺物	51
第2項 調査の方法	7	第1項 復旧坑	51
第3項 遺構測量	7	第2節 2面から検出された遺構と遺物	57
第4項 遺構写真撮影	7	第1項 復旧坑	57
第4節 整理作業の経過と方法	8	第2項 水田	65
第2章 周辺の環境	9	第3項 ピット群・木杭列	67
第1節 地理的環境	9	第4項 溝	71
第1項 大島田II遺跡	11	第5項 遺構外出土遺物	73
第2項 沼田遺跡	11	第4章 調査成果の整理とまとめ	74
第2節 歴史的環境	11	1. 大島田II遺跡	74
第1項 旧石器時代	11	2. 沼田遺跡	75
第2項 繩文時代	11	まとめ	77
第3項 弥生時代	12		
第4項 古墳時代	12		
第5項 古代	13		
第6項 中世	16		
第7項 近世	18		
第3節 基本土層	19		
第1項 大島田II遺跡	19		
第2項 沼田遺跡	20		

遺物観察表・非掲載遺物集計表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡の位置図	1	第23図	大島田II遺跡1号水田と掘削工具痕	44
第2図	大島田II遺跡、沼田遺跡調査区設定図	5	第24図	大島田II遺跡2号水田	45
第3図	周辺地形分類図	10	第25図	大島田II遺跡3号水田と掘削工具痕	46
第4図	周辺遺跡分布図	14	第26図	大島田II遺跡1号溝、出土遺物	47
第5図	大島田II遺跡基本土層模式図	19	第27図	大島田II遺跡2号溝、出土遺物	48
第6図	沼田遺跡基本土層模式図	20	第28図	大島田II遺跡遺構外出土遺物	49
第7図	大島田II遺跡新2群復旧坑	24	第29図	沼田遺跡1区1面1群復旧坑	52
第8図	大島田II遺跡1・3群復旧坑	25	第30図	沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)	54
第9図	大島田II遺跡2・新1群復旧坑	27	第31図	沼田遺跡2区1面2群復旧坑(南側)	55
第10図	大島田II遺跡4群復旧坑と復旧坑掘削前の掘削工具痕	28	第32図	沼田遺跡4区1面3群復旧坑	56
第11図	大島田II遺跡5・6群復旧坑	29	第33図	沼田遺跡4区2面4・5群復旧坑	58
第12図	大島田II遺跡7群復旧坑	31	第34図	沼田遺跡4区2面6群復旧坑	59
第13図	大島田II遺跡8群復旧坑	32	第35図	沼田遺跡2区2面7群復旧坑	61
第14図	大島田II遺跡9群復旧坑	34	第36図	沼田遺跡2区2面7群復旧坑掘削前の掘削工具痕	62
第15図	大島田II遺跡9・10群復旧坑掘削前の掘削工具痕	35	第37図	沼田遺跡2区2面8・9群復旧坑、8群復旧坑出土遺物	63
第16図	大島田II遺跡10群復旧坑	36	第38図	沼田遺跡2区2面8群復旧坑掘削前の掘削工具痕	64
第17図	大島田II遺跡11群復旧坑	37	第39図	沼田遺跡2区2面10群復旧坑	65
第18図	大島田II遺跡12・14群復旧坑(1)	39	第40図	沼田遺跡4区2面1・2号水田、出土遺物	66
第19図	大島田II遺跡12・14群復旧坑(2)	40	第41図	沼田遺跡2区2面1号ビット群・1号木杭列	69
第20図	大島田II遺跡13群復旧坑	41	第42図	沼田遺跡2区2面1号木杭列出土遺物	70
第21図	大島田II遺跡15・16群復旧坑	42	第43図	沼田遺跡4区2面1～3号溝、1号溝出土遺物	72
第22図	大島田II遺跡1号土坑群	43	第44図	沼田遺跡遺構外出土遺物	73

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	15	第6表	沼田遺跡検出ピット一覧表	51
第2表	大島田II遺跡出土遺構数一覧表	22	第7表	沼田遺跡出土木杭一覧表	51
第3表	大島田II遺跡検出復旧坑一覧表	22	第8表	遺物観察表	78
第4表	沼田遺跡検出遺構数一覧表	51	第9表	大島田II遺跡、沼田遺跡非開闢遺物集計表	79
第5表	沼田遺跡検出復旧坑一覧表	51			

写真目次

- PL. 1 1. 大島田Ⅱ道路全景(西から)
2. 大島田Ⅱ道路調査区北半部全景(東から)
- PL. 2 1. 大島田Ⅱ道路調査区北半部全景(南から)
2. 大島田Ⅱ道路調査区北半部全景(西から)
- PL. 3 1. 大島田Ⅱ道路調査区南半部全景(北から)
2. 大島田Ⅱ道路調査区南半部全景(東から)
- PL. 4 1. 大島田Ⅱ道路調査区南半部全景(南から)
2. 大島田Ⅱ道路調査区南半部全景(東から)
- PL. 5 1. 大島田Ⅱ道路1～8群復旧坑、1号水田耕、1号水田全景
(西から)
2. 大島田Ⅱ道路8～11群復旧坑、1号水田、1号溝全景(西から)
- PL. 6 1. 大島田Ⅱ道路新2群復旧坑検出状況(南から)
2. 大島田Ⅱ道路1群復旧坑北側、2号水田検出状況(東から)
3. 大島田Ⅱ道路1群復旧坑北側検出状況(南から)
4. 大島田Ⅱ道路1群復旧坑検出状況(北から)
5. 大島田Ⅱ道路1群復旧坑検出状況(南から)
- PL. 7 1. 大島田Ⅱ道路1群復旧坑検出状況(南から)
2. 大島田Ⅱ道路1群復旧坑検出状況(北から)
3. 大島田Ⅱ道路1群復旧坑北壁上層断面A～A'(南から)
4. 大島田Ⅱ道路1群復旧坑北壁上層断面A～A'(南から)
5. 大島田Ⅱ道路2・5・6群復旧坑検出状況(南から)
- PL. 8 1. 大島田Ⅱ道路2・新1群復旧坑北壁上層断面A～A'(南から)
2. 大島田Ⅱ道路2・新1群復旧坑北壁上層断面A～A'(南から)
3. 大島田Ⅱ道路3群復旧坑検出状況(西から)
4. 大島田Ⅱ道路4群復旧坑検出状況(北から)
5. 大島田Ⅱ道路4・7群復旧坑検出状況(北から)
- PL. 9 1. 大島田Ⅱ道路4群復旧坑前掘削工具痕(南から)
2. 大島田Ⅱ道路2・5～7群復旧坑検出状況(北から)
- PL. 10 1. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑、1号水田検出状況(東から)
2. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑検出状況(南から)
- PL. 11 1. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑掘削工具痕(南東から)
2. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑掘削工具痕(南東から)
3. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑掘削前の掘削工具痕(東から)
4. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北東から)
5. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑掘削前の掘削工具痕(南東から)
6. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑、1号水田畔上層断面A～A'
(南東から)
7. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑、1号水田畔上層断面A～A'
(南東から)
8. 大島田Ⅱ道路8群復旧坑上層断面B～B'(南西から)
- PL. 12 1. 大島田Ⅱ道路9群復旧坑検出状況、土壌断面A～A'(東から)
2. 大島田Ⅱ道路9・10群復旧坑掘削前の掘削工具痕(南西から)
- PL. 13 1. 大島田Ⅱ道路9群復旧坑掘削前の掘削工具痕(南東から)
2. 大島田Ⅱ道路9群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北東から)
- PL. 14 1. 大島田Ⅱ道路10群復旧坑検出状況、土壌断面A～A'(東から)
2. 大島田Ⅱ道路10群復旧坑検出状況(北から)
- PL. 15 1. 大島田Ⅱ道路11群復旧坑検出状況(南から)
2. 大島田Ⅱ道路12・14群復旧坑、2号溝検出状況(南東から)
- PL. 16 1. 大島田Ⅱ道路12群復旧坑上層断面A～A'(南東から)
3. 大島田Ⅱ道路12群復旧坑上層断面B～B'(南東から)
4. 大島田Ⅱ道路13群復旧坑検出状況(西から)
5. 大島田Ⅱ道路13群復旧坑検出状況(北東から)
- PL. 17 1. 大島田Ⅱ道路13群復旧坑検出状況(北から)
2. 大島田Ⅱ道路13群復旧坑上層断面A～A'西端(北から)
3. 大島田Ⅱ道路13群復旧坑上層断面A～A'西寄り(北から)
4. 大島田Ⅱ道路13群復旧坑上層断面A～A'東寄り(北から)
5. 大島田Ⅱ道路13群復旧坑上層断面A～A'東端(北から)
- PL. 18 1. 大島田Ⅱ道路14・15群復旧坑、3号水田検出状況(東から)
2. 大島田Ⅱ道路16群復旧坑検出状況(東から)
- PL. 19 1. 大島田Ⅱ道路16群復旧坑、3号水田検出状況(南から)
2. 大島田Ⅱ道路16群復旧坑、3号水田検出状況(南西から)
- PL. 20 1. 大島田Ⅱ道路1号溝全景(東から)
- PL. 21 2. 大島田Ⅱ道路2号溝全景(北東から)
1. 大島田Ⅱ道路1号溝上層断面A～A'(東から)
2. 大島田Ⅱ道路2号溝上層断面A～A'(南西から)
3. 大島田Ⅱ道路2号溝上層断面B～B'(西から)
4. 大島田Ⅱ道路基本上層2(東から)
5. 大島田Ⅱ道路基本上層2近接(東から)
6. 大島田Ⅱ道路調査区南端部壊乱状況(北東から)
7. 大島田Ⅱ道路調査区南端部壊乱状況(東から)
8. 大島田Ⅱ道路調査区南端部壊乱深度状況(南から)
- PL. 22 大島田Ⅱ道路1号溝、道外出土遺物
- PL. 23 1. 沼田道路調査区遠景(北西から)
2. 沼田道路1～3区全景(南西から)
- PL. 24 1. 沼田道路調査区全景(南東から)
2. 沼田道路2区2面検出状況(南西から)
- PL. 25 1. 沼田道路4区2面検出状況(南西から)
2. 沼田道路1区1面1群復旧坑検出状況(北西から)
- PL. 26 1. 沼田道路1区1面1群復旧坑検出状況(北から)
2. 沼田道路1区全景(南東から)
- PL. 27 1. 沼田道路2区1面2群復旧坑検出状況(南東から)
2. 沼田道路2区1面2群復旧坑(北側)検出状況(南東から)
- PL. 28 1. 沼田道路2区1面2群復旧坑(北側)検出状況(南東から)
2. 沼田道路2区1面2群復旧坑(北側)検出状況(南から)
3. 沼田道路2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南から)
4. 沼田道路2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南から)
5. 沼田道路2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南から)
6. 沼田道路2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南から)
7. 沼田道路2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南から)
8. 沼田道路2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(西から)
- PL. 29 1. 沼田道路3区全景(東から)
2. 沼田道路4区1面3群復旧坑検出状況(北西から)
- PL. 30 1. 沼田道路4区2面4群復旧坑検出状況(南から)
2. 沼田道路4区2面4群復旧坑上層断面A～A'(南から)
3. 沼田道路4区2面5群復旧坑上層断面B～B'(南から)
4. 沼田道路4区2面4～5群復旧坑検出状況(南から)
5. 沼田道路4区2面6群復旧坑上層断面A～A'東端(南西から)
- PL. 31 1. 沼田道路4区2面6群復旧坑検出状況(南から)
2. 沼田道路4区2面6群復旧坑検出状況(南東から)
- PL. 32 1. 沼田道路4区2面6群復旧坑検出状況(南から)
2. 沼田道路4区2面6群復旧坑検出状況(北東から)
- PL. 33 1. 沼田道路4区2面6群復旧坑検出状況(北東から)
2. 沼田道路4区2面6群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北東から)
3. 沼田道路4区2面6群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北から)
4. 沼田道路4区2面6群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北から)
5. 沼田道路2区2面7群復旧坑検出状況(南東から)
- PL. 34 1. 沼田道路2区2面8群復旧坑検出状況(南東から)
2. 沼田道路2区2面9群復旧坑検出状況(南から)
- PL. 35 1. 沼田道路2区2面10群復旧坑検出状況(南東から)
2. 沼田道路2区2面1号木杭列検出状況(南から)
- PL. 36 1. 沼田道路2区2面1号木杭列検出状況(南から)
2. 沼田道路2区2面1号ビット群1号ビット全景(南から)
3. 沼田道路2区2面1号ビット群1号ビット全景(南西から)
4. 沼田道路2区2面1号ビット群1号ビット土層断面F～F'
(南西から)
- PL. 37 1. 沼田道路2区2面1号木杭列木杭1(南西から)
2. 沼田道路2区2面1号木杭列木杭5(南西から)
3. 沼田道路2区2面1号木杭列木杭6・7(南西から)
4. 沼田道路2区2面1号木杭列木杭8・9(南から)
5. 沼田道路2区2面1号木杭列木杭11～13(南から)
6. 沼田道路2区2面1号木杭列木杭14(南から)

7. 沼田遺跡 2区2面1号木杭列木杭17・22(南から)
 8. 沼田遺跡 2区2面1号木杭列木杭18~21(南から)
- PL.38 1. 沼田遺跡 2区2面1号木杭列木杭23(南西から)
 2. 沼田遺跡 2区2面1号木杭列木杭24, 1号ビット群7号ビット
 土層断面 B-B'(南から)
 3. 沼田遺跡 4区2面1号水田壁群水口検出状況(北から)
 4. 沼田遺跡 4区2面2号水田礫検出状況(南東から)
 5. 沼田遺跡 4区2面1・2号水田、2・3号溝、6群復旧坑検出状況
 (南東から)
- PL.39 1. 沼田遺跡 4区2面1・2号水田、2・3号溝検出状況(南東から)
 2. 沼田遺跡 4区2面2号溝上層断面 A-A'(南東から)
3. 沼田遺跡 4区2面1号溝全景(西から)
 4. 沼田遺跡 1区西壁上層断面 A-A'(東から)
 5. 沼田遺跡 1区西壁上層断面 A-A'(部分)(北東から)
- PL.40 1. 沼田遺跡 1区西壁下層断面 A-A'(部分)(北東から)
 2. 沼田遺跡 2区北東壁基本土層(南西から)
 3. 沼田遺跡 3区北壁上層断面(南北分)
 4. 沼田遺跡 4区南西壁基本土層(北東から)
 5. 沼田遺跡 1区北側下層確認状況
 6. 沼田遺跡 4区下層確認状況
- PL.41 沼田遺跡 2区2面8・10群復旧坑、1号杭列、4区2面2号水田、
 1号溝、遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

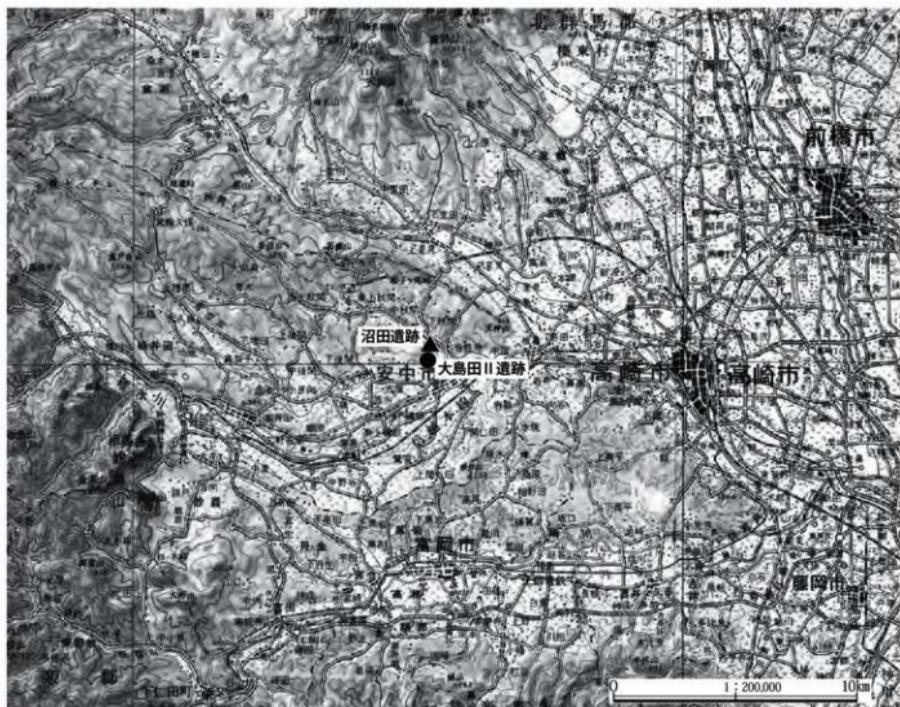
第1節 調査に至る経緯

群馬県が策定した「群馬がはばたくための7つの交通軸構想」とは、県内の高速交通網を補完する、県央軸、東毛軸、西毛軸、吾妻軸、三国軸、尾瀬軸、渡良瀬軸の7つの交通軸を整備することにより、地域連携・時間短縮を強化とともに、それぞれの軸に求められる工業・農業・観光・救命・救急・防災・日常生活などの機能を向上させることを目指したものである。

7つの交通軸のうち、「西毛軸」は、西毛広域幹線道路、国道254号バイパスやJR信越本線、上信電鉄で構成さ

れる。その中でも主要な構成要素である西毛広域幹線道路は、国道17号線との前橋市千代田町三丁目交差点を起点とし、前橋市西部、高崎市北西部、安中市中央部を経て、国道254号富岡バイパスとの富岡市富岡しのめ跨線橋北交差点に至る、総延長27.8kmの主要幹線道路である。この道路整備によって、周囲地域における交通渋滞の緩和や物流の効率化、生活圏の拡大など西毛地域の産業、経済、観光の発展を担うことが期待されている。

現在、起点の国道17号との前橋市千代田町三丁目交差点から高崎市棟高の主要地方道高崎渋川線(旧道)との交差点に至る前橋工区・元総社蒼海工区・国分寺工区・中



第1図 遺跡の位置図(国土地理院 1/200,000地勢図「長野」平成24年5月1日、「宇都宮」平成23年6月1日発行を使用)

央第二工区計6.24kmと、高崎市箕郷町上芝から高崎市下里見に至る高崎西工区4.70km、安中市下秋間から安中市安中の国道18号との安中市役所入口交差点に至る安中工区1.90kmが現在整備中であり、前橋市千代田町三丁目交差点から前橋市問屋町までの前橋工区2.73kmと、前橋市元総社町の関越自動車道と交差する箇所から高崎市引間町の主要地方道高崎渋川線バイパスとの辻久保交差点までの国分寺工区1.64km、それに主要地方道高崎渋川線バイパスとの辻久保交差点から高崎市棟高の主要地方道高崎渋川線との交差点までの中央第二工区西側0.40kmに至る間はすでに供用が開始されている。

本報告書で報告する安中市安中地区所在の大島田Ⅱ遺跡及び安中市下秋間地区所在の沼田遺跡発掘調査の原因となった西毛広域幹線道路安中工区は、安中市街地北西の下秋間地区の丘陵地帯から碓氷川支流の秋間川、九十九川を越えて国道18号安中市役所交差点に至る区間であり、丘陵部とそれを秋間川と九十九川が開析した樹枝状の谷とが交差する地域から安中市街地が展開する碓氷川左岸の上位段丘面に至っている。

平成26(2014)年7月群馬県県土整備部道路整備課・都市計画課発行の『西毛広域幹線道路』パンフレットでは、安中工区について、「あるきやすくて、安全・安心な道路が実現」とのキャッチフレーズで、「幅員が狭く、歩道がないことから歩行の際に不安感を抱くような道路から、広幅員で車と人が分離された歩きやすい安全・安心な道路に生まれ変わります。」としている。

第1項 大島田Ⅱ遺跡

平成27(2015)年5月7日に群馬県県土整備部建設企画課から群馬県教育委員会文化財保護課に対して、安中市安中字大島田地区における西毛広域幹線道路整備事業対象範囲内の埋蔵文化財の状況について照会があったことが、西毛広域幹線道路整備事業対象範囲における埋蔵文化財の状況に関する照会の嚆矢であった。

これを承けて県文化財保護課は、同年6月26日付け文財第30004-17号にて、県建設企画課に対して、安中市安中字大島田地区における事業地の一部が、安中市の遺跡台帳に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地(安中市遺跡番号0558)の範囲に当たるため、埋蔵文化財試掘調査の必要があること及び文化財保護法第94条による届出が

必要である旨を回答した。

その後、同年7月28・29日に県文化財保護課が安中市安中字大島田地内での事業対象地内における埋蔵文化財試掘調査を実施したところ近世の畠と見られる遺構が検出され、埋蔵文化財の包蔵を確認したので、県文化財保護課は同年8月3日付け県安中土木事務所に宛てて工事に先立って埋蔵文化財発掘調査が必要な旨を回答した。

この後、県文化財保護課、県安中土木事務所、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の3者によって、現地における発掘調査着手にむけての具体的協議に入った。

県安中土木事務所は翌平成28(2016)年10月13日付け安土第111-1号により安中市教育委員会文化財保護課宛文化財保護法94条による周知の埋蔵文化財包蔵地における工事の届出を提出、それを承けて安中市文化財保護課は同日付け安教文材第1451号にて県文化財保護課宛進達した。

県文化財保護課の調整のもと、県安中土木事務所を委託者、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を受託者として、平成28(2016)年12月1日付け当該地における発掘調査の委託契約が締結され、翌平成29(2017)年1月初めから現地での調査に着手されることになった。

第2項 沼田遺跡

大島田Ⅱ遺跡調査着手に向けて県建設企画課と県文化財保護課との間で協議が進む中、平成28(2016)年5月9日に県建設企画課から県文化財保護課に対して、安中市下秋間字柳町及び字沼田地内における西毛広域幹線道路整備事業対象範囲内の埋蔵文化財の状況について照会があった。

これを承けて県文化財保護課は、同年6月8日付け文財第30004-40号にて県建設企画課に対して安中市下秋間字柳町及び字沼田地内における事業地の一部が安中の遺跡台帳に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地(安中市遺跡番号0555)の範囲に当たるため、埋蔵文化財試掘調査の必要があること及び文化財保護法第94条による届出が必要である旨を回答した。

その後、同年9月2日付け安土第111-2号にて県安中土木事務所から当該地における埋蔵文化財試掘調査依頼があり、それを承けた県文化財保護課は同年10月19日

に工事対象箇所における埋蔵文化財試掘調査を実施したところ、近世の畠と見られる遺構が検出され、埋蔵文化財の包蔵を確認した。県文化財保護課は同年10月27日付け県安中土木事務所宛工事に先立って埋蔵文化財発掘調査が必要な旨を回答した。

この後、県文化財保護課、県安中土木事務所、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の3者によって、現地における発掘調査着手にむけての具体的協議に入った。

県安中土木事務所は、同年12月20日付け安土第111-14号にて安中市教育委員会文化財保護課宛文化財保護法94条による周知の埋蔵文化財包蔵地における工事の届出を提出、それを承けて安中市文化財保護課は同日付け安教文財第1677号にて県文化財保護課宛進達した。

県文化財保護課の指導のもと、県安中土木事務所を委託者、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を受託者として、翌平成29年5月1日付け、当該地における発掘調査の委託契約が締結され、翌6月1日から現地での調査に着手されることになった。

第2節 発掘調査の経過

第1項 大島田II遺跡

大島田II遺跡の発掘調査は、平成29(2017)年1月1日から2月28日までの2カ月間、計3,970m²を対象として実施した。

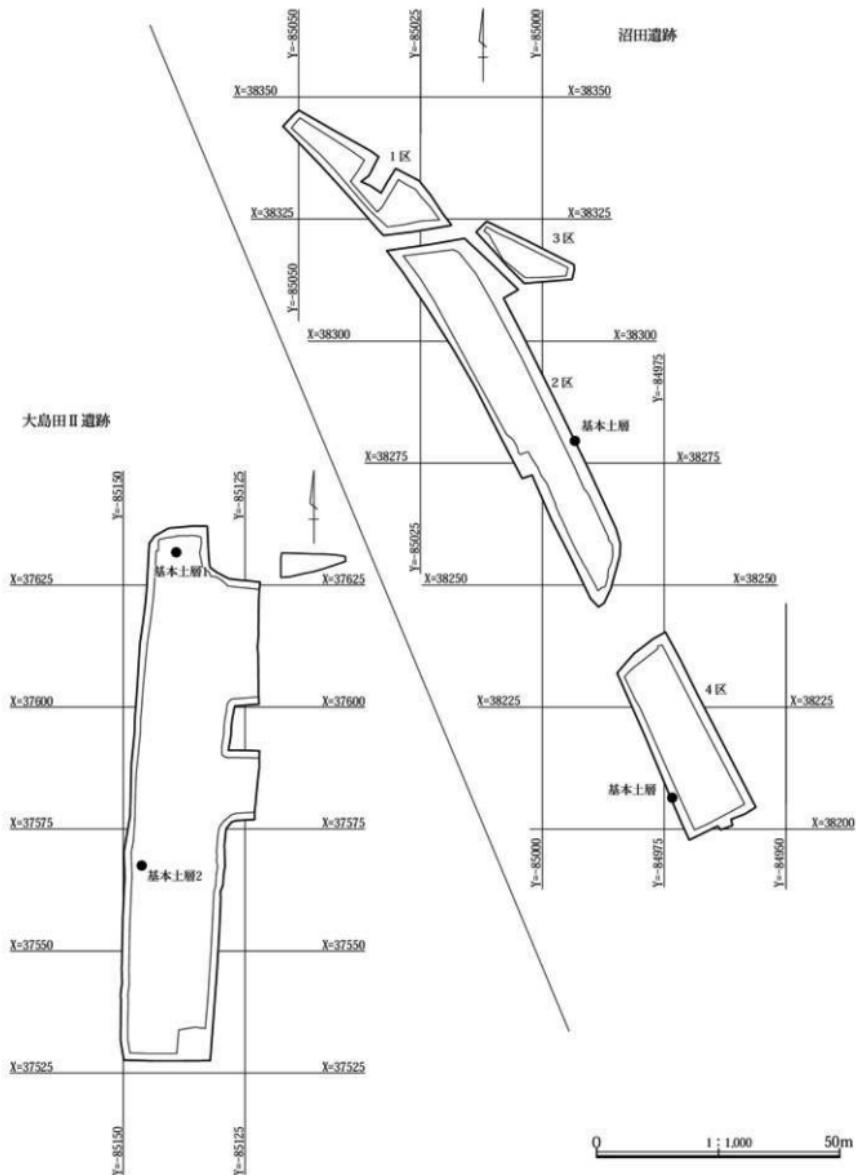
調査対象地は、安中市役所の北西約900mの位置、安中市立スポーツセンターの東側に隣接する南北約110m、東西約20～22mの南北に長い長方形を呈する範囲で、北側は秋間川右岸の丘陵崖線直下の低地部に立地し、南側は碓氷川支流の九十九川左岸堤防上の道路にそれぞれ接している。調査区北側に接する丘陵部分はオーブンカット工法となるため、調査区北端の東側が段状に大きく広がった形状となっている。

今回の調査地点の東側一帯は、安中市教育委員会が平成3(1991)年に圃場整備事業に先立って発掘調査をした大島田遺跡である。明瞭な遺構は視覚的には確認されなかったものの、プラント・オパール分析の結果、天明3(1783)年浅間山噴火時に降下した軽石As-Aの下層から近

世の水田遺構の存在を示すような良好な結果が得られた(安中市教育委員会編『九十九川流域遺跡群1 平成3年度団体営圃場整備事業九十九川下流地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1993)。

調査日誌抄
平成29年
1月4日
調査着手。物品搬入、調査事務所設営。周辺環境整備。
1月5日
重機による表土掘削開始。調査区の周囲に安全柵を設置。基準点測量着手。
1月6～14日
表土掘削、調査区及び排土置場等環境整備、基準点測量、境界杭打設等継続。
1月16日
重機による表土掘削完了。遺構確認着手。調査区内環境整備。排土運搬作業継続。境界杭設置作業完了。
1月17～19日
安中市立安中小学校児童社会科見学。
1月17～20日
遺構確認継続、As-A復旧坑調査着手。調査区内環境整備作業、排土運搬作業継続。
1月23・24日
遺構確認、調査区内環境整備作業継続、復旧坑群平面・エレベーション実測及び写真撮影。
1月25日
1～7群復旧坑平面・エレベーション実測、写真撮影継続。調査区内環境整備作業継続。
1月26日
1～7群復旧坑調査継続。8群復旧坑平面・エレベーション・土層断面実測、写真撮影。1号水田調査着手。1号溝調査着手。
1月27日
9～12群復旧坑調査継続、土層断面等実測。1号溝平面・エレベーション実測。
1月30日
9～11群復旧坑平面・エレベーション実測、レベリング。11・12群復旧坑、基本土層2写真撮影・断面

実測。	2月22日
1月31日	現場撤収作業着手。
1～8・11群復旧坑、1号水田、1号溝調査、全景写真撮影。9～12群復旧坑平面実測。調査区空撮準備。	2月24日
2月1日	現場撤収完了。
調査区空撮。調査区北側埋め戻し着手。1群復旧坑、2号水田調査着手。	2月27・28日
2月2日	事務処理、基礎整理作業。
1群復旧坑、2号水田全景写真撮影、平面実測、調査完了。調査区北壁土層断面実測、写真撮影。調査区北側埋め戻し作業継続。13群復旧坑調査着手。13群復旧坑平面・エレベーション・土層断面実測。	第2項 沼田遺跡
2月3日	沼田遺跡の発掘調査は、平成29(2017)年6月1日から7月31日までの2ヶ月間、計3,411m ² を対象として実施した。
13群復旧坑土層断面及び全景写真撮影。調査区北側における全ての遺構調査を完了。調査区北側埋め戻し作業継続。13群復旧坑埋め戻し完了。	調査対象地は、安中市役所の北約1.5kmの位置、秋間川右岸の下位丘面に立地している。調査対象地は北西～南東方向の現道に、南西側から西毛広域幹線道路が取り付く部分で、全長約170m程度、幅約5.4～30m程度のやや湾曲した弧状を描く路線部分の範囲である。
2月6日	今回の調査地点の南西側一帯は、安中市教育委員会が平成10(1998)年度に圃場整備事業に先立って発掘調査をした沼田遺跡が隣接している。
2月7・8日	調査日誌抄
調査区南側遺構確認着手・調査区北側埋め戻し作業継続。	平成29年
2月9日	6月1日
12～16群復旧坑、3号水田全景写真撮影。3号水田、2号溝調査継続。	調査着手。調査事務所設営。
2月10日	6月5・6日
12～16群復旧坑平面・土層断面実測、全景及び土層断面写真撮影。	調査区内環境整備作業。
2月11日	6月7日
調査区南側平面実測完了。エレベーション実測継続。	表土掘削、遺構確認着手。
2月13日	6月8・9日
調査区南側空撮。12～16群復旧坑及び3号水田全景写真撮影。調査区南側における調査を完了。	表土掘削、遺構確認継続。
2月14日	6月12日
調査区南側埋め戻し及び排土運搬作業着手。	1区1群復旧坑全景写真撮影。2区表土掘削、遺構確認継続。3区調査区全景写真撮影、平面実測、北東壁土層断面写真撮影。
2月15～20日	6月13日
調査区南側埋め戻し及び排土運搬作業継続。	2区表土掘削、遺構確認継続。
2月21日	6月14日
調査区南側埋め戻し及び排土運搬作業完了。	1区1群復旧坑平面・土層断面実測、全景写真撮影、調査完了。2区表土掘削、遺構確認継続。3区北東壁土層断面実測、調査完了。



第2図 大島田II遺跡、沼田遺跡調査区設定図

6月15日	2区表土掘削、遺構確認継続。	7月5日	2区2面7・8群復旧坑土層断面実測継続。9群復旧坑調査着手。
6月16日	2区表土掘削、遺構確認継続。4区表土掘削着手。	7月7日	2区2面7～9群復旧坑土層断面実測及び写真撮影、平面実測。10群復旧坑調査着手。1号木杭列木杭採り上げ、エレベーション実測及び写真撮影。
6月19日	2区2群復旧坑北側確認調査、土層断面写真撮影。 4区表土掘削継続。	7月10日	2区2面7～9群復旧坑土層断面実測及び写真撮影、平面実測。10群復旧坑調査着手。1号木杭列平面及びエレベーション実測継続。
6月20日	2区2群復旧坑北側平面・土層断面・エレベーション実測、全景写真撮影。4区表土掘削継続、遺構確認着手。	7月12日	2区2面7～9群復旧坑調査継続。10群復旧坑土層断面実測及び写真撮影。1号木杭列平面及びエレベーション実測継続。
6月22日	2区2群復旧坑南側遺構確認。4区3群復旧坑遺構確認、全景写真撮影。	7月13日	空撮準備。
6月23日	2区2群復旧坑南側エレベーション・平面実測、全景写真撮影。4区3群復旧坑エレベーション・平面実測。	7月14日	空撮。
6月26日	2区2群復旧坑平面実測。4区3群復旧坑平面実測。 2面遺構確認着手。4群復旧坑土層断面写真撮影、5・6群復旧坑調査着手。	7月18日	2区2面1号木杭列エレベーション実測継続。1号ビット群土層断面及びエレベーション実測、写真撮影。全ての遺構調査を完了。
6月27日	2区2面遺構確認継続、7群復旧坑調査着手。4区2面4群復旧坑平面・土層断面実測、全景写真撮影。 5群復旧坑土層断面実測。6群復旧坑土層断面写真撮影及び実測。	7月19日	埋め戻し作業着手。
6月28日	4区2面4群復旧坑平面実測、全景写真撮影。5群復旧坑土層断面写真撮影及び実測、平面実測。6群復旧坑エレベーション実測、全景写真撮影。1・2号溝土層断面写真撮影及び実測。	7月20～24日	埋め戻し作業完了。
6月29日	2区2面7群復旧坑土層断面実測。4区2面5群復旧坑、1～3号溝全景写真撮影。1・2号水田土層断面及び全景写真撮影。	7月26日	現場撤収作業着手。
7月3日	2区2面7群復旧坑土層断面実測継続。8群復旧坑調査着手。4区2面6群復旧坑、1・2号水田、2・3号溝平面実測。	7月31日	現場撤収完了。

第3節 発掘調査の方法

第1項 座標の設定

発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記し、「X=38300、Y=-85000」の場合、「300-000」のように略記した。

第2項 調査の方法

調査対象地は、大島田II遺跡及び沼田遺跡とも、南北に細長い道路の路線幅内の調査であった。

大島田II遺跡では、表土下2.0～2.5mは近代の盛土であり、バックフォーによって掘削・除去した。盛土の下からは発掘作業員の人力による掘削を行った。人力で盛土を取り除いた下からは天明3(1783)年に起きた浅間山大噴火によって降下した軽石As-Aの二次堆積層が検出され、その階層から深さ約0.6m前後の復旧坑群が検出された。また、併せて、各復旧坑間の高まりの部分からは、一部で幅約0.2m前後の掘削工具痕が水平に並んで検出された。これら復旧坑群や掘削工具痕が検出された間にAs-Aの一次堆積層が部分的に認められ、このAs-A一次堆積層を人力で除去するとその下層からは水田が検出され平面精査を実施した。

沼田遺跡でも表土下1.5～2.0mは近代の盛土であり、バックフォーを用いて掘削・除去した後に発掘作業員の人力によって盛土下に堆積した洪流水堆植物と考えられる砂礫層を除去し、幅約0.8～1.0m前後の復旧坑群を検出、調査した。これらの復旧坑群の確認面から厚さ0.2～0.3m程の堆積土を人力で除去するとAs-Aの二次堆積層が検出された。そのAs-A二次堆積層を発掘作業員の人力によって除去し、その下層から深さ約0.1～0.2m前後、幅約0.3～0.6m前後の復旧坑群が検出された。また、大島田II遺跡と同様、各復旧坑間の高まりの部分からは幅約0.2m前後の掘削工具痕がほぼ水平に並んで検出された。さらにこれも大島田II遺跡と同様、復旧坑群や掘削工具痕の間にAs-Aの一次堆積層が認められ、それを人力で除去すると水田が検出されたので平面精査を実施した。

確認された遺構は、順次、埋没土層確認用ベルトを任意に設定するか、あるいは半截し、発掘作業員が移植鍬等で掘削した後、遺構断面及び平面測量及び写真撮影等を行い、実測図及び写真によって記録した。

遺構確認、遺構掘り下げの指示、土層観察、遺構及び土層断面の写真撮影は調査担当者が行った。また、高い位置からの調査区全景写真的撮影は有資格業者が運転・操作する高所作業車に調査担当者が搭乗して実施した。

各遺構の土層断面図、遺構平面図、遺物出土位置の記

録・図化は、調査担当者の指示と立ち合いの下、測量業者に委託して行った。

写真記録の内、デジタルカメラで撮影したものはデジタルデータとしてHDD及DVDロムに記録、保管した。なお、バックアップデータも併せて作成、保管した。また、ISO400プローニー版モノクロフィルムを用いて6×7cm版カメラで撮影した写真は、ネガフィルムの状態で保管し、焼き付け写真を貼付したフィルムの検索台帳を作成した上で保管した。

遺構番号は、今次調査における通し番号とした。また、調査過程において出土した遺物については、出土した遺構ごとに出土地点を記録し、整理・集約した上で、洗浄および出土遺跡・遺構・出土地点等に関するデータを注記する作業を業者委託し、業者から提出を受けた成果品については、発掘調査担当者が逐一、点検・照合し、受領した。

調査終了後の埋め戻しの作業は、基本的にバックフォーを主体とする重機によって行った。

第3項 遺構測量

遺構平面実測図の作成に当たっては、指名競争入札によって落札した測量会社にデジタル測量を委託し、データ及び打ち出し図面の提出を受けた。

遺構断面実測図は、原則として発掘現場における発掘作業員によって実測されたものを元に、測量会社にデジタルデータ化を委託し、遺構平面実測図と同様、データ及び打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品および実測原図等は、調査記録として保存されている。

遺構図の縮尺は、断面実測図は1/20、平面実測図は1/40を基本とした。

第4項 遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真は発掘調査担当者が撮影した。発掘調査の過程で検出されたすべての遺構及び発掘調査に係る各種作業の進捗状況をデジタルカメラで撮影し、HDDにデータを保存、検索用データを作成した。

また、調査記録として、遺構ごとに土層断面、遺物出

土状態、遺構全景等の写真撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について微細な接写を行った。

第4節 整理作業の経過と方法

整理作業は、平成30年6月1日から平成31年3月31日までの10ヶ月間、群馬県安中土木事務所の委託を受けて公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

対象となった発掘調査時に作成された遺構図面は、大島田II遺跡が32枚、沼田遺跡が43枚の計75枚、記録写真是デジタル画像で、大島田II遺跡886カット、沼田遺跡892カット、計1,778カット、モノクロフィルムで大島田II遺跡80カット、沼田遺跡70カットの計150カットであった。

まず、調査現場から搬入された両遺跡からの出土遺物コンテナ計2箱分の基本的な分類・仕訳と登録、集計作業を実施した後、石製品の実測、分類、観察作業を実施した。発掘調査記録については、台帳整備、写真記録のチェックを行い、遺構図と写真記録の照合や誤認・誤記の修正作業を行なった。また、数度にわたって発掘調査担当者からの調査所見や土層注記について聞き取りを行い、遺構遺物についての理解の深化に努めた。

発掘調査時に作成された遺構平面図・断面図の点検、修正・整合・編集を行い、発掘調査報告書に掲載する遺構図版のデジタルデータ化を図った。

出土遺物については、発掘調査時に洗浄・注記をすべて終えていた遺物を選別、接合・復元し、その後、必要に応じて順次、写真撮影、実測及びトレース、採拓等の作業を実施した。

発掘調査時に撮影された各種遺構写真是、発掘調査報告書に掲載するものを選別し、写真図版の編集を行った。

また、これらの作業と並行して、本文原稿・遺物観察表等の執筆を順次進めていった。

遺構図・遺物図・遺構写真・遺物写真・本文原稿・遺物観察表等のレイアウトを作成した後にデジタル編集を行い、本報告書の原稿を作成した。

作成された原稿は、指名競争入札によって落札した業者に委託され、印刷・製本の業務を実施する。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受け、納品された発掘調査報告書

は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係各機関へ発送する作業を行う。

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物の各種図面・写真等の記録類を収納する作業を実施した。

発掘調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物にかかる各種図面及び写真等の調査記録資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

第1章参考文献

- 群馬県2007『はばたけ群馬・県土整備プラン2008-2017』
- 群馬県2013『はばたけ群馬・県土整備プラン2013-2022』
- 群馬県2014『はばたけ群馬プラン・第14次群馬県総合計画・重点プロジェクト(平成26年4月1日改訂)』
- 群馬県2018『はばたけ群馬・県土整備プラン2018-2027』
- 群馬県県土整備部道路整備課(道路企画室) 2013『群馬がはばたくための7つの交通軸構想!』
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2018『年報』37
- 群馬県統合型地理情報システム「マッピングぐんま」
<http://mapping-gumma.pref-gumma.jp/pref-gumma/top>

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境

安中市安中所在の大島田Ⅱ遺跡、同市下秋間所在の沼田遺跡が所在する安中市は、群馬県の南西部に位置する人口約6万人の市である。近世には中山道の宿場町として市内の板鼻・安中・松井田・坂本が栄え、安中藩の城下町でもあった。

昭和30(1955)年に原市町・磯部町・東横野村・岩谷野村・板鼻町・秋間村・後閑村の3町4村が安中町と合併し、さらに昭和33(1958)年に市制が施行され安中市となった。平成18(2006)年3月18日に、西に隣接する松井田町と合併し、現在の安中市が成立した。

現在の安中市の市域は、北側及び東側を高崎市と、南側大部分を富岡市と、南西側を下仁田町と、西側を長野県軽井沢町と接する。

地形は、西部に県境となる碓冰峠、北部に榛名山、南部に妙義山と三方を山に囲まれ、市域の西端部は上信国境の山岳地帯であり、市と長野県との県境には標高1,000m級の山々が連なっている。

市域の中央部には東西方向に碓冰川とその支流である九十九川、柳瀬川などが並行して流れしており、市域東端のやや手前付近で、いずれも碓冰川に合流している。碓冰川とその支流の流域のほとんどが安中市域内に収まっている。

碓冰川は、利根川水系烏川の支川で、群馬県安中市と長野県軽井沢町の境界に位置する一ノ字山に源を発し、途中で霧積川、中木川、九十九川、柳瀬川等39河川を合流しながら安中市を貫流し、高崎市高松町付近で烏川に合流する流域面積約291km²、本川流路延長約36kmの本県西部地域を代表する一級河川である。

九十九川には、北西側から増田川、後閑川、秋間川など北西—南東方向に流れる支流が次々と合流しており、各河川流域には河岸段丘や河川低地が発達している。これらの河川の下流沿岸は丘陵地や平坦地となっており、中上流部では、支流の河川が山地、丘陵地の間に多くの谷地を形成している。また、台地の多くは畑作地、低地

は水田として活用され、居住地は台地及び低地に営まれている。市街地は東部の碓冰川、九十九川、柳瀬川に挟まれた東西に長い平坦地に形成され、その周囲の河川沿岸に農地・農村集落地が展開する。安中市街地の標高は約180m前後、市域最高点は、市域の北西隅付近、長野県との県境に位置する留夫山で1,591mである。

市域の約2/3以上を占めている丘陵の多くは山林で覆われているが、近年では高速交通網の発達に伴ってゴルフ場に開発された場所も少なくない。市域の丘陵は、秋間丘陵とその分岐丘陵である後閑丘陵・岩谷丘陵・松井田丘陵の一部からなっている。秋間・後閑丘陵では秋間川・後閑川によって開析された谷地形が発達している。

いずれの丘陵も基盤が約1,500～1,700万年前に堆積した第三紀層で構成され、その上を主にローム層からなる第四紀の堆積層が覆っている。

市域内に所在する台地の多くは河岸段丘台地で、火砕流台地は市域東部の板鼻地区北部で見られる。河岸段丘の内の上位段丘面と中位段丘面が台地を形成している。台地の内部は小河川によって樹枝状に低地が形成され、谷津田となっている。遺跡の多くは台地上に形成されており、長く居住地として、あるいは生業活動の場として利用してきたことが判明する。

市域内に所在する低地は、河岸段丘の下位段丘面と河川低地面からなり、その多くは現在水田となっている。弥生時代から古墳時代にかけてどの程度水田化が進行していたかは明らかではないが、市内低地部における平安時代以降の水田遺跡の検出事例は多く、かなり広範囲に水田化が進んでいたものと推測できる。

下位段丘面は河床からおおむね5～20mの高さを有しており、約15,000年前ごろに形成されたと考えられている。市域では碓冰川と九十九川流域においてよく発達している。碓冰川流域では磯部面が最も広く、九十九川流域では国衙、小日向、下後閑地区などで、基盤の第三紀層を不整合に覆って砂礫層が堆積している。

一方、河床から約5m以下の高さにある河川低地面では、基盤の第三紀層を覆って砂礫層が堆積しており、



第3図 周辺地形分類図(国土交通省国土政策局国土情報課5万分の1都道府県土地分類基本調査(棲名山・富岡)を一部改変)

約10,000年前後に形成されたものと考えられている。九十九川、碓冰川、高田川流域において発達しており、特に九十九川流域の下後閑付近、九十九川と碓冰川との合流点よりも東側に広く分布している。九十九川流域の河川低地面では、平安時代の水田遺跡が広範囲にわたって分布している。

第1項 大島田Ⅱ遺跡

大島田Ⅱ遺跡は、安中市松井田町細野の仙ヶ滝を源とし、北北西から流れる増田川と合流して後閑、中後閑、下後閑を西から東へ流れる九十九川が碓冰川と合流する九十九川の上流、秋間川との合流点の西約1.2km、碓冰川との合流点の約2.5km西の左岸に位置し、標高約150mの河川低地面に立地している。安中市中心市街地から北に約1kmの位置である。

九十九川も碓冰川も近年までかなり氾濫の激しい河川であったが、現在、流域では安定した水田が形成されている。

調査対象地は、安中市役所の北西約0.9kmの位置、安中市立スポーツセンターの東側に隣接する南北約110m、東西約20～22mの南北に長い長方形形状を呈する範囲で、北側は九十九川左岸の丘陵崖線直下の低地部に立地し、南側は碓冰川支流の九十九川左岸堤防上の道路にそれぞれ接している。調査区北側に接する丘陵部分はオープンカット工法となるため、調査区北端の東側が段状に大きく広がった形状となっている。

今回の調査地点の東側一帯は、安中市教育委員会が平成3(1991)年に圃場整備事業に先立って発掘調査をした大島田遺跡である。明瞭な遺構は視覚的には確認されなかったものの、プラント・オパール分析の結果、天明3(1783)年浅間山噴火時に降下した軽石As-Aの下層から近世の水田遺構の存在の可能性を示すような良好な結果が得られている(安中市教育委員会編『九十九川流域遺跡群1 平成3年度圃場整備事業九十九川下流地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1993)。

第2項 沼田遺跡

沼田遺跡は、安中市中心市街地の北約1.5kmに位置し、秋間川右岸の標高約150mの下位段丘面に立地する。大島田Ⅱ遺跡の北東約0.6kmの位置に当たる。

本遺跡が所在する秋間地区は、榛名山南麓に位置し、東流する九十九川と秋間川に挟まれた丘陵地帯である。秋間丘陵の南側を秋間川が、左岸から流れ込む支流の久保川、神水川、蘿稲川、日向川などを集めて東流している。これら秋間川の支流群は、秋間丘陵を浸食し、いくつもの舌状の谷戸を形成している。秋間川の流域では、小規模な砂礫堆積物から形成される沖積低地が河川の周囲に分布しており、現在では水田耕作が営まれ、集落は河川に沿って、標高約150～300m前後の地点に展開している。

本遺跡は、この秋間川と九十九川と合流する秋間丘陵東南端付近に位置しており、合流点の北西約1.1kmに位置している。

調査対象範囲は一般県道と合流する地点であるため、一般県道安中榛名湖線の下り車線への接続部分を含む。

第2節 歴史的環境

第1項 旧石器時代

群馬県安中市の碓冰川流域においては、現在7ヵ所の旧石器時代の遺跡が確認されている。この中でも板鼻の古城遺跡(15)及び中野谷の中野谷遺跡群からは群馬編年第1期に相当する旧石器が出土しているが、碓冰川流域で旧石器が出土したいずれの遺跡も、大島田Ⅱ遺跡及び沼田遺跡からはそれぞれ5km以上離れている。

大島田Ⅱ遺跡及び沼田遺跡の周辺からは、今のところ旧石器時代の確実な遺跡は存在していないのが現状である。

第2項 繩文時代

大島田Ⅱ遺跡及び沼田遺跡の周辺地域においては、旧石器時代の遺跡と同様、縄文時代の遺跡もあり多くない。

大島田Ⅱ遺跡の北東約3.5km・沼田遺跡の東約3.2kmに位置する前出の古城遺跡、大島田Ⅱ遺跡の南約0.5km・沼田遺跡の南西約1.2kmに位置する小峰遺跡(5)、大島田Ⅱ遺跡の南東約0.6km・沼田遺跡の南約1.15kmに位置する植松遺跡(6)、大島田Ⅱ遺跡の南東約3.1～3.3km・沼田遺跡の南東約3.3～3.5kmに位置する野殿北屋敷遺

跡(23)・西殿遺跡(24)・堀谷戸遺跡(25)、大島田Ⅱ遺跡の南東約2.5km・沼田遺跡の南東約2.9kmに位置する三本松遺跡(26)も縄文時代の遺物散布地として安中市遺跡台帳や群馬県統合型地理情報システム「マッピングぐんま」遺跡地図に掲載されている。

大島田Ⅱ遺跡の南東約1km・沼田遺跡の南東約1.5kmに位置する地尻・地尻Ⅱ遺跡(16)からは中期の土坑が検出され、遺物が出土している。また、大島田Ⅱ遺跡の南東約0.8km・沼田遺跡の南南東約1.3kmに位置する植松・地尻遺跡(8)からは草創期の有舌尖頭器と中期加曾利E3式の土器片が出土し、縄文時代中期の土坑1基が検出されている。大島田Ⅱ遺跡の南東約1.15km・沼田遺跡の南東約1.5kmに位置する西町・谷津遺跡(18)からは、遺構は検出されてはいないものの、前期から後期の土器が出土している。大島田Ⅱ遺跡の南東約1.1km・沼田遺跡の南東約1.5kmに位置する安中城Ⅰ・Ⅱ遺跡(9)からも縄文時代前期中葉有尾式、前期後葉諸礎b式、中期後葉加曾利E式を含む前期中葉～中期後葉の土器・石器片が出土したが、遺構の検出には至っていない。

縄文時代の竪穴建物は大島田Ⅱ遺跡・沼田遺跡周辺地域ではまだ1棟も発見されていない。周辺地域において確認できた縄文時代の遺構や遺物は今のところまだあまり多くはないが、前期から後期にかけての小規模な集落が営まれていた可能性は考えられる。

第3項 弥生時代

大島田Ⅱ遺跡及び沼田遺跡周辺では、前出の小峰遺跡、植松遺跡、古城遺跡、地尻・地尻Ⅱ遺跡などが弥生時代の遺物散布地として安中市遺跡台帳や群馬県統合型地理情報システム「マッピングぐんま」遺跡地図に掲載されている。

前出の植松・地尻遺跡からは中期後半の竪穴建物1棟が検出され、栗林式の壺・壺・高坏などが出土した。また、遺構外からも栗林式の土器片十數点と磨製石器が出土している。また、前出の三本松遺跡では、発掘調査は行われていないものの中葉前半の壺が1点出土しており、同時期の土器片の散布が見られる。

大島田Ⅱ遺跡の東約2.85km・沼田遺跡の南東約2.75kmの中宿在家遺跡(12)からは遺物包含層中から後期の壺1点と甕片4点、石器片1点が出土しているが、弥生時代

の遺構自体は検出されていない。

大島田Ⅱ遺跡・沼田遺跡周辺における弥生時代の遺構・遺物は、現在のところ非常に僅少であると言える。

第4項 古墳時代

古墳時代の集落や古墳は、現在のところ碓氷川左岸の安中台地からはあまり多くは発見されていない。

前出の古城遺跡や三本松遺跡は古墳時代の遺物散布地として安中市遺跡台帳や群馬県統合型地理情報システム「マッピング群馬」遺跡地図に掲載されているが、発掘調査によって遺構が検出されているわけではない。

大島田Ⅱ遺跡の南東約0.8km・沼田遺跡の南南東約1.3kmに位置する前出の植松・地尻遺跡からは古墳時代前期～後期の竪穴建物が7棟と終末期～奈良時代初頭頃の竪穴建物1棟が検出されている。また、大島田Ⅱ遺跡の南東約3.1～3.3km・沼田遺跡の南東約3.3～3.5kmに位置する前出の野殿北屋敷遺跡や西殿遺跡、堀谷戸遺跡からも古墳時代後期集落が検出されている。とくに碓氷川南岸の東部に展開する岩野谷丘陵に立地する堀谷戸遺跡からは後期中葉から後半にかけての竪穴建物37棟と竪穴状遺構・井戸などの遺構が検出された。野殿地域における開発の様相を考える上で重要な遺跡である。

大島田Ⅱ遺跡及び沼田遺跡周辺地域における代表的な古墳としては、大島田Ⅱ遺跡の北東約0.25km・沼田遺跡の南約0.35kmに位置するめおと塚古墳(安中14号墳)(22)がある。秋間川と九十九川との合流地点付近に位置する小間集落には集落の分布と重なるように古墳時代後～終末期の古墳が7基ほど点在している。めおと塚古墳は、この小間集落の背後西側に当たる段丘上に立地する径約20m・高さ約2mの終末期の円墳である。この、めおと塚古墳が立地する段丘は、秋間川と九十九川とに挟まれた段丘であり、大島田Ⅱ遺跡と沼田遺跡の中間に横たわる丘陵である。

なお、1963(昭和38)年に『安中市誌』の編纂事業に伴って、群馬大学教育学部尾崎研究室によって横穴式石室部分のみが発掘調査されたが、墳丘部の測量や発掘調査は行われていない。

石室は羨道・前室・玄室からなり、ほぼ南に向かって開口している。石室の全長は8.74m、羨道の長さは3.44m、羨道の前幅は1.03m、前室の長さは2.14m、前

室の前幅は1.02m、玄室の長さは2.26m、玄室の前幅は1.96m、玄室の奥幅は2.20m、玄室の高さは2.00～2.10mの規模を呈する。羨道の入口には、側壁最前列の左右両脇に高さ約1.4mの門柱状の石が据えられ、羨門部を形成している。截石切組積石室で副室構成であり、前橋市總社町に所在する總社古墳群の宝塔山古墳の構造との類似・関連が想定される。

第5項 古代

律令制下において、群馬県域はほぼ上野国の領域に当たっており、国内には「碓氷・片岡・甘楽・多胡・綿野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初13郡、和銅4(711)年に多胡郡設置で14郡)。

大島田II遺跡及び沼田遺跡が所在する安中市は、律令制下には碓氷郡の郡域に入る。1878(明治11)年に行政区分として発足した近代碓氷郡の領域は、近世の碓氷郡をほぼ踏襲したものと考えられる。近代碓氷郡では、現在の高崎市域の碓氷川以北と烏川以西及び鼻高町が含まれる一方、現在の安中市松井田町北野牧及び西野牧は郡域には入っていないかった。古代碓氷郡が、近世・近代の碓氷郡と全く同一の範囲であるとは考えにくいものの、詳細なところは不明である。

『和名類聚抄』によれば、碓氷郡には「飽馬、石馬、坂本、磯部、石井、野後」の6郷が置かれていた。「長元3(1030)年上野国不与解由状案」(いわゆる「上野国交替実録帳」)の諸郡官舍項には、郡名を欠くが郡家の館に関する記述が遺るもの、郡家所在地についての記述は欠いている。

碓氷郡内の6郷については、いずれも現在の安中市内にそれらの郷名を通じる地名が遺っている。飽馬(あきま)郷は、現地名から現在の安中市下秋間・中秋間・上秋間など秋間地区一帯と見て間違いないだろう。石馬(こくま)郷は、現地名から大島田II遺跡及び沼田遺跡からも程近い九十九川と秋間川の合流点付近の安中市小間地区一帯である可能性が指摘されているが、不明な点も少なくない。坂本(さかもと)郷は、碓氷峠に近い東山道駿路の要衝である坂本駅家とも関連する地名であり、現地名や地勢から見ても現在の安中市松井田町坂本周辺と考えてほぼ間違いない。磯部(いそべ)郷も、現地名から見て安中市磯部地区を中心とする周辺一帯と見てまず間違

いない。石井(いわい)郷は、現地名から安中市東部の岩井地区から板鼻地区にかけての地域と考えられている。野後(のじり)郷は、東山道駿路の野後駅家とも共通する地名であり、東山道駿路に面した位置と考えられる。すなわち現在の安中市中心市街地である安中地区の九十九川右岸地域から野尻の地名がある上野尻・下野尻地区一帯にかけての地域と考えられる。

上の古代碓氷郡内各郷の所在地の比定が正しいとすれば、大島田II遺跡は碓氷郡石馬郷の範囲内であった可能性が高いものと考えられる。一方、沼田遺跡は所在地名が下秋間であることから見れば飽馬郷の範囲にあった可能性が考えられるところであるが、現在の安中市小間地区とも近い位置であるので、その点から見れば石馬郷の範囲内であった可能性も全くは否定できない。秋間川を境に左岸側が飽馬郷、右岸側が石馬郷の範囲と見るのが自然とすれば、沼田遺跡は、現在の秋間川右岸側に位置しているので石馬郷であった可能性が俄かに高くなる。ただ、沼田遺跡では古代の遺構が全く検出されておらず、また、当該地域においては奈良・平安時代における秋間川の流路も全く検出されていないため、沼田遺跡が所在したまさにその場所が、古代においては秋間川の右岸側か左岸側のいずれに位置していたか判別つき難いのが実情である。

安中市域における律令制下の歴史的環境として特筆すべきは、都と陸奥国府との間の東日本内陸部を結ぶ古代国家の一級幹線道路である東山道駿路が、現在の安中市中心市街地である碓氷川によって形成された中位段丘面の西側縁辺付近を東西に通っており、郡内には2カ所の交通支援官衙である駅家と、平安時代の昌泰2(898)年に碓氷峠に設けられた碓氷関が存在していたことである。駅家は固有の経済基盤と共に法定業務に伴う地域住民の徵発権も有しており、大島田II遺跡・沼田遺跡の所在する碓氷郡域における奈良・平安時代の動向を考える上で、東山道駿路とそれに伴う2カ所の駅家、碓氷関の存在が地域に与えた影響は大きかったものと考えられる。

碓氷郡野後郷の故地の一部と考えられ、野後駅家の存在も想定される地名を有する上野尻と高別当の大字境界に沿って旧中山道と斜めに交差する直線的な地条帶痕跡を古代東山道駿路の痕跡と考える説があり、安中地内に

おいてこの地条帶に対して直角に3カ所のトレンチを入れ、駅路の具体的な遺構の検出を試みたが、古代の駅路に関する遺構を検出することは出来なかつた。

大島田II遺跡及び沼田遺跡周辺において、安中市遺跡台帳や群馬県統合型地理情報システム「マッピング群馬」の遺跡地図に掲載されている奈良・平安時代の遺跡や遺物散布地は、それ以前の時代のものと比べると急増する。しかしながら具体的に遺構・遺物の様相がはっきりしている遺跡は必ずしも多くはない。

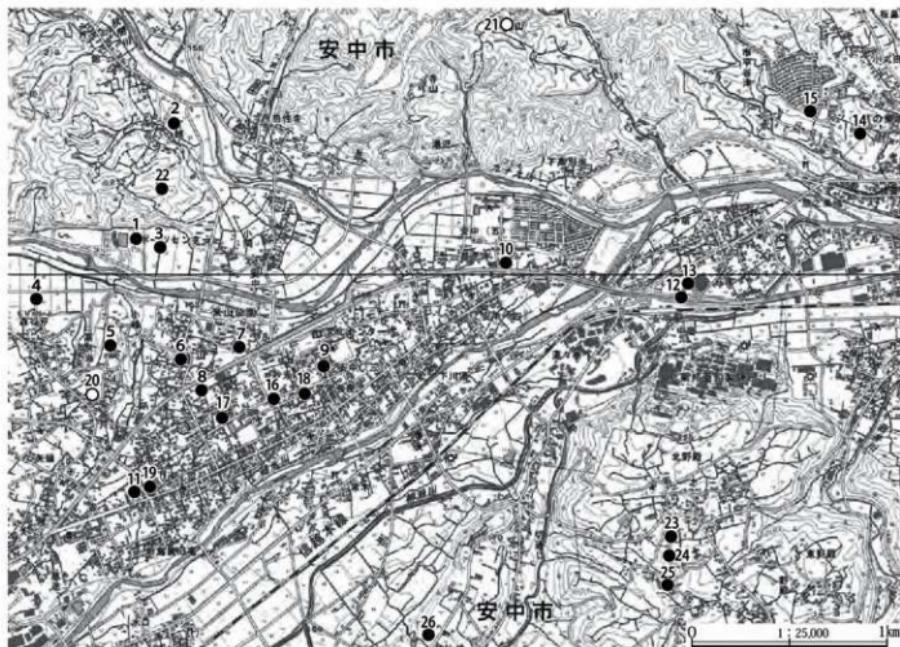
沼田遺跡の北から北西約0.5～5.0kmの範囲にわたって、秋間丘陵中の東西約7km・南北約3kmの範囲に約50の支群が分布する秋間古窯跡群がある。群馬県内屈指の古代大窯跡群で、7世紀初頭から9世紀末葉までの約300年にわたって操業され、量産されるようになった8世紀以降、製品は東毛地域にまで及んでいる。

奈良・平安時代の集落は、大島田II遺跡の南東約1km・沼田遺跡の南東約1.5kmに位置する地尻・地尻II遺跡、

大島田II遺跡の南東約0.8km・沼田遺跡の南南東約1.3kmに位置する植松・地尻遺跡、大島田II遺跡の南東約3.1～3.3km・沼田遺跡の南東約3.3～3.5kmに位置する野殿北屋敷遺跡や西殿遺跡、堀谷戸遺跡などから検出されている。

植松・地尻遺跡からは規則的に配置された奈良時代の掘立柱建物7棟とそれを閉鎖する2条の柵が検出された。掘立柱建物は廂付きのもの2棟、総柱2棟、側柱3棟で、総柱建物は桁行2間×梁間3間のものと3間四方のものとで、大型である。また、桁行5間以上×梁間3間の廂付き大型側柱建物が検出されている。また、「評」と刻書された7世紀末～8世紀初頭の須恵器や帶金具、畿内模倣土師器などが出土しており、これらの建物群が官衙的性格の施設の一画を構成していた可能性を考えられている。また、平安時代9～10世紀ごろとみられる堅穴建物が4棟検出されている。

植松・地尻遺跡の東約0.3kmの位置に近接する地尻、



第4図 周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000電子地形図「富岡」「下室田」平成30年8月7日発行を使用)

第1表 周辺遺跡一覧表

	遺跡	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世	種別・概要	文 献
1	大島田Ⅱ遺跡						○	近世水田、複数坑群	本報告書	
2	沼田遺跡						○	近世復旧坑群	本報告書・18	
3	大島田遺跡						○	近世水田	1・3	
4	荒浜遺跡					○		古代水田	2・3	
5	小峰遺跡	○	○		○	○		散布地、城館	3	
6	植松遺跡	○	○		○	○		散布地、城館	3	
7	虹ヶ谷戸遺跡				○			散布地、城館	3	
8	植松・地尻遺跡	○	○	○	○			散布地、官衙、集落	3・4	
9	安中城Ⅰ・Ⅱ遺跡	○			○	○	○	散布地、集落、城館	3・5・19・20	
10	安中内出野					○		散布地、集落、城館	3・19・20	
11	並木遺跡				○	○		散布地、集落	3・6・7	
12	中宿在家遺跡			○	○	○	○	散布地、水田、城館	3・8	
13	中宿在家Ⅱ遺跡				○	○	○	散布地、水田、城館	3・9	
14	板鼻城					○		散布地、城館	3・19・20	
15	古城遺跡(板鼻古城)	○	○	○	○	○	○	○	散布地	3・10・19・20
16	地尻・地尻Ⅱ遺跡	○	○		○	○	○	散布地、集落、城館(安中城関連)	3・11・19・20	
17	堆塙遺跡					○		散布地、集落	3・12・19・20	
18	西町・谷津遺跡	○				○	○	散布地、城館(安中城関連)	3・13・19・20	
19	上野尻遺跡				○	○		散布地、集落、東山道駅路推定地	3・6・7・19・20	
20	高別当瓦塔出土地				○			散布地	3	
21	桃山瓦塔出土地					○		散布地	3	
22	めむと塚吉塙(安中14号墳)				○			古墳	3・14・15	
23	野殿北屋敷遺跡	○	○	○				散布地、集落	3・16・19・20	
24	西路遺跡	○	○	○	○	○		散布地、集落、城館	3・16	
25	堀谷戸遺跡	○	○	○	○	○	○	散布地、集落	3・17	
26	三本松遺跡	○	○	○	○	○	○	散布地	3	
文献										
1	安中市教育委員会編1993『九十九川下流遺跡群1 平成3年度团体營柵場整備事業九十九川下流地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
2	安中市教育委員会編1994『九十九川下流遺跡群2 平成4年度团体營柵場整備事業九十九川下流地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
3	安中市教育委員会編2011『安中市遺跡分布地図・市内遺跡詳細分布調査報告書』									
4	安中市教育委員会編2005『植松・地尻遺跡・店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
5	安中市教育委員会編2011『安中城Ⅰ・Ⅱ―安中市文化センター駐車場建設事業・安中市立安中小学校建て替え事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
6	安中市教育委員会編2010『木目道路―安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
7	安中市教育委員会編2009『土井遺跡―土地分譲造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
8	群馬県埋蔵文化財調査事業団編1997『中宿在家遺跡・上農同一里塚遺跡―一般国道18号(高崎安中線)地域埋蔵文化財調査報告書』									
9	安中市教育委員会編1999『中宿在家Ⅱ遺跡―カインズホーム安中店建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
10	安中市教育委員会編1988『安中古城住宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
11	安中市教育委員会編1991『地尻遺跡・地尻Ⅱ遺跡―都市計画街路下の戸・茶屋町線取付道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
12	安中市教育委員会編2009『地尻Ⅲ遺跡―安中住宅团地分譲に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』									
13	安中市教育委員会編1990『西町・谷津遺跡―都市計画街路下の戸・茶屋町線取付道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
14	群馬県編1938『上毛古墳総覧・群馬県史跡名勝天然記念物調査報告第5輯』									
15	群馬県教育委員会編2017『群馬県古墳総覧』									
16	安中市教育委員会編1988『野殿北遺跡・西殿遺跡―県営農免農道整備事業野殿地区に伴う岩井・野殿地区発掘調査報告書』									
17	安中市教育委員会編1999『堀谷戸遺跡―特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
18	安中市教育委員会編2000『秋間川下流遺跡群―担い手育成基盤整備事業秋間川下流地区は場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』									
19	群馬県教育委員会編1988『群馬県の中世城館跡』									
20	山崎-1971～79『群馬県古墳墓址の研究』上・下、同補遺編上・下									

地尻II遺跡からも7世紀末～8世紀初頭の堅穴建物を含む遺構が検出されており、大島田II遺跡の南東約1.1km・沼田遺跡の南東約1.5kmに位置する安中城I・II遺跡からも奈良時代を中心とする堅穴建物13棟が検出された。南西約0.7kmに接する植松・地尻遺跡から検出された官衙的建物群と関連する集落と考えられる。

大島田遺跡の南西約0.75km・沼田遺跡の南西約1.5kmに位置する高別当瓦塔出土地(20)は、九十九川右岸の北向きの緩斜面から昭和21(1946)年頃から45(1970)年頃にかけて断続的に瓦塔片が採集された場所である。採集された瓦塔片は、屋蓋部片が計12点、層塔軸部片が計5点で、8世紀後半～9世紀前半頃のものと考えられている。出土地は瓦塔生産地もしくはそれに極めて近い場所と考えられている。

大島田遺跡の北東約2.25km・沼田遺跡の北東約1.75kmに位置する桃山瓦塔出土地(21)からも瓦塔片が出土している。安中市街地の北東部に連なる湯沢山と呼ばれる丘陵地帯の北向きの斜面から、昭和29(1954)年に同地の開墾作業中に瓦塔の屋蓋部片が1点採集された。高別当出土の瓦塔片よりもかなり新しい時期のものと考えられている。

大島田II遺跡の東約2.85km・沼田遺跡の南東約2.75kmに位置する中宿在家遺跡とその北東側に隣接する中宿在家II遺跡(13)からは、天仁元(1108)年に降下した浅間山軽石As-B層の下から古代の水田の遺構が検出された。上野国内では浅間山に近い地域に当たる碓氷郡内では、天仁元年の浅間山噴火に伴う降灰被害は甚大であり、郡内の耕作地は壊滅的な打撃を受けたものと考えられている。

第6項 中世

鎌倉初期のものと見られる「中院家領目録案」(久我家文書)に見える「上野国石井庄」の故地を安中市岩井地区に求める説があり、また永禄4(1561)年頃のものとみられる「上杉氏所領目録」(彦部文書)にみえる「宇須井庄之内飽馬郷岩戸村・高別当村・池尻村」という記述から、「石井庄」は「宇須井(碓氷)庄」の誤記と見る説もある。

少なくとも鎌倉時代初期には、東毛地区の新田莊のように、郡名を冠する一郡規模の巨大な莊園が、すでにこの地には形成されていたことになる。「宇須井(碓氷)庄」

がいつ頃にどのような経緯で成立したかを示すような史料は皆無であるので、来歴は不明であるが、碓氷郡の郡名と共に通する莊園名であり、名高い新田莊と同様、平安時代後期頃に郡の一部ないし大部分が莊園化されていた可能性も考えられる。なお、中院家は、鎌倉時代から南北朝時代にかけて上野國の知行国主であった。

また、安中市域には現高崎市八幡・豊岡・里見から現安中市板鼻にかけての地域に八幡莊が所在していた。鎌倉期には有力御家人の安達氏が、南北朝期には新田氏が、さらに室町期には関東管領上杉氏が支配しており、守護所が置かれている。中世、現在の安中市域は、莊園が卓越した場所であった。

鎌倉時代初期の元久2(1205)年正月三十日付の関東御教書写(神葉集所収文書)には、有力御家人安達景盛の祠書として「上野國板鼻別宮預所」と見え、板鼻八幡宮の管理に当たっていたことがわかる。

『吾妻鏡』によれば、上野國碓氷郡に関わる御家人として八幡莊里見の地名を名字とする新田氏支族の里見氏があり、また、碓氷郡磯部郷に入部した佐々木盛綱(『吾妻鏡』建仁元年4月3日・5日、5月14日条)、飽馬郷の飽馬齋藤氏らの名が見えている。

佐々木盛綱は鎌倉幕府の草創に貢献した有力御家人であり、磯部郷は所領の一つであったと考えられている。伝説上、磯部城の築城者に擬せられているものの、直接的な関連は考えにくい。一方、飽馬齋藤氏は、武藏国太田莊を基盤とした齋藤実盛の一族と見られ、鎌倉時代初期に飽馬郷に入部し、元久2(1205)年6月に起った畠山重忠の乱では上野守護安達景盛に従っている。その後も安達氏の被官であったが、弘安8(1285)年に起こった霜月騒動で、安達氏本宗家と共に滅ぼし、以後の動向は不明である。

鎌倉幕府滅亡後の建武の新政では後醍醐天皇方についた新田義貞が上野国司・守護に任じられるが、まもなく足利尊氏が持明院統の天皇を擁して幕府を樹立すると母方の外戚に当たる上杉氏の当主を関東管領・上野守護職に任じ、以後、上杉氏が代々世襲した。当時の文書には、現安中市周辺地域に、安中氏・飽間氏(飽馬齋藤氏との関係は不明)、依田氏などの在地武士たちの名が見える。

室町將軍と鎌倉公方との本格的な朝権争いに発展した享徳の乱は、享徳3(1455)年12月から文明14(1483)年11

月まで30年近く続いた。関東管領・上野守護職上杉頸定は、関東での戦乱が激化する中、鎌倉から上野国守護所(板鼻)、さらには平井城へと遷るが、天文20(1551)年、北条氏との合戦に敗れ、永禄元(1558)年、越後の長尾景虎を頼って越後国に逃亡、西上野は北条氏の支配下に入り、北条氏は関東八箇国を制覇した(『小田原旧記』)。

越後の長尾景虎は、永禄3(1560)年、上野国に侵攻、国内の諸城を次々と落として小田原城下まで迫ったが、本拠地越後に戻ってしまうと、甲斐の武田晴信が西上野最大の在地勢力である長野氏を屈服させ、永禄9(1566)年9月に箕輪城を、翌10(1567)年4月には、旧上野国衙蒼海城を落して利根川以西の上野国を武田領とした。

武田晴信死き後の天正10(1582)年、織田信長は武田氏を滅ぼし、信濃・甲斐、西上野などの武田旧領は信長の支配下に入った。信長は重臣の滝川一益を関東管領に任じて駿橋城に配置、関東の武田旧領の支配を任せると共に北条氏への備えとし、松井田城には一益の臣である津田小平次が入城したが、同年、信長が本能寺の変で横死すると、滝川一益は侵攻してきた北条氏との合戦に敗れ、関東一円は再び北条氏の領するところとなった。北条氏の西上野支配の拠点は箕輪城であったが、信濃進出のために松井田城が重要視され、北条氏家臣である大道寺政繁が入城した。松井田城はこの時期に大規模な改修を受け大城郭に変貌している。天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原攻めに際して、松井田城は豊臣方の前田利家・上杉景勝軍によって攻められ、落城した。

安中市内には中～近世城郭・城館が44カ所確認されている。市域の地形は北部に山地、南側に碓氷川の河岸段丘、中央部は碓氷川と九十九川に挟まれた東西に細長い台地が続き、南北が両河川によって分断されるという特徴がある。また、歴史的背景として、中部山岳地帯から関東平野への出入り口である碓氷峠を間に控え、東西に古代東山道駅路、中世鎌倉街道、近世には中山道といった幹線交通路が通る交通の要衝として果たす役割も大きかった。このような点は中世城館の分布にも反映されている。大島田II遺跡・沼田遺跡周辺地域である碓氷川と九十九川とに挟まれた台地の南北両側に築かれた城郭・城館は、西の碓氷峠側からのルートを押さえることを目的として築造されたものと考えられる。

これらの城郭・城館は、築城時期や築城者・在城者が

具体的に明確ではないものがほとんどで、そのほとんどが16世紀後半、戦国時代における甲斐武田氏、越後上杉氏、相模北条氏らによる西上野における朝権闘争が激しく行われた時期に集中すると考えられ、存続時期も短かったようで、武田氏滅亡後には急速に衰退し、ほとんどが廃城になっている。

本遺跡の近隣の城郭・城館遺跡としては、まず、大島田II遺跡の南東約1.1km・沼田遺跡の南東約1.5kmに位置する安中城I・II遺跡を含む安中城があげられる。碓氷川と九十九川とに挟まれた中位段丘上に立地する広大な城館であるが、安中市街地中心部とほぼ重なった位置にあって後世に甚だしく攢乱されていることと、近世安中城築城時に大規模な造成を受けているので、中世の遺構の残存状態は極めて良くない。安中城は、戦国時代の永禄2(1559)年に安中忠政が築城したと言われている。安中氏は武田晴信の西上野支配により武田氏に臣従したが、武田氏と共に滅亡し、中世安中城は廃城となった。

大島田II遺跡の東約2km・沼田遺跡の南東約1.9kmに位置する安中内出砦(10)は、中世安中城の出城の一つと考えられている。

大島田II遺跡の東約2.85km・沼田遺跡の南東約2.75kmに位置する中宿在家遺跡からは、東西45m以上・南北40m以上の範囲内に中世の掘立柱建物8棟、溝2条、納屋と見られる方形竪穴状遺構・井戸各1基、多数の土坑・ピット等の遺構が検出された。建物群はいずれも軸を同じくして整然と配置されており、扉が付いた大型の建物も検出された。遺構・遺物の状況から12世紀後半～14世紀前半頃の中世居館の一部と考えられる。なお、調査範囲内では居館内を区画する溝や防衛のための堀、土塁等はまったく検出されていない。

中宿在家遺跡の北東側に隣接する中宿在家II遺跡からも、隣接する中宿在家遺跡と同時期の中世居館が検出されている。掘立柱建物8棟、納屋と見られる方形竪穴状遺構・井戸各1基、柵1条、土坑・ピット多数が検出された。こちらでも扉が付いた大型建物や仏堂と見られる小型建物などが検出され、隣接する中宿在家遺跡よりはやや新しい13～15世紀の中世居館の一部と見られている。隣接する中宿在家遺跡と同様、調査範囲内では居館内を区画する溝や防衛のための堀、土塁等はまったく検出されていない。

中宿在家遺跡及び中宿在家II遺跡から検出された遺構・遺物の様相からは、軍事的な性格よりも交通の要衝における政治・経済的な拠点としての性格が看取出来るとの評価がなされている。

大島田II遺跡の北東約3.75km・沼田遺跡の東約3.5kmに位置する板鼻城(14)は、碓氷川と九十九川との合流点の約1km下流の左岸、標高約168mの台地上に立地する東西約400m・南北約350mの広大な範囲に及ぶ「蝶郭式」あるいは「螺旋塙式」と称される城郭で、築城時期や築城主体について示すような確実な史料はないが、武田晴信が永禄9(1565)年に西上野に侵攻した際に築城を命じた武田方の城郭とみる説が有力である。天正18(1590)年、上杉景勝に攻略され廃城となった。板鼻城が所在する板鼻地区は、古代東山道駿路、中世あづま道・鎌倉街道、近世中山道が通る交通の要衝であり、戦略的に重要な地點でもあった。この地に城郭・城館が築かれるのは当然の帰結である。

市道建設や宅地造成に先立ってごく一部が発掘調査され、上幅約8.0m・下幅約4.5m・深さ約3.0mの本丸を囲む内堀や、上幅約9.0m・下幅約1.0～2.0m・深さ約3.0～3.5mの外堀、堀に架かる橋の橋脚、戸口などの遺構が検出され、13～16世紀代の土器・陶器類が出土している。

大島田II遺跡の北東約3.5km・沼田遺跡の東約3.2km・板鼻城の北西約0.25kmに位置する古城遺跡(板鼻古城)は、板鼻城と同様、碓氷川と九十九川の合流点から約1km下流の左岸、標高160～175mの台地上に立地しており、東西約150m・南北約120mの平行四辺形状の範囲が板鼻城の前身城館との伝承があるが、築造主体などについては伝承の域を出ず、不明である。住宅団地造成に伴って一部が発掘調査され、掘立柱建物17棟、櫛12条、井戸及び地下式坑各2基、館北堀などが検出され、14～15世紀のものを主体とする土器・陶器類が出土した。発掘調査によって検出された館北堀は、上幅約4.0～4.5m・下幅約0.5～1.0m・深さ約3.0mの規模であった。発掘調査の所見からは板鼻城よりも古い時期の城館である可能性が高いことが判明したが、板鼻城の前身城館であるか否かという点や築造主体などについては明らかではない。

第7項 近世

豊臣秀吉による小田原北条氏攻略後の徳川家康関東入封に伴い、関東一円は家康の支配するところとなった。江戸に本拠地を構えた家康は、徳川四天王の一人である井伊直政を関東防衛のための西北守護の要として上野国群馬郡の箕輪城に配置した。その後、慶長3(1598)年、井伊直政は、家康の命によって、箕輪から和田に移り、和田の地を「高崎」と改めて高崎城を築城、群馬・碓氷両郡のほぼ全城を所領とした。慶長5(1600)年12月、初代高崎藩主井伊直政は、関ヶ原の戦いにおける戦功によって加増され、かつて石田三成の居城であった近江国坂田郡の佐和山城を与えられ、近江に拠点を遷したが、上野国内の領地も引き続き領有した。

慶長7(1602)年、井伊直政が没すると、嫡子直継が跡を継いで、慶長11(1606)年、新たに彦根城を築城し、井伊家の本城としたが、井伊直継の主君である徳川家康は、直継は病弱かつ将器に欠けるとして、弟の直孝に彦根藩井伊家の家督を繼承させると共に、兄・直継には別家を建てさせ、上野領3万石を分知し、碓氷郡安中に封じた。直継は名を直勝と改め、元和元(1615)年、中世安中城の繩張りの一部を利用して近世安中城を築城し入封したが、井伊氏が築城した近世安中城は城郭というより陣屋程度のものであった。現在の安中市街地中心部に当たっており、大きく述べられているため、遺構の残存状態は極めて良くない。

安中藩には、関東への出入り口である碓氷・牧の両関警固という重大な使命が課せられ、安中藩にとって重要な任務とされた。

跡を継いだ直勝の子の直好は、正保2(1645)年、三河西尾に転封され、代わって水野元綱が入部、水野氏が2代にわたって藩主の座にあった。その後、寛文7(1667)年から堀田氏1代、天和元(1681)年から板倉氏2代、元禄15(1702)年から内藤氏3代、寛延2(1749)年から板倉氏6代が藩主の座にあり、廢藩置県に至っている。安中藩は小藩ではあるものの、歴代藩主とも有力譜代大名家出身者であり、幕閣が、碓氷関警固の任に当たる安中藩を重要視していたことが伺える。

大島田II遺跡・沼田遺跡では、天明3(1783)年に起こった浅間山噴火時に降下した軽石As-Aによって埋もれた水

田の復旧坑とAs-A層下から検出された近世の水田面が検出されているが、大島田II遺跡の東側に隣接する大島田遺跡(3)を安中市教育委員会が平成3(1991)～5(1993)年にかけて発掘調査したところ、水田畦畔や溝などの遺構は検出されなかったものの、プランツ・オーバル分析の結果、浅間山軽石As-A以下の水田の存在が示唆されていた。

沼田遺跡では今回調査対象範囲の南西から南側に位置する平成7(1995)～10(1998)年度に安中市教育委員会が圃場整備に伴って発掘調査を実施した地点からも、今回調査地点と同様、天明3(1783)年降下の浅間山火山灰As-Aの上下で水田面と復旧坑・掘削工具痕が検出されている。

大島田II遺跡や沼田遺跡のように、天明3年の浅間山噴火後に水田の復旧工事が数次にわたって行われているような事例は、安中市の九十九川流域や秋間川流域以外でも佐波郡玉村町の遺跡などから検出されている。

また、大島田II遺跡の東約2.85km、沼田遺跡の南東約2.75kmに位置する中宿在家遺跡とその北東側に隣接する中宿在家II遺跡などでは平安時代後期の天仁元(1008)年における浅間山噴火時の降灰被害と同様、上野国内では浅間山に近い地域に当たる碓氷郡内では、この時の浅間山噴火に伴う降灰被害は甚大であり、郡内の耕作地は壊滅的な打撃を受けたものと考えられている。

第3節 基本土層

第1項 大島田II遺跡

大島田II遺跡では、地表下2.0～2.5mは盛土であり、これを除いて天明3(1783)年の浅間山噴火の際に降下した軽石As-Aの二次堆積層の下から深さ約0.6m前後の復旧坑群が検出された。各復旧坑の間からは掘削工具痕の凹凸が発見された。

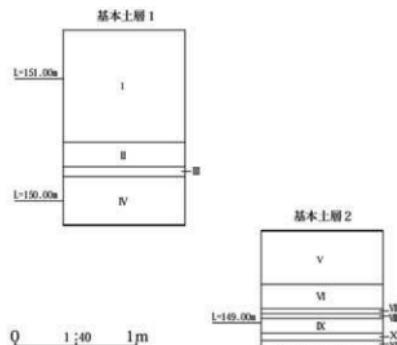
これらの復旧坑や掘削工具痕の間にAs-Aの一次堆積層が部分的に認められ、このAs-Aの一次堆積層下から天明3年浅間山噴火以前に形成されていた水田面が検出された。水田面よりも下層は九十九川によって堆積した疊層であった。

(1) 基本土層1(第5図)

- I層 10YR8/6 黄橙色土。
盛土。
II層 10YR5/1 褐灰色土。
縮まりが非常に強い。現代の圃場整備事業時の水田耕土。
III層 10YR4/6 褐色土。
浅間山軽石As-Aを少量含む。天明3年浅間山噴火後に復旧された水田の耕土。
IV層 10YR7/2 鈍い黄橙色土。
As-Aの二次堆積層。復旧坑埋土。

(2) 基本土層2(第5図、PL.21)

- V層 10YR4/6 褐色土。
粘性あり。
VI層 10YR5/1 褐灰色土。
粘性あり。
VII層 7.5YR5/6 明褐色土。
砂の堆積土。
VIII層 10YR5/1 褐灰色砂質土。
粒子細い。
IX層 10YR2/2 黒褐色土。
径10mm以下の亜円礫を含む。河川堆積物。
X層 10YR4/1 褐灰色土。
粘性強い。
XI層 7.5YR5/6 明褐色土。
径30mm～拳大程度の円礫を多量に含む砂礫層。



第5図 大島田II遺跡基本土層模式図

第2項 沼田遺跡

沼田遺跡では、地表下1.5～2.0mは盛土であり、これを除いて洪水堆積物の砂礫層下から1面目の復旧坑が検出された。

1面目の遺構確認面から厚さ0.2～0.3m程堆積土を除くと天明3(1783)年の浅間山噴火の際に降下した浅間山軽石As-Aの二次堆積層が検出され、その下から2面目の復旧坑が検出された。これらの復旧坑や掘削工具痕の間にAs-Aの一次堆積層が認められた。

このAs-Aの一次堆積層下から天明3年浅間山噴火以前に形成されていた水田面が検出された。水田面の下層は秋間川によって堆積された疊層であった。

(1) 2区北東壁基本土層(第6図、PL.18)

1層 10YR6/8 明黄褐色土。

榛名山二ツ岳軽石Hr-FPを多量に含む耕作土。

2層 10YR3/1 黒褐色土。

黒色粒、Hr-FP、橙色粒を含む。

3層 10YR4/2 灰黄褐色土。

Hr-FP、橙色粒を含む。

4層 10YR4/3 鈍い黄褐色土。

Hr-FPを含む。

5層 7.5YR3/1 黒褐色土。

Hr-FP、炭化物粒を含む。

6層 7.5YR4/3 褐色土。

Hr-FPを微量含む。

7層 As-A層。

8層 7.5YR6/4 鈍い褐色土。

鉄分を多く含む。

9層 7.5YR4/2 灰褐色土。

砂混じり。

10層 7.5YR4/2 灰褐色粘質土。

Hr-FP、砂粒を含む。

4層 10YR7/6 明黄褐色沙層。

5層 10YR5/8 黄褐色土。

Hr-FP、砂粒を含む。

6層 10YR6/6 明黄褐色土。

Hr-FP、砂粒、小礫を含む。

7層 10YR5/8 黄褐色土。

砂粒を多量に含む。Hr-FP、小礫を含む。

8層 10YR6/6 明黄褐色土。

砂粒を少量、Hr-FPを微量含む。

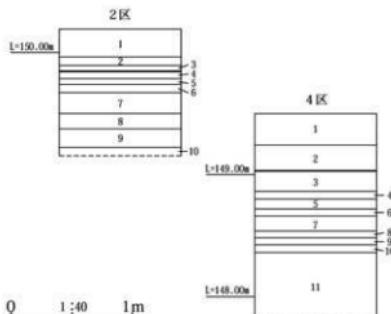
9層 10YR6/2 灰黄褐色土。

砂粒を少量含む。

10層 10YR5/4 鈍い黄褐色沙質土。

11層 10YR6/1 褐灰色砂礫土。

上層は砂層。



第6図 沼田遺跡基本土層模式図

第2章参考文献

安中市史編纂委員会編2001『安中市史4 原始古代中世資料編』

尾崎高吉監修1987『日本歴史地名大系10 群馬県の地名』平凡社

角川日本地名大辞典編纂委員会編1988『角川日本地名大辞典10 群馬県』角川書店

群馬県編1938『上毛古墳綜覧』

群馬県編2017『群馬県古墳總覧』

群馬県教育委員会編1983『群馬県の中世城跡』

群馬県史編纂委員会編1977～88『群馬県史』資料編1～10

群馬県埋蔵文化財調査事業団編1999『群馬県遺跡大事典』上毛新聞社

山崎一1971～1978『群馬県古城址の研究』上、下、補遺編上・下

群馬県統合型地理情報システム「マッピングぐんま」

<http://mapping-gunma.pref.gunma.jp/pref-gunma/top>

(2) 4区南西壁基本土層(第6図、PL.18)

1層 10YR4/1 褐灰色土。

小礫を含む耕作土。

2層 10YR5/8 黄褐色土。

疊、Hr-FPを含む。

3層 10YR5/3 鈍い黄褐色土。

第3章 検出された遺構と遺物

第1部 大島田Ⅱ遺跡

はじめに

大島田Ⅱ遺跡では、天明3(1783)年の浅間山噴火の際に降下した浅間山軽石As-A層直下と、その二次堆積層下を遺構確認面として近世の遺構を調査した。

調査区内からは、天明3年浅間山噴火の際に降下した火山灰や、噴火直後に発生した泥流によって埋没した水田を復旧するために掘削された復旧坑群17群、土坑群1条、溝2条、復旧坑群掘削前に営まれていた水田が部分的ではあるが3箇所検出された。

発掘調査では、ほぼすべての遺構は同一の確認面から検出されているが、古い時代から

- (1) 浅間山軽石As-A降下前水田
- (2) 浅間山軽石As-A降下直後の掘削工具痕
- (3) 浅間山軽石As-A降下後の復旧坑と土坑群

の3時期にわたる遺構が検出された。

現地表面下約2.00～2.50m程は現代の盛土であり、これを取り除いて浅間山軽石As-Aの二次堆積層下から復旧坑を17群検出した。復旧坑の深さは約0.60m前後である。そのうちの新1群と新2群の2群は他の復旧坑と重複して検出された。

また、約0.10～0.20m程度の各復旧坑間の高まりの部分には、復旧坑掘削前の段階における掘削工具痕の凹凸が検出された。掘削工具痕の幅は約20cm前後であり、ほぼ水平に並列した状態で検出された。

これらの復旧坑や掘削工具痕の間にAs-Aの一次堆積層が部分的に認められた。残存していたAs-A一次堆積層の下からは、水田が3枚と、それらの水田に水を引き入れるための用水の溝2条が検出された。水田と溝の間からは約50cm前後の礫を使用した畦畔状の高まりや、畦畔の間に設けられた水口が検出された。水田の表面からはわずかながら凹凸が検出され、畦畔に沿って足跡が検出された部分もある。水田は、As-Aの一次堆積層下から検出されていることから、天明3(1783)年の浅間山噴火以

前のものと考えられる。この水田面の下層からは九十九川の礫層が検出され、下層の遺構は検出されなかった。

掘削工具痕は、各復旧坑によって削平されているので、復旧坑掘削前の造作ということになるが、これらの掘削工具痕は水田面よりも深さおよそ10cm程度まで全体的に平坦面を造るように掘り下げられている。天明3年の浅間山噴火直後に、まず、降下した軽石を動き込んで水田面の復旧を試みたのであろうが、その後、噴火に伴う軽石の降下が更に大きくなつて、厚く堆積するようになり、その程度の働き込みではとても対応できなくなってしまったため、天地返しによって耕作地を復旧・再現するしか方法がなかったのだと考えられる。その結果、復旧坑が掘削されたのだと考えられる。また、ごく一部ではあるが、復旧坑の重複が確認出来た場所もあるので、一度、復旧坑掘削により天地返しを行なったものの、軽石がさらに浮上して土壤が悪化したため、同じような手法で再び天地返しが行われた箇所があったことが判明しているが、再度の天地返しの痕跡が検出出来たのは、ごく狭い範囲に限られ、また、残存状態が悪く、土層断面でしか痕跡を見出すことが出来ず、面的には全く検出出来なかつた箇所もあるので、復旧坑の掘削による天地返しが複数回行われたのは、検出範囲内でも部分的ではあったとみられる。

各群の復旧坑は、方向・深さとも各々異なつておらず、溝や畦畔を避けて掘削されている様子がうかがえるので、検出された復旧坑各群は、水田や溝の地割と対応しているものと考えられる。

平成3(1991)年に大島田Ⅱ遺跡の隣接地である大島田遺跡を安中市教育委員会が発掘調査した際には、As-A層下から水田やそれに伴う畦畔の遺構は全く検出されなかつたが、同遺跡の報告書でもすでにAs-A層下の水田が存在した可能性は示唆されていた。今回の発掘調査によって、そのことが証明できたことは、地域の歴史を解明する上で意義があることであった。

また、天明3年浅間山噴火に伴う火山災害とそれに伴つて発生した水害などの被災後の耕地復旧が数次にわ

たってなされていたことが発掘調査によって確認出来た事例としては、県内では中南部平野部の玉村町内における事例などによっても知られている。今回の調査成果によつて、安中市域の九十九川流域においても同様の状況であったことが明らかになった。

この地に住まつた人々が、天明3年の災害の後、いかに耕地を復旧し、生活再建を図つていったかということを知る上での大きな手掛かりが得られたと言えよう。

第2表 大島田II遺跡検出遺構数一覧表

検出遺構の種類	検出数	時期
復旧坑群	17	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火後
土壙群	1	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火後
掘削工具痕		江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火直後
溝	2	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火以前
水田	3	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火以前

第3表 大島田II遺跡検出復旧坑一覧表

区	面	群	面積m ²	主軸方位	長さm	幅m	深さm	高まりの上幅m
1	新1	—	—	—	—	—	0.08 ~ 0.14	—
1	新2	74.74	N-2°-E	10.50	0.80 ~ 0.95	0.03 ~ 0.13	0.15 ~ 0.30	
1	1	83.15	N-20°-E	(9.40)	1.20 ~ 1.40	0.20 ~ 0.30	0.10 ~ 0.20	
1	2	73.89	N-7°-E	(7.20)	0.70	0.20	0.10 ~ 0.15	
1	3	15.89	N-4°-E	1.00 ~ 3.25	0.60 ~ 0.65	0.07	0.10	
1	4	178.64	N-12°-E	5.80 ~ 17.80	0.60 ~ 0.80	0.07	0.10 ~ 0.20	
1	5	11.83	N-3°-E	(4.30)	0.70 ~ 0.90	0.20	0.10 ~ 0.20	
1	6	29.05	N-20°-E	2.75 ~ 4.80	0.60 ~ 0.90	0.30	0.10 ~ 0.20	
1	7	111.07	N-52°-W	(11.50)	0.60	0.15	0.10 ~ 0.20	
1	8	140.44	N-60°-E	3.70 ~ 11.50	0.50	0.15	0.20	
1	9	116.39	N-71°-W	2.50 ~ (14.70)	0.35 ~ 0.50	0.05 ~ 0.10	0.20 ~ 0.30	
1	10	179.82	N-72°-W	(16.50)	0.50 ~ 0.60	0.15	0.10 ~ 0.20	
1	11	30.58	N-11°-W	(7.00)	0.60 ~ 0.70	0.08	0.10 ~ 0.20	
1	12	195.30	N-58°-W	(14.50)	0.50	0.08 ~ 0.20	0.10	
1	13	45.16	N-16°-E	(5.00)	0.60 ~ 0.70	0.10 ~ 0.15	0.15 ~ 0.30	
1	14	13.81	N-52°-W	1.80, (9.00)	0.40 ~ 0.50	0.10 ~ 0.25	0.10	
1	15	28.82	N-55°-W	(6.00)	0.60	0.03 ~ 0.16	0.15 ~ 0.20	
1	16	23.78	N-42°-E	(12.00)	0.50 ~ 0.60	0.10 ~ 0.15	0.05 ~ 0.15	

第1項 復旧坑

天明3年の浅間山噴火に伴つて降下したAs-Aの二次堆積層の下から、17群の復旧坑が検出された。

復旧坑の方向は、調査区の北側では南北ないし、北東-南西、北西-南東方向とまちまちであるが、調査区の中央よりやや北側を東西に貫流する1号溝の南側では、西北西-東南東方向に統一されている。

規模はまちまちであり、一端が調査区外に出るため、全長が検出できなかつたようなものが多い。幅はおむね0.50 ~ 0.70m前後、深さはおむね約0.60m前後である。そのうちの新1群と新2群の2群は他の復旧坑と重複して検出された。とくに新1群復旧坑は、調査区壁

面の土層断面でのみ確認することが出来、面的には検出出来なかつた。

約10 ~ 20cmの各復旧坑の間の部分には、復旧坑掘削前の段階における掘削工具痕の凹凸が検出された。掘削工具痕の幅は約20cm前後であり、ほぼ水平に並列した状態で検出された。

新1群復旧坑(第9図、PL. 8)

位置 調査区北東隅にかかる。X=37624付近、Y=-85125 ~ 85128付近。

重複 2群復旧坑の上層約0.10 ~ 0.45mに位置するが、2群復旧坑を掘り込んで破壊するには至っていない。

坑の平面形状 不明。

主軸方位 面で検出出来なかつたため計測不能。

群の規模 面として検出出来なかつたため不明であるが、土層断面では幅約3.00mにわたつて検出された。

検出面積 面として検出出来なかつたため計測不能。

坑の規模 面として検出出来なかつたため不明であるが、深さは約0.08～0.14m程度であったが、上面は削平されている。

埋土 As-A粒を含む黒褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区北壁の2群復旧坑土層断面A-A'においてのみ、2群復旧坑の上層から幅約3.00mにわたつて検出されたため、詳細は不明である。

2群復旧坑が掘削後に埋没し、さらにその復旧のために掘削されたものと考えられるが、2群復旧坑の掘削から埋没までとその後の新1群復旧坑掘削までの期間などについても明らかに出来なかつた。

坑底の標高はおおむね149.80m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

新2群復旧坑(第7図、PL. 6)

位置 調査区北側の東寄り。8群復旧坑の北側、1号土坑群の南側、4群復旧坑の東側にそれぞれ隣接する。東側は擾乱されている。X=37600～37613、Y=-85132～-85133。

重複 7群復旧坑の上層約0.10～0.30mに位置するが、7群復旧坑を掘り込んで破壊するには至っていない。

坑の平面形状 南北に細長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方位 N-2°-E。

群の規模 検出された範囲は、最大で東西約7.50m、南北約12.40m、7条。

検出面積 74.74m²

坑の規模 検出された長さは約10.50m前後、幅約0.80～0.95m前後、深さ約0.03～0.13m、坑間の高まりの幅は約0.15～0.30m前後。

埋土 不明。

遺物 なし。

所見 上面が大きく削平を受けているため、残存状態は良くない。

長さ約10.50m前後のほぼ南北方向に細長く長大な坑が東西に7条並列して検出された。

西端の2条は、南北端を含めた全体が検出されているが、その東側2条は、南端部は検出されたものの、北端部は検出されなかつた。また、東側3条は、南端部は調査区外に出、北端部は検出されなかつた。

西側及び南側は下層の7群復旧坑と全く重複していることが確認出来た。北端が検出出来ない部分が多く、また、東側は大きく擾乱されているものの、7群復旧坑とほぼ重複していたものと考えられる。

復旧坑の主軸方位は7群復旧坑とは異つてはいるものの、7群復旧坑が埋没した後に、さらなる復旧のために掘削されたものと考えられる。

坑底の標高はおおむね149.80m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

1群復旧坑(第8図、PL. 5～7)

位置 調査区北側の西寄り。3群復旧坑の北側、2群復旧坑の西側に隣接する。北側及び西側、東側の大部分は調査区外に出る。X=37624～37635、Y=-85132～-85142。

重複 北端の一部が2号水田を掘り込む。2号水田を復旧するための造作と考えられる。

坑の平面形状 北東～南西方向に細長い、やや幅広な隅丸長方形状を呈する。

主軸方位 N-20°-E。

群の規模 検出された範囲は、最大で東西約10.62m、南北約10.91m、10条。

検出面積 83.15m²

坑の規模 検出された坑の長さは9.40m以上、幅約1.20～1.40m前後、深さ約0.20～0.30m前後、坑間の高まりの幅は約0.10～0.20m前後。

埋土 As-Aの二次堆積の鈍い黄橙色土と暗褐色土。

遺物 なし。

所見 復旧坑の北端はいずれも調査区外に出るため、全容が検出されたものは一つもない。長さ約9.40m以上の北東～南西方向に細長く長大な坑が東西に10条並列して検出されたが、西側は調査区外にさらに広がつており、また、東側は擾乱され、2群復旧坑との境は明瞭ではない。なお、本遺跡の調査で検出された復旧坑の中では、個々の坑の幅が最も広い群である。

各坑の高まりの上部には、復旧坑掘削以前の段階の鈍

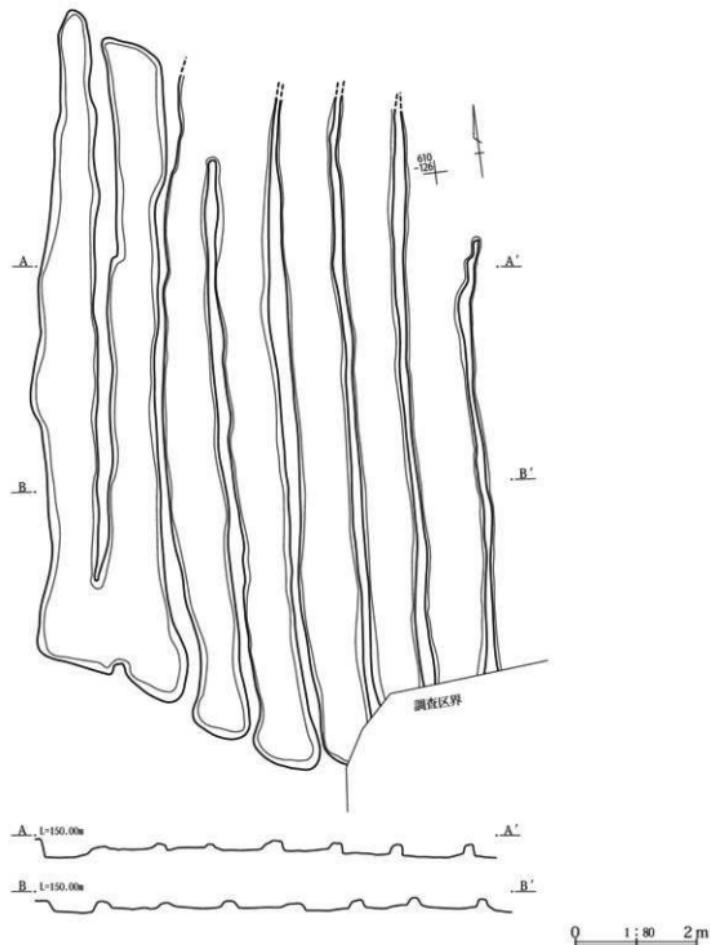
痕が残っており、復旧坑掘削以前には全面に鋤痕が存在していたことが推測される。掘り込み面から鋤痕までの高低差は約0.20m前後である。

坑の底部には凹凸がやや見られるが、工具痕としては不明瞭である。坑底の標高はおおむね149.70m～149.85m前後である。

埋土層のうち、5層が各復旧坑の東側に堆積していることや、4層ではおおむね西側部分の堆積が厚くなっている点などから、復旧坑は東から西に進むように順次掘られていったものと考えられる。

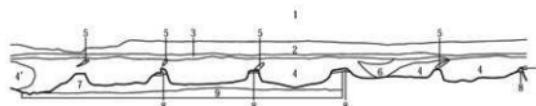
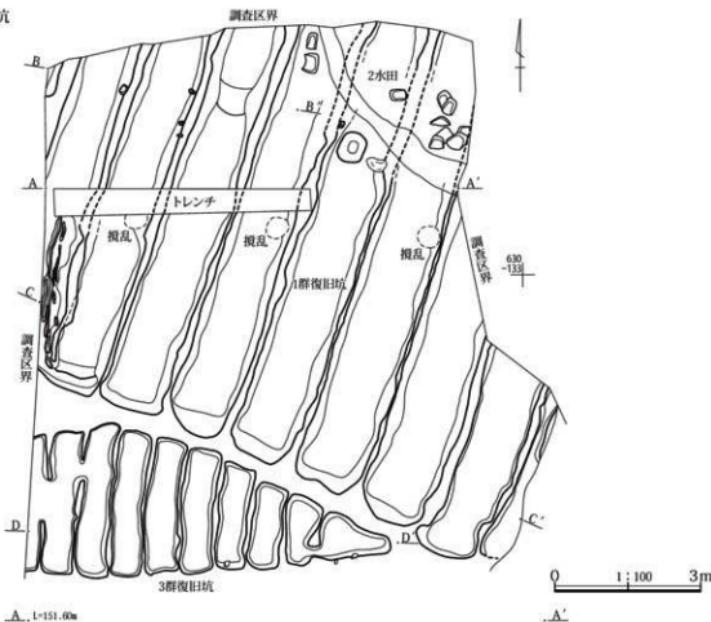
時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

新2群復旧坑



第7図 大島田II遺跡新2群復旧坑

1・3群復旧坑



1群復旧坑土層断面 A-A'

1 現代の土上。

2 10YR5/1 褐灰色土。しまりが非常に強い、現代圃場整備時の水田耕上。

3 10YR4/6 褐色土。As-A粒を少量含む。復旧坑掘削時に7層を剥り上げた土。

4 10YR7/2 鍋い黄褐色土。As-A粒の二次堆積層。上位には褐色土が堆積。

4' 10YR3/4 喷褐色土。As-A粒の二次堆積層。

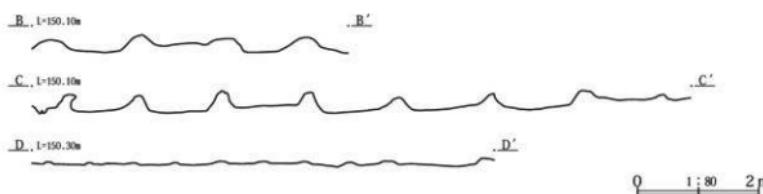
5 10YR4/6 褐色土。7層の上を剥り上げたもの一部。

6 10YR2/3 黒褐色土。この層のみ火山灰粒の含有量が少ない。

7 10YR4/6 褐色土。練まり強い。部分的にやや青味がかった色調を呈する。As-A降下前の水田耕上。

8 10YR4/6 褐色土。As-A粒を少量含む。灑き込みによる天地返しの際に動かされた土。

9 10YR3/4 暗褐色土。7層よりも暗く青味がかった色調を呈する。As-A粒ではない白色軽石粒が混入。



第8図 大島田II遺跡1・3群復旧坑

2群復旧坑(第9図、PL. 5・7～9)

位置 調査区北側の東寄り。5・6群復旧坑の北側、1・4群復旧坑の東側に隣接する。北側及び東側は調査区外に出る。X=37616～37626、Y=-85122～85133。

重複 西側の坑は5群復旧坑の北側を掘り込む。上層に新1群復旧坑が掘り込まれているが、下層の2群復旧坑まで掘削は及んでおらず、破壊されていない。

坑の平面形状 ほぼ南北に細長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方位 N-7°-E。

群の規模 検出された範囲は、最大で東西約11.46m、南北約7.54m。14条。

検出面積 73.89m²

坑の規模 検出された坑の長さは7.20m以上、幅約0.70m前後、深さ約0.20m前後、坑間の高まりの幅は約0.10～0.15m前後。

埋土 底部に暗褐色のAs-Aの二次堆積層、上層に明褐色のAs-Aの二次堆積層がほぼ水平に堆積。

遺物 なし。

所見 復旧坑の北端はいずれも調査区外に出るため、全容が検出されたものは一つもない。長さ約7.20m以上のほぼ南北に細長く長大な坑が東西に14条並列して検出されたが、北・東側は調査区外にさらに広がっており、また、西端部は形状が大きく乱れており、1群復旧坑との境の部分を含め、攪乱されているものと考えられる。面的には全く検出することが出来なかった新1群復旧坑は、この2群復旧坑の西端部を破壊・攪乱した洪水等によって2群復旧坑が埋没後に、更なる復旧を目的に掘削された可能性が考えられる。一部の復旧坑では西側が常に新しく掘り込まっているため、西から東に向かって掘られたものと考えられる。

底面はほぼ一定して平坦である。工具痕と見られる凹凸はあるが、不明瞭である。坑底の標高はおおむね149.40m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

3群復旧坑(第8図、PL. 5・8)

位置 調査区北側の西寄り。4群復旧坑の北側、1群復旧坑の南側に隣接する。西側は調査区外に出る。X=37623～37626、Y=-85135～85143。

重複 なし。

坑の平面形状 ほぼ南北に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方位 N-4°-E。

群の規模 検出された範囲は最大で東西約7.41m、南北約3.21m。10条。

検出面積 15.89m²

坑の規模 検出された坑の長さは約1.00～3.25m前後、幅約0.60～0.65m前後、深さ約0.07m前後、坑間の高まりの幅は約0.10m前後。

埋土 不明。

遺物 なし。

所見 西側は調査区外に出るため、全容は不明である。東端は尖端化しており、形状が乱れている。各坑は、全体的に短矩であり、1条の坑の大きさは、本遺跡から検出された復旧坑群の中で最小規模である。

南西端部の4群復旧坑との境では、径約0.10～0.20m前後の円礫が石垣状に組まれていた。坑底の標高はおおむね150.10m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

4群復旧坑(第10図、PL. 5・8・9)

位置 調査区北西寄り。8群復旧坑の北側、3群復旧坑の南側に隣接する。西側は調査区外に出る。X=37606～37623、Y=-85132～85144。

重複 なし。

坑の平面形状 ほぼ北東～南西方向で、南側が西にやや湾曲する長大な、細長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方位 N-12°-E。

群の規模 検出された範囲は最大で東西約11.91m、南北約17.30m。15条。

検出面積 178.64m²

坑の規模 検出された坑の長さは約5.80～17.80m前後、幅約0.60～0.80m前後、深さ約0.07m前後、坑間の高まりの幅はおおむね0.10～0.20m前後である。

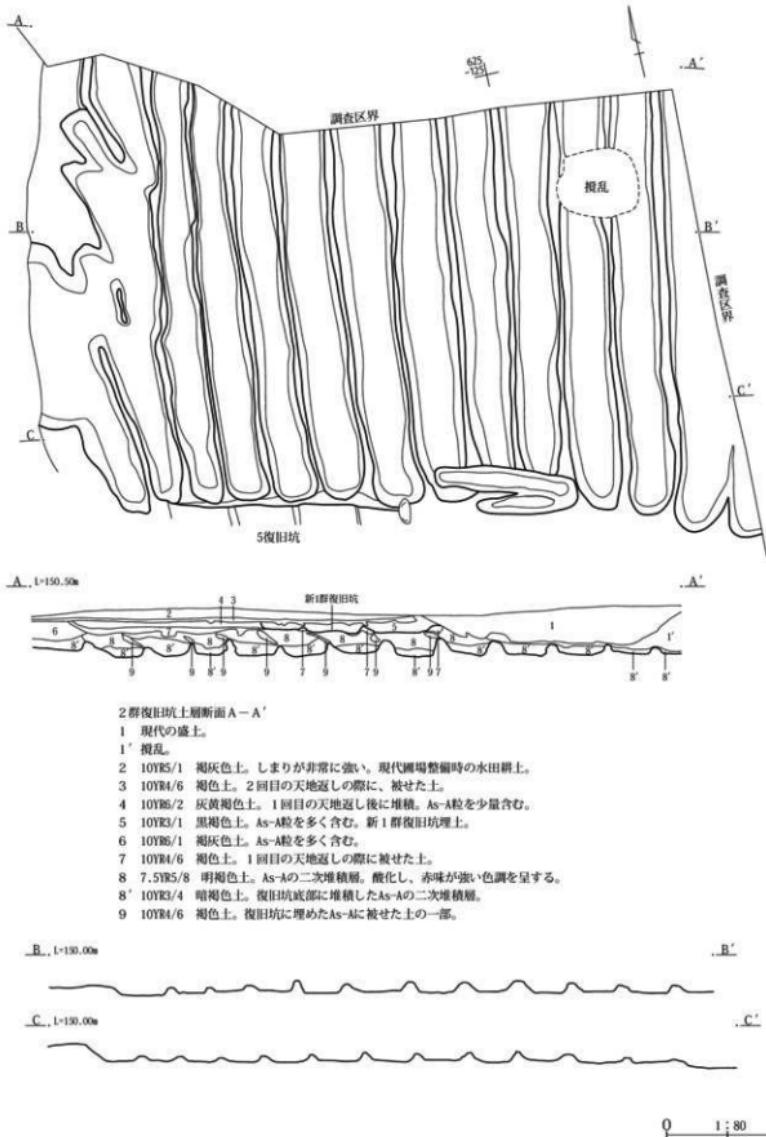
埋土 不明。

遺物 なし。

所見 西側は調査区外に出るため、全容は不明である。

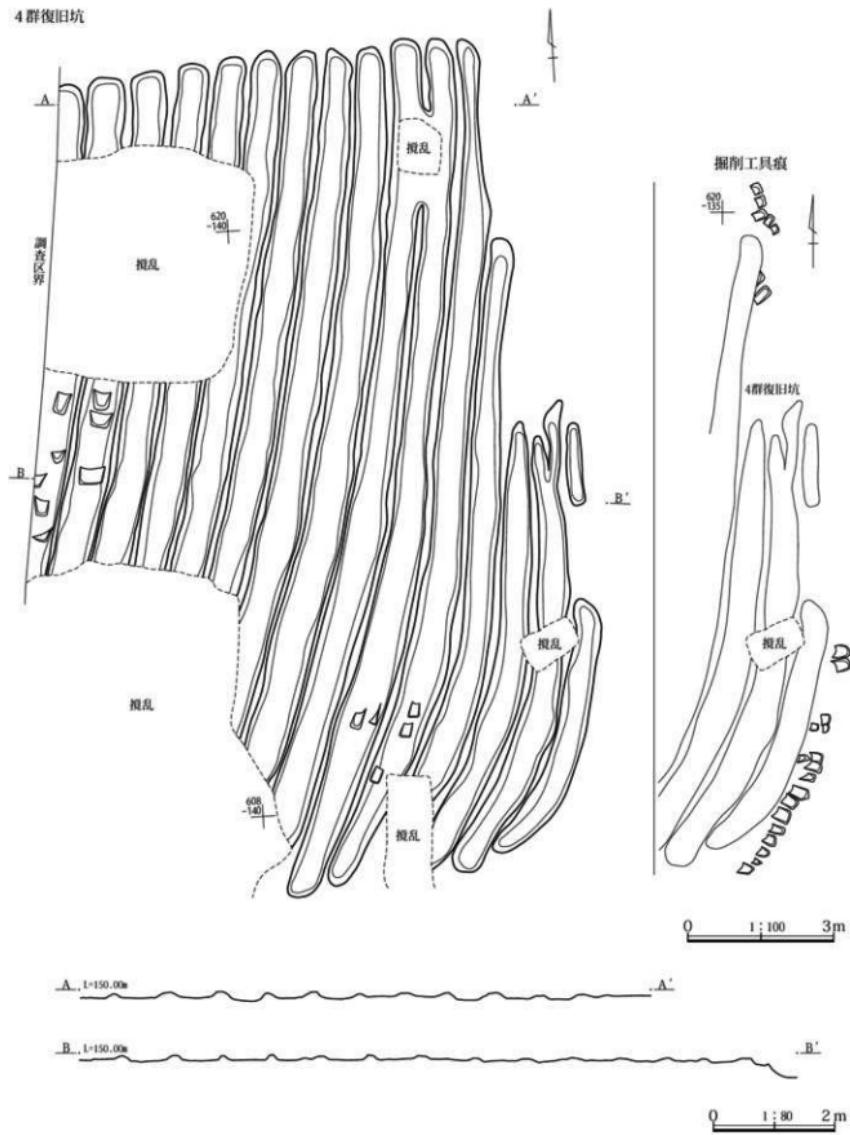
また、検出範囲の北西側と南西端は大きく攪乱されており、東寄りの南端部も一部小さく攪乱されている箇所がある。そのため検出された15条の坑のうち、全域が検

2・新1群復旧坑



第9図 大島田II遺跡2・新1群復旧坑

4群復旧坑



第10図 大島田II遺跡4群復旧坑と復旧坑掘削前の掘削工具痕

出されたものはわずかに3条に過ぎないが、いずれも北東—南西方向で、南側が西に向かってやや湾曲した長大な溝状を呈する坑が、東西に15条並列して検出された。

底面はほぼ平坦であるが、わずかに工具痕が残るもの若干存在している。東側に隣接する7群復旧坑との境のごく一部には径約0.40m程度の円礫が石垣状に組まれた部分が存在する。

また、坑群の南東隅部からは、復旧坑掘削前段階の工具痕が南北にわたりて検出された。

坑底の標高はおおむね149.85～149.95m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

5群復旧坑(第11図、PL. 5・7・9)

位置 調査区北東寄り。1号土坑群の北側、4群復旧坑の東側に隣接する。X=37614～37619、Y=-85128～

85131。

重複 北側を2群復旧坑に、東側を6群復旧坑にそれぞれ掘り込まれる。

坑の平面形状 ほぼ南北方向に細長い圓柱長方形を呈するものと考えられるが、北側を2群復旧坑によって掘り込まれているため、全容は不明である。

主軸方位 N-3°-E。

群の規模 検出された範囲は最大で東西約3.91m、南北約4.18m。4条。

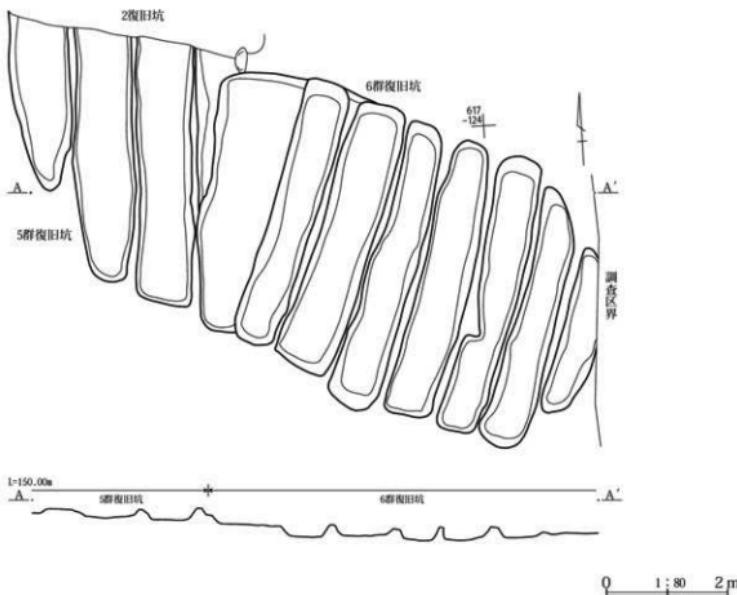
検出面積 11.83m²

坑の規模 検出された坑の長さは約4.30m以上、幅約0.70～0.90m前後、深さ約0.20m前後、坑間の高まりの幅は約0.10～0.20m前後。

埋土 不明。

遺物 なし。

5・6群復旧坑



第11図 大島田II遺跡5・6群復旧坑

所見 北側は2群復旧坑に、東側は6群復旧坑に、それぞれ掘り込まれ、破壊されているため、全容は不明である。ほぼ南北方向に細長い隅丸長方形状を呈していたと考えられる坑が、現状で4条分東西に並列して検出された。

検出された坑の深さは最大で約0.25m程度であるが、さらに上層から掘り込まれていた可能性も考えられる。坑底の標高はおむね149.75m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

6群復旧坑(第11図、PL. 5・7・9)

位置 調査区北東寄り。1号土坑群の北側、2群復旧坑の南側に隣接する。X=37611～37618、Y=-85122～85128。

重複 5群復旧坑の東側を掘り込む。

坑の平面形状 北東一南西方向に長い隅丸長方形状を呈する。3群復旧坑を除けば、他の群の復旧坑に比べて、かなり短い。

主軸方位 N-20°-E。

群の規模 検出された範囲は最大で北西一南東方向約6.36m、北東一南西方向約4.81m。8条。

検出面積 29.05m²

坑の規模 検出された坑の長さは約2.75～4.80m、幅約0.60～0.90m前後、深さ約0.30m前後、坑間の高まりの幅は約0.10～0.20m前後である。

埋土 不明。

遺物 なし。

所見 西端が5群復旧坑の東端を掘り込む。ほぼ北東一南西方向に長い矩形の隅丸長方形状を呈する坑が、8条北西一南東方向に並列して検出された。

坑の底面は扁平なものと船底状に中心部がやや深く掘り窪められているものとが見受けられる。坑底の標高はおむね149.35～149.45m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

7群復旧坑(第12図、PL. 5・8・9)

位置 調査区北側の東寄り。8群復旧坑の北側、1号土坑群の南側、4群復旧坑の東側にそれぞれ隣接する。東側は攪乱されている。X=37600～37614、Y=-85122～85134。

重複 新2群復旧坑の下層約0.10～0.30mに位置するが、新2群復旧坑に掘り込まれ破壊されるには至っていない。

1号土坑群 1号土坑群のごく一部を掘り込んでいるが、それ以外は重複していない。

坑の平面形状 北西一南東方向に細長い隅丸長方形状を呈するものと考えられるが、調査区東壁付近を大きく攪乱されており、また、東側は調査区外へと伸びているので、全容は不明である。

主軸方位 N-52°-W。

群の規模 検出された範囲は、最大で北東一南西方向約11.40m、北西一南東方向約11.39m。14条。

検出面積 111.07m²

坑の規模 検出された長さは約11.50m以上、幅約0.60m前後、深さ約0.15m前後、坑間の高まりの幅は約0.10～0.20m前後である。

埋土 不明。

遺物 なし。

所見 調査区東壁付近を大きく攪乱されており、また、東側は調査区外へと伸びているので、全容は不明である。

長さ約11.50m以上の北西一南東方向に細長く長大な坑が北東一南西方向に14条並列して検出された。

各坑の西端は、北側から4～8条目まではほぼ揃えられているが、9～14条目は南側に寄るに従って次第に西側へと張り出していく傾向にある。また、1～3条目は西端が他条とは揃えられておらず、不揃いに東側に寄っている。

底面は平坦で、工具痕は不明瞭である。坑底の標高はおむね149.60m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

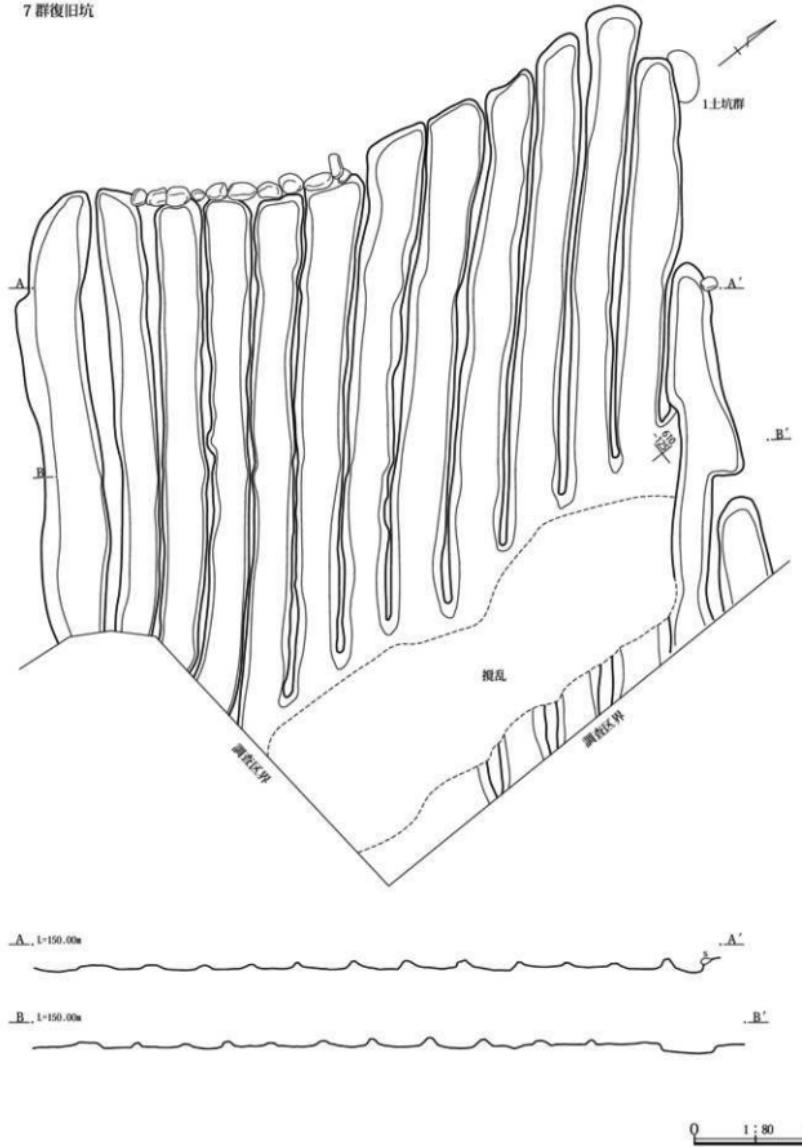
8群復旧坑(第13・23図、PL. 5・10・11)

位置 調査区中央よりやや北寄り。1号溝の北側、新2群復旧坑、4群復旧坑、7群復旧坑の南側にそれぞれ隣接する。X=37594～605、Y=-85128～145。

重複 1号水田と重複。1号水田復旧のための造作と考えられる。

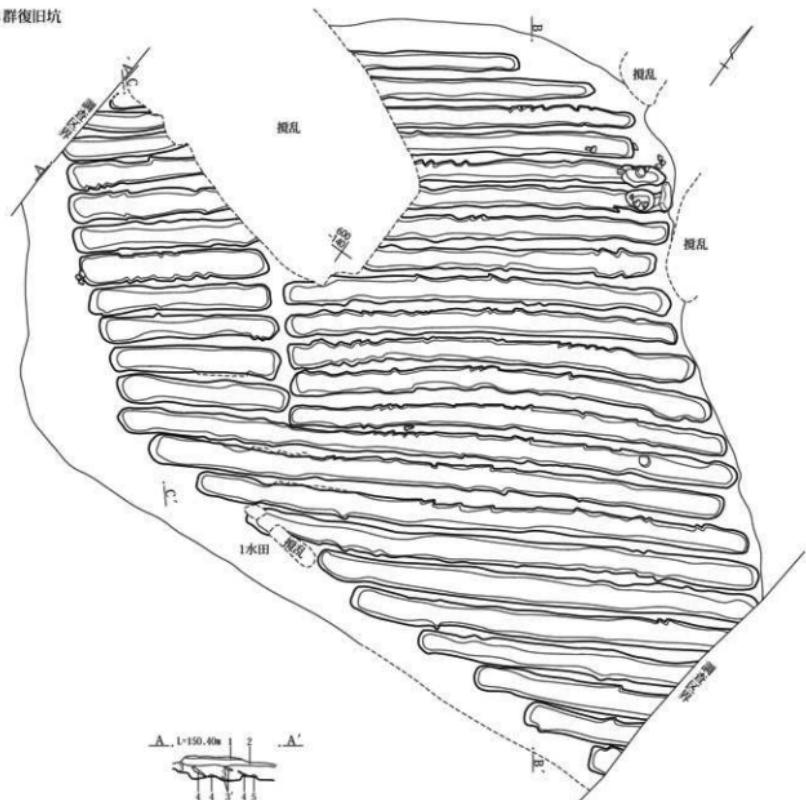
坑の平面形状 北西端から中央部北西寄りにかけて大きく攪乱されているので不明な点はあるが、北東一南西方向に細長い隅丸長方形状を呈する。

7群復旧坑



第12図 大島田Ⅱ遺跡7群復旧坑

8群復旧坑



8群復旧坑上層断面 A-A'

- 1 10YR4/6 褐色土。As-A粒を部分的に僅かに含む。擾乱されている。
- 2 10YR5/2 灰黃褐色土。As-A粒を少量含む。天地返した後に被せた上。
- 3 10YR3/4 暗褐色土。As-Aの二次堆積層。
- 3' 10YR4/6 褐色土。As-Aの二次堆積層。酸化してやや赤味が強い色調を呈する。
- 4 10YR4/6 褐色土。天地返した際の上。
- 5 10YR4/6 褐色土。As-A粒を少量含む。復旧坑掘削以前の水田耕土。



- 1 10YR3/4 暗褐色土。As-Aの二次堆積層。
- 2 10YR4/6 褐色土。As-A粒を少量含む。復旧坑を掘り上げた際の上。



0 1:100 3m

第13図 大島田Ⅱ遺跡 8群復旧坑

南端から10条目までは北東—南西方向に長大な溝状を呈する坑であるが、南端から11条目から北西側23条目までは約8.50m前後の坑と約3.70m前後の坑とが北東側と南西側とに連接した状態である。

検出状況から、西から東に向かって掘削されていったものと考えられる。

主軸方位 N-60°-E。

群の規模 検出された範囲は、最大で北東—南西方向約12.56m、北西—南東方向約12.54m。23条。

検出面積 140.44m²

坑の規模 検出された長さは約3.70～11.50m前後、幅約0.50m前後、深さ約0.15m前後、坑間の高まりの幅は約0.20m前後である。

埋土 As-Aの二次堆積の暗褐色土。

遺物 なし。

所見 北西端から中央部北西寄りにかけて大きく攢乱されている。また、北西側に隣接する4群復旧坑に比べてより深く掘削されており、底面は低く下がっている。

南端から北西側へ10条目までは、長さ約9.00m以下から11.50m前後の北東—南西方向に長大な細長い溝状を呈する1本の坑が並列しているが、南端から11条目から北西側23条目までは北東—南西方向の長さ約8.50m前後の坑と同一方向の約3.70m前後の坑とが北東側と南西側とに連接した状態である。この復旧坑の間の「掘り残し」の部分は、復旧坑を掘削して復旧しようとした元の水田の南面畦畔に並行している。

いずれにせよ細長く長大な溝状を呈する坑が北西—南東方向に23条並列して検出された。

坑掘削前段階における工具痕は、掘り残された坑の両側の高まりの部分から顕著に検出されている。

また、8～10群復旧坑の検出範囲周辺の平坦面から検出された、それらの復旧坑掘削前の工具痕とも連続しており、それらと同時に同一の作業の中で付けられた工具痕と考えられる。

坑の底面はほぼ平坦であるが、不明瞭ながらも2列の工具痕が残っている箇所も少なくない。

一方、坑の壁からは工具痕が明瞭に検出された。縦約0.15m前後、横約0.20m前後の、垂直に掘り込まれた痕跡が連続して残っており、復旧坑は鋭利な道具で掘削されたことが判明する。

坑底の標高はおおむね149.45～149.60m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

9群復旧坑(第14・15図、PL. 5・12・13)

位置 調査区のほぼ中央。1号溝の南側、10群復旧坑の北側、11群復旧坑の西側にそれぞれ隣接する。X=37582～37592、Y=-85128～85143。

重複 なし。

坑の平面形状 西端側が大きく攢乱されているので不明な点はあるが、西北西—東南東方向に細長く長大な隅丸長方形状を呈する。1号溝以南に掘削された復旧坑は、11・16群復旧坑を除いていずれも西北西—東南東方向の坑であるが、主軸方位はそれぞれ若干異なっている。

南端から北へ8条目までは西北西—東南東方向に細長く長大な溝状を呈する坑が南北に並列しているが、南端から9条目から12条目までは約7.50～9.00m前後の坑と約2.70～5.20m前後の坑とが東西に連接したような状態である。

主軸方位 N-71°-W。

群の規模 検出された範囲は、最大で西北西—東南東方向約15.38m、北東—南西方向約10.18m。16条。

検出面積 116.39m²

坑の規模 検出された長さは約2.50～14.70m以上、幅約0.35～0.50m前後、深さ約0.05～0.10m前後、坑間の高まりの幅は約0.20～0.30m前後である。

埋土 As-Aの二次堆積の黒褐色土。

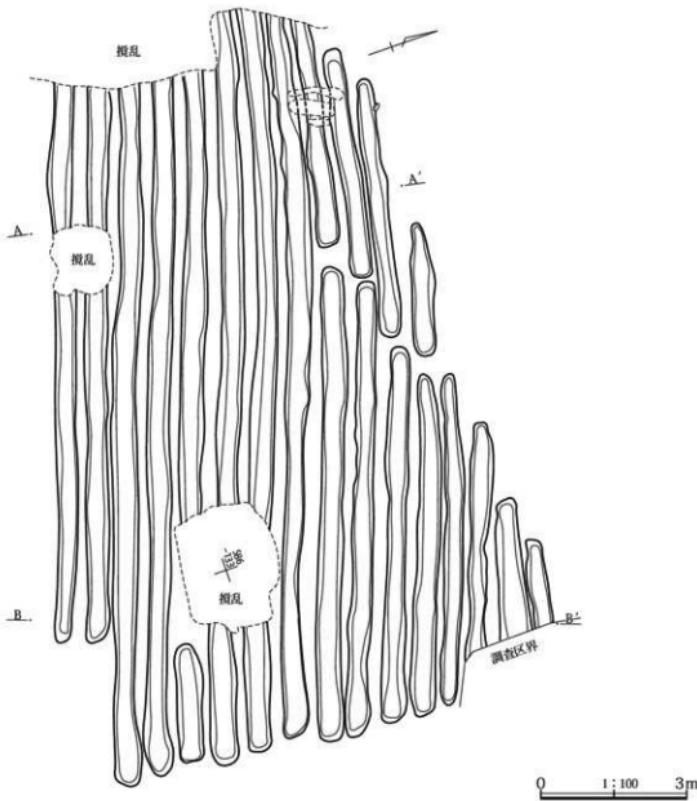
遺物 なし。

所見 西端側が大きく攢乱されているので、不明な点があるが、南端から北へ8条目までは西北西—東南東方向に細長く長大な溝状を呈する坑が8条南北に並列しているが、南端から9条目から12条目までは約7.50～9.00m前後の坑と約2.70～5.20m前後の坑とが東西に連接したような状態で4条南北に並列している。東端部は調査区外に出ているため状況は不明である。

8群復旧坑と同様、坑掘削前段階における工具痕は、掘り残された坑の両側の高まりの部分から顕著に検出されている。

また、8群復旧坑と同様、8～10群復旧坑の検出範囲周辺の平坦面から検出された、それらの復旧坑掘削前の工具痕とも連続しており、それらと同時に同一の作

9群復旧坑



9群復旧坑上層断面 A-A'

- 1 10YR2/2 黒褐色土。As-A'の二次堆積層。
- 1' 10YR2/2 黒褐色土。1層同様As-A'の二次堆積層。褐灰色土を塊状に含む。
- 2 10YR5/1 褐灰色土～10YR4/6褐色土。As-A粒を多く含む。復旧坑を掘り上げた際の土。

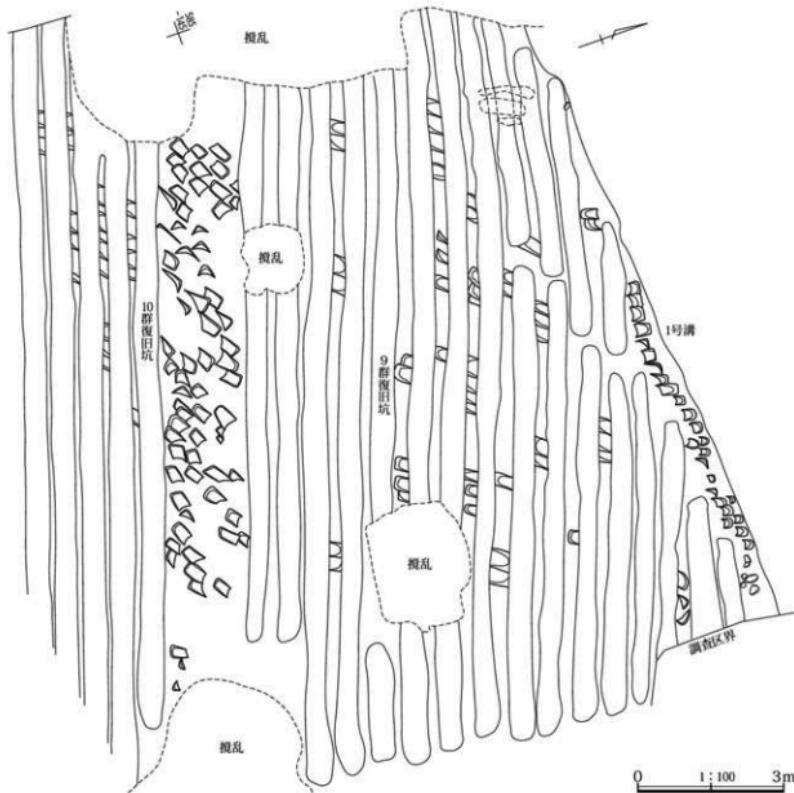
B-B', L=150.00m

A-A'

0 1:80 2m

第14図 大島田Ⅱ遺跡 9群復旧坑

掘削工具痕



第15図 大島田Ⅱ遺跡9・10群復旧坑掘削前の掘削工具痕

業の中で付けられた工具痕と考えられる。

坑の底面はほぼ平坦であるが、不明瞭ながらも2列の工具痕が残っている箇所も少なくない。工具痕の幅は約0.10m前後、長さは0.20～0.30m前後である。

1号溝の存在を意識して掘削された様子が看取出来、1号溝寄りの位置で溝に向かって工具が直角に入れられ、面側に傾斜している様子がうかがえる。

坑底の標高はおおむね149.70m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

10群復旧坑(第15・16図、PL. 5・12・14)

位置 調査区の中央からやや南寄り。9群復旧坑の南側、12群復旧坑の北側にそれぞれ隣接する。X=37569～37583、Y=-85130～-85147。

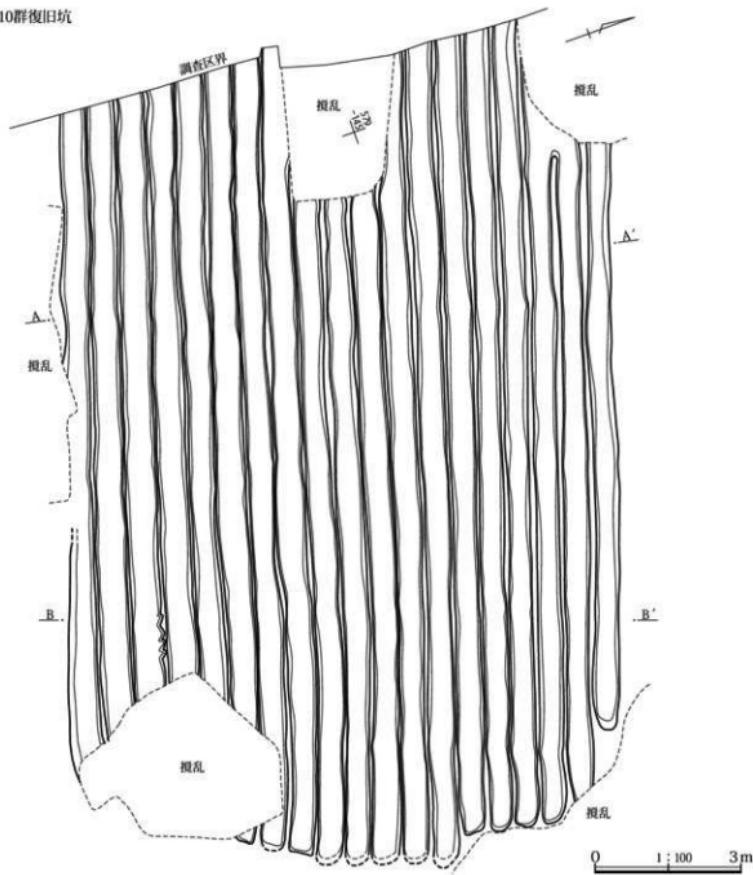
重複 なし。

坑の平面形状 北西隅、西端中央、南東隅部が攪乱され、西端が調査区外へと広がっているので不明な点はあるが、西北西～東南東方向に細長く長大な隅丸長方形状を呈する。細長く長大な溝状を呈する坑が南北に19条並列している。

主軸方位 N-72°-W。

群の規模 検出された範囲は、最大で西北西～東南東方

10群復旧坑



10群復旧坑土層断面A-A'

- 1 10YR3/4 暗褐色土～10YR5/1褐色灰色上。As-Aの二次堆積層。
- 1' 10YR3/4 暗褐色土。As-Aの二次堆積層。褐色土が塊状に入る。
- 2 10YR4/6 褐色土。As-A粒を多く含む。復旧坑を掘り上げた際の上。



第16図 大島田Ⅱ遺跡10群復旧坑

向約15.74m、北東一南西方向約11.32m。19条。

検出面積 179.82m²

坑の規模 検出された長さは約16.50m以上、幅約0.50～0.60m前後、深さ約0.15m前後。坑間の高まりの幅は約0.10～0.20m前後である。

埋土 As-Aの二次堆積である暗褐色～褐灰色土。

遺物 なし。

所見 北西隅、西端中央、南東隅部が攪乱され、西端が調査区外へと広がっているので不明な点はあるが、西北西一東南東方向に細長く長大な隅丸長方形状の坑が南北に19条並列して検出されたが、全体的に残存状態は悪い。埋土層断面の状況から、南側から北に向かって掘削されたものと考えられる。

8・9群復旧坑と同様、坑掘削前段階における工具痕は、掘り残された坑の両側の高まりの部分から顕著に検出されている。

また、8・9群復旧坑と同様、8～10群復旧坑の検出範囲周辺の平坦面から検出された、それらの復旧坑掘削前の工具痕とも連続しており、それらと同時期に同一の作業の中で付けられた工具痕と考えられる。

底面はほぼ平坦であり、縦方向の工具痕がわずかに3列ほど見られる程度である。工具痕の長さは約0.30m程度である。壁面の工具痕は主軸方向に、一部で明瞭に検出された。幅約0.10m前後、長さ約0.30m前後である。

坑底の標高はおむね149.65m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

11群復旧坑(第17図、PL. 5・14・15)

位置 調査区の中央からやや南寄りの東端。9群復旧坑の東側に隣接する。X=37581～37589、Y=-85123～85127。

重複 なし。

坑の平面形状 南側と中央からやや南東寄りの部分を大きく攪乱され、北側、東側共に調査区外へと伸びているため、全容は不明である。北西一東南東方向に細長い形状である。

主軸方位 N-11°-W。

群の規模 検出された範囲は、最大で東西約5.00m、南北約7.70m。7条。

検出面積 30.58m²

坑の規模 検出された長さは約7.00m以上、幅約0.60～0.70m前後、深さ約0.08m前後。坑間の高まりの幅は約0.10～0.20m前後。

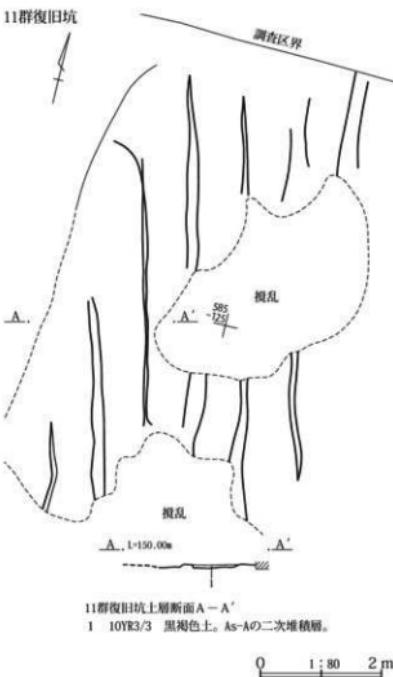
埋土 As-Aの二次堆積の黒褐色土。

遺物 なし。

所見 南側と中央からやや南東寄りの部分を大きく攪乱され、北側、東側共に調査区外へと伸びているため、全容は不明で、北西一東南東方向に細長い坑が東西に7条分並列して検出されたが、残存状態は極めて悪く、坑の掘り込みはほとんど検出出来ないような状況であった。

底面はほぼ平坦であり、縦方向の工具痕がわずかに3列ほど見られる程度である。工具痕の長さは約0.30m程度、幅は約0.10～0.15m程度である。坑掘削前段階の工具痕もわずかに残っており、坑底の標高はおむね149.70m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。



第17図 大島田Ⅱ遺跡11群復旧坑

12群復旧坑(第18・19図、PL.15・16)

位置 調査区の南寄り。10群復旧坑の南側、14群復旧坑の北側に隣接する。X=37552～37572、Y=-85133～85148。

重複 3号水田を掘り込む。3号水田復旧のための造作と考えられる。

坑の平面形状 北西寄りと中央南寄りを大きく攢乱され、西側が調査区外へと伸びており、不明な部分もあるが、北西～南東方向に細長く長大な溝状を呈するものと考えられる。

主軸方位 N-58°-W。

群の規模 検出された範囲は、最大で東西約12.98m、南北約15.20m。21条。

検出面積 195.30m²

坑の規模 検出された長さは約14.50m以上、幅約0.50m前後、深さ約0.08～0.20m前後。坑間の高まりの幅は約0.10m前後。

埋土 As-Aの二次堆積の褐灰色土。

遺物 なし。

所見 北西寄りと中央南寄りを大きく攢乱され、西側が調査区外へと伸びており、全容が検出出来た訳ではないが、北西～南東方向に長大な細長い溝状の坑が南北に21条並列して検出された。

土層断面の観察から、北側の坑が古く、南側の坑が新しいことが看取出来、北側から南へと掘削していった様子が判明する。

坑の底面はほぼ平坦で、わずかに工具痕の凹凸が見出された。工具痕は主軸方向に3列で、幅約0.10m前後、長さ約0.30m前後の鉛痕である。壁面からは幅0.20m前後、長さ0.10m前後の縱方向の工具痕が検出された。坑底の標高はおおむね149.60～149.75m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

13群復旧坑(第20図、PL.16・17)

位置 調査区北東端。北側の東西方向の現道に取り付く、撥状に広がった東側の部分。X=37626～37631、Y=-85104～85117。

重複 なし。

坑の平面形状 南北約1.16～5.04m、東西約13.20mのわずかな範囲における検出であり、四方が調査区外へと

広がっているため、全容は全く不明であるが、北東～南西方向に細長い溝状を呈しているものと考えられる。

主軸方位 N-16°-E。

群の規模 検出された範囲は、最大で東西約13.20m、南北約5.04m。16条。

検出面積 45.16m²

坑の規模 検出された長さは約5.00m以上、幅約0.60～0.70m前後、深さ約0.10～0.15m前後。坑間の高まりの幅は約0.15～0.20m前後で、まれに約0.30m程度の地点がある。

埋土 As-Aの二次堆積の灰黄褐色土と黒褐色土と褐灰色土で、褐灰色土はAs-Aの純層に近い。

遺物 なし。

所見 調査範囲が限定されており、四方が確実に調査区外へと広がっているため、全容は全く不明であるが、検出位置と主軸方位から、2群復旧坑と一体である可能性も考えられる。

土層断面から復旧坑の上に土を盛り上げて、土を被せて新たな耕地を造成していこうとした様子がよくうかがえる。

坑の底面は平坦であり、坑底の検出状況から、長軸方向に3列にわたって鏝で掘削した様子が看取できるが、残存状態は良くない。

壁面からは垂直に掘り込んでいる工具痕と、底面の工具痕が壁面にも喰い込んでいる状況が検出された。

坑底の標高はおおむね149.35m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

14群復旧坑(第18・19・25図、PL.15・18)

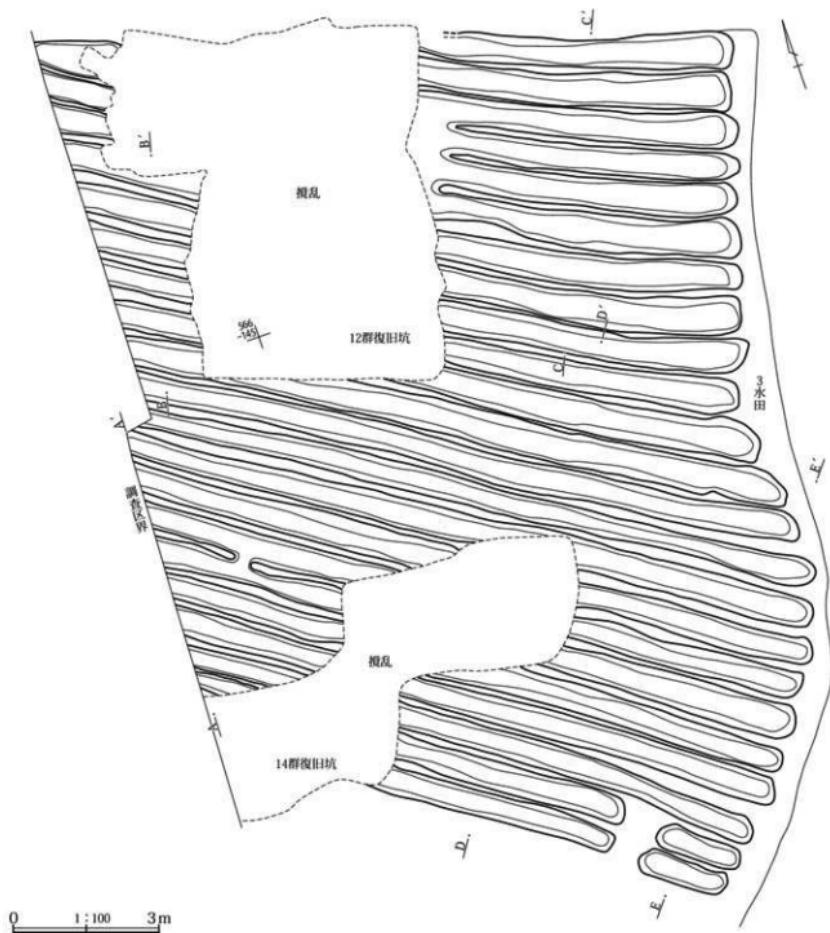
位置 調査区南寄り。12群復旧坑の南側、15・16群復旧坑の北側に隣接する。X=37552～37559、Y=-85139～85148。

重複 3号水田を掘り込む。3号水田復旧のための造作と考えられる。

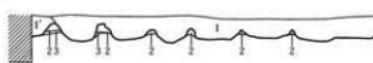
坑の平面形状 西側が調査区外へと広がっているため、全容は不明であるが、北西～南東方向に細長い長大な溝状を呈する部分の南東側に、約0.60～0.70m程度の空間をおいて長さ約1.80～1.89m程度の隅丸長方形状の短矩な坑が連絡する。

主軸方位 N-52°-W。

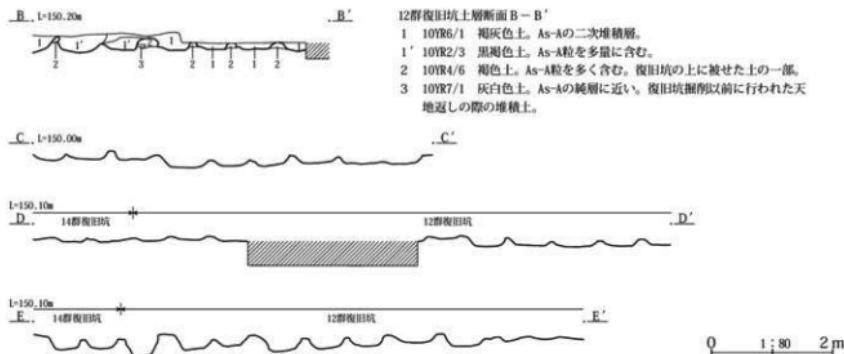
12・14群復旧坑



A-A', L=150.0m



第18図 大島田Ⅱ遺跡12・14群復旧坑(1)



第19図 大島田Ⅱ遺跡12・14群復旧坑(2)

群の規模 検出された範囲は、最大で東西約11.78m、南北約1.28m。2条。

検出面積 13.81m²

坑の規模 検出された長さは約9.00m以上、幅約0.40～0.50m前後、深さ約0.10～0.25m前後。坑間の高まりの幅は約0.10m前後である。

埋土 As-Aの二次堆積の褐灰色土と暗褐色土。

遺物 なし。

所見 12群復旧坑のすぐ南側にほぼ主軸方位を同じくして並列しており、12群復旧坑と一体のものと考えられるが、12群復旧坑を構成する21条の坑とは坑の形状が異なるため、別群とした。

長大な溝状部分の坑の南東側に隣接する短矩な部分の坑は、北西側の長大な坑の部分よりもより深く掘られている。

坑の底面は平坦で、長軸方向に2列の工具痕が検出された。壁面には縦方向と上からの工具痕が見いだされた。また、坑南側の高まりの部分からは復旧坑掘削前段階の工具痕が検出された。

坑底の標高はおむね149.65～149.75m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

15群復旧坑(第21・25図、PL.18)

位置 調査区南端寄り。14群復旧坑の南側、16群復旧坑の北西側に隣接する。X=37548～37556、Y=-85143～-85148。

重複 3号水田を掘り込む。3号水田復旧のための造作と考えられる。

坑の平面形状 西側が調査区外へと広がっており、南東側を大きく攢乱されているため、全容は不明であるが、おむね西北—南東方向に細長い長大な溝状を呈する。

主軸方位 N-55°-W。

群の規模 検出された範囲は、最大で東西約6.18m、南北約7.68m。10条。

検出面積 28.82m²

坑の規模 検出された長さは約6.00m以上、幅約0.60m前後、深さ約0.03～0.16m前後。坑間の高まりの幅は約0.15～0.20m前後である。

埋土 As-Aの二次堆積の暗褐色土。

遺物 なし。

所見 14群復旧坑のすぐ南側にほぼ主軸方位を同じくして並列しており、12・14群復旧坑と坑の長さはやや異なっているものの、一体のものと考えられる。

坑の底面は平坦で、長軸方向に2列の工具痕が検出された。壁面には縦方向と上からの工具痕が見いだされた。また、坑南脇の高まりの部分からは復旧坑掘削前段階の工具痕が検出された。

坑底の標高はおむね149.75～149.85m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

16群復旧坑(第21・25図、PL.18・19)

位置 調査区南端。14群復旧坑の南側、15群復旧坑の南

東側、2号溝の西側に隣接する。X=37542～37552、Y=-85140～85148。

重複 3号水田を掘り込む。3号水田復旧のための造作と考えられる。

坑の平面形状 南西側が調査区外へと広がっており、中央を大きく搅乱されているため、全容は不明であるが、北東-南西方向に細長い長大な溝状を呈する。

主軸方位 N-42°-E。

群の規模 検出された範囲は、最大で北東-南西方向約12.08m、北西-南東方向約3.00m。4条。

検出面積 23.78m²

坑の規模 検出された長さは約12.00m以上、幅約0.50

～0.60m前後、深さ約0.10～0.15m前後。坑間の高まりの幅は約0.05～0.15m前後である。

埋土 As-Aの二次堆積の黒褐色土。

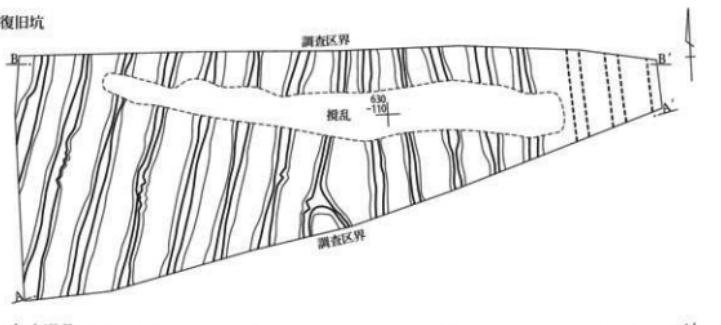
遺物 なし。

所見 1号溝以南の9～12・14～16群復旧坑の中では、11群復旧坑とこの16群復旧坑のみが主軸方位を大きく異にしている。

底面は平坦で、3列の工具痕が残るが、残存状態は良くななく、不明瞭である。壁面にも工具痕らしき凹凸が残っている。坑底の標高はおおむね149.75m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

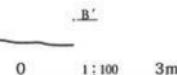
13群復旧坑



13群復旧坑上断面 A-A'

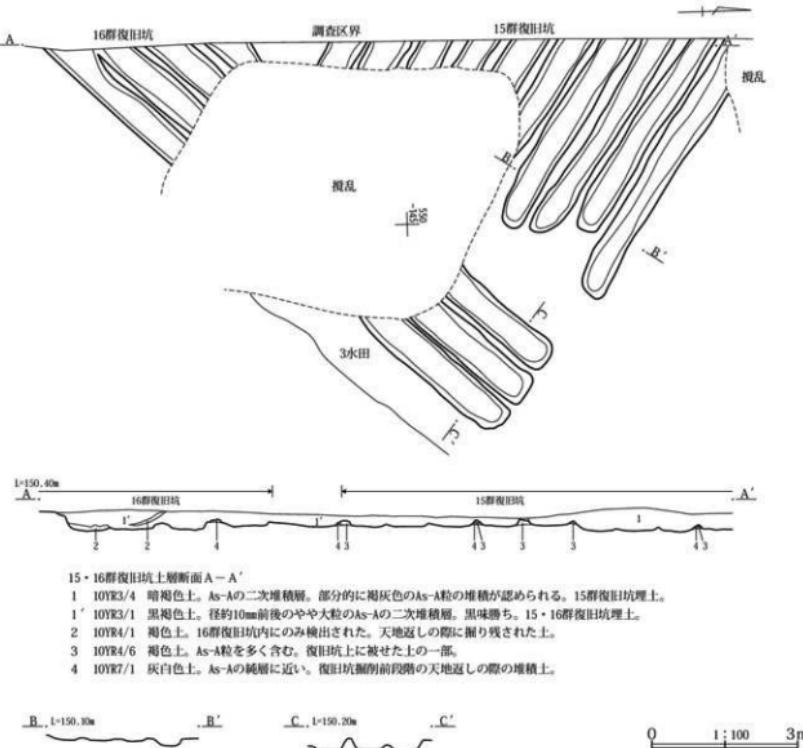
- 1 10Y4/4 褐灰色土。As-A粒を含む。表土。
- 2 10Y4/4 6 褐色土。As-A粒を少量含む。現代圃場整備以前の水田耕土。
- 2' 10Y4/4 6 褐色土。2層に比べ1層と3層の上が多く混じる。
- 3 10Y5/5 褐灰色土。As-A粒を多く含む。天地返しの際に振り残された軽石が堆積したものか？
- 4 10Y2/3 黒褐色土。As-A粒を非常に多く含む。天地返しの後、耕作等によって振り返された際の堆積土。
- 5 10Y4/6 褐色土。As-A粒を塊状に含む。天地返しの際、復旧坑の上に被せた土。
- 6 10Y2/3 黑褐色土。As-Aの二次堆積層。
- 6' 10Y2/3 黑褐色土。6層よりもやや赤味が強っている。
- 7 10Y6/1 褐灰色土。As-Aの二次堆積層。かなり純層に近いか？
- 8 10Y6/2 灰黃褐色土。As-Aの二次堆積層。7層よりも黄色味が勝る。
- 8' 10Y2/3 黑褐色土。As-Aの二次堆積層。黒色味が勝る。
- 8'' 10Y4/6 褐色土。As-A粒と地山との混凝。
- 9 10Y4/6 褐色土。復旧坑掘削以前の段階の水田耕土。As-A粒以外の白色火山灰粒が混入。
- 10 10Y5/1 褐灰色土。As-Aの二次堆積層。

B-B' l=149.80m



第20図 大島田Ⅱ遺跡13群復旧坑

15・16群復旧坑



第21図 大島田II遺跡15・16群復旧坑

第2項 土坑群

6群復旧坑と7群復旧坑との間に、北西—南東方向に1列に縱列する1号土坑群が検出された。復旧坑と同様の機能の天明3年浅間山噴火の際に降下した軽石や、噴火直後に発生した泥流によって埋没した水田を復旧するために掘削されたものと考えられる。

1号土坑群(第22図、PL. 5)

位置 調査区北東寄り。5・6群復旧坑の南側、7群復旧坑の北側に隣接する。X=37610～37614、Y=-85123～-85130。

重複 北西隅の土坑1の南辺を7群復旧坑に掘り込まれる。

平面形状と規模 北西—南東方向に長い楕円形ないし隅丸方形を呈する土坑が6基、北西—南東方向に隣接して縱列する。大きさ・深さともそれぞれ均等な齊一性はないが、ほぼ同じような傾向にある。全長約7.48m、幅約0.42～0.71m前後。

- (1)土坑1：長径0.86m・短径0.42m・深さ0.26m、楕円形。
- (2)土坑2：長径1.02m・短径0.55m・深さ0.55m、楕円形。
- (3)土坑3：長径1.03m・短径0.72m・深さ0.48m、隅

丸不整長方形状。

- (4) 土坑4：長径1.13m・短径0.56m・深さ0.36m、楕円形状。
(5) 土坑5：長径0.78m・短径0.55m・深さ0.15m、不整椭円形状。
(6) 土坑6：長径0.86m・短径0.60m・深さ0.36m、楕円形状。

埋土 不明。

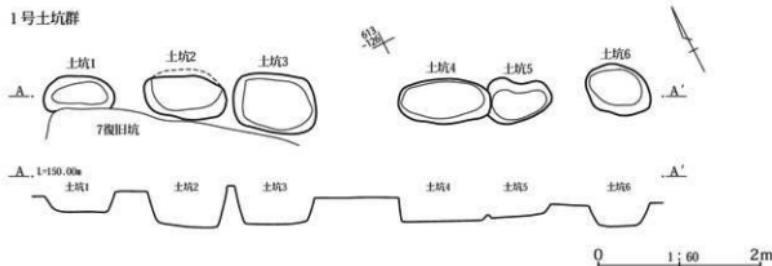
遺物 なし。

所見 北西隅の土坑1の南辺を7群復旧坑に掘り込まれ

るので、7群復旧坑の掘削に先立って掘削されていたものと判明するが、他に重複はなく、しかも5・6群復旧坑と間隔を空けずに接しながらも重複箇所は7群復旧坑との1箇所に過ぎず、それすらごくわずかな部分であるので、7群復旧坑とも、また、北側に隣接する5・6群復旧坑とも、ほぼ同時期であると考えられる。

土坑4の南東端と土坑5の北西端が重複しており、土坑4が土坑5を掘り込んでいる。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。



第22図 大島田II遺跡1号土坑群

第3項 水田

本遺跡からは復旧坑が掘り込まれた部分の周囲から、復旧坑掘削以前の段階の水田の残骸が検出された箇所が3箇所存在した。いずれもAs-A'の一次堆積層の下から検出されていることから、天明3(1783)年の浅間山噴火以前に機能していた水田面と考えられる。水田面の下層には九十九川の疊層が堆積しており、近世以前の段階においても水田が継続的に営まれていたのか否かについては明らかに出来なかったが、水田に伴う水路や水田の水口には、これらの疊が隨所に用いられ、構築されていた。

1号水田(第23図、PL. 5・10・11)

位置 調査区中央よりやや北寄り。1号溝の北側、新2・4・7群復旧坑の南側にそれぞれ隣接する。X=37593～37606、Y=-85128～-85145。

重複 8群復旧坑に掘り込まれる。

規模 検出された範囲は、最大で東西約16.60m、南北約13.00m。

検出面積 164.55m²

遺物 なし。

所見 北西端から中央部北西寄りにかけて大きく攢乱されている。ほぼ全域を8群復旧坑によって掘り込まれており、8群復旧坑掘削以前の水田面は主に領域の南端から南西端にかけて、この水田に伴う水路と考えられる1号溝に沿った部分で検出された。この部分における水田面の標高は、おおむね149.80m前後で、水田の南から南西側の端部に沿って、東から北西に向かって歩いた足跡が明瞭に検出された。この足跡は、復旧坑の間からは発見されず、また、復旧坑との重複も一切認められないでの、復旧坑掘削後に付けられた足跡である可能性が高い。なお、1号溝に沿った畦畔以外の畦畔や水口等はまったく検出されなかった。

南側及び南西側に畦畔を隔てて隣接する1号溝は、水田に伴う水路であり、併存していたものと考えられる。

畔は1号溝との境の部分においてのみ検出された。残存状態はあまり良くない。基底部幅約0.45m前後、高さは約0.03～0.06m前後である。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

2号水田(第24図、PL. 6)

位置 調査区北端、北東寄り。X=37631 ~ 37635、Y=-85134 ~ 85137。

重複 1群復旧坑に掘り込まれる。

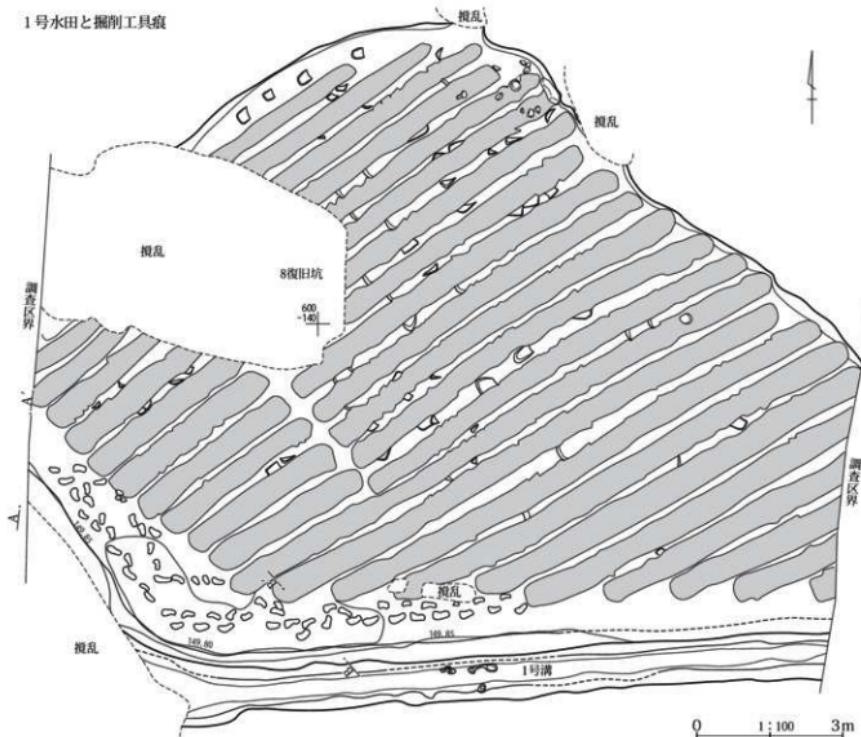
規模 検出された範囲は、最大で東西約3.16m、南北約3.01m。

検出面積 7.41m²

遺物 なし。

所見 北側及び東側が調査区外に出るため、不明な部分が多い。水田の南西隅部のごく一部が検出されている。

1号水田と掘削工具痕



A-A', 1:150.20m



A'

1号水田上層断面A-A'

1 10YR3/3 明褐色土。As-A'の二次堆積層。擾乱されている。

2 10YR7/1 灰白色。1層と同様、擾乱された可能性あり。

3 10YR6/2 灰黃褐色土。As-A'の純層に近い。

4 10YR4/6 褐色土。部分的に灰色味を呈する。締まり強い。1号水田畔。

B-B', 1:150.00m



B'

0 1:40 1m

第23図 大島田II遺跡 1号水田と掘削工具痕

調査区の北壁から東壁にかけて、北西側から南東側に斜め弧状に、幅約0.26～0.68m、深さ約0.05～0.07m程度の浅い溝が巡り、その内側から水田面が検出されているが、北壁側を1群復旧坑によって掘り込まれている。

水田面は、標高は約149.80m前後の平坦面が形成されており、検出範囲の中央から東端にかけての南寄りの位置から、復旧坑掘削時の工具痕がいくつか検出されている。

畦畔等の痕跡や足跡等は全く検出されなかった。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

3号水田(第25図、PL. 18・19)

位置 調査区南寄りから南西端にかけて。X=37540～37573、Y=-85133～85149。

重複 12・14～16群復旧坑に掘り込まれる。

規模 検出された範囲は、最大で東西約13.00m、南北約31.96m。

検出面積 301.94m²

遺物 なし。

所見 北西と中央部西寄りと南側を大きく攢乱されている。北側から12・14～16群復旧坑によって、全域をほぼ隈なく掘り込まれており、復旧坑掘削以前の水田面は、主に、3号水田検出範囲の南西寄りの部分から検出された。北側の14群復旧坑と南側の15群復旧坑に挟まれた間の部分から、北西側の15群復旧坑と南東側の16群復旧坑によって挟まれた間の部分にかけてと、3号水田検出範囲の南端、西側の16群復旧坑の南端と東側の2号溝とに

挟まれた部分において検出された。

水田面の標高はおおむね149.80～150.00m前後で、南から北に向かって緩やかに傾斜している。

水田面からは、復旧坑掘削前段階の掘削痕が全面において検出された。14群復旧坑と15群復旧坑との間の部分からは北西～南東方向に横2列、15群復旧坑と16群復旧坑の間の部分からは北西～南東方向と南北方向にそれぞれ横2列、3号水田検出範囲の南端近くの部分では、北東～南西方向にややランダムに、それぞれ掘削痕が検出された。

水田の東端部に沿って、北東から南西にかけて検出された2号溝は、この水田に伴う水路と考えられる。溝の西岸、水田との間には、下層地山の自然礫を組んで溝の護岸をした箇所が検出されており、高さが最大で約0.11m程度の畦畔の高まりが認められた部分もあるが、あまり明確ではない。

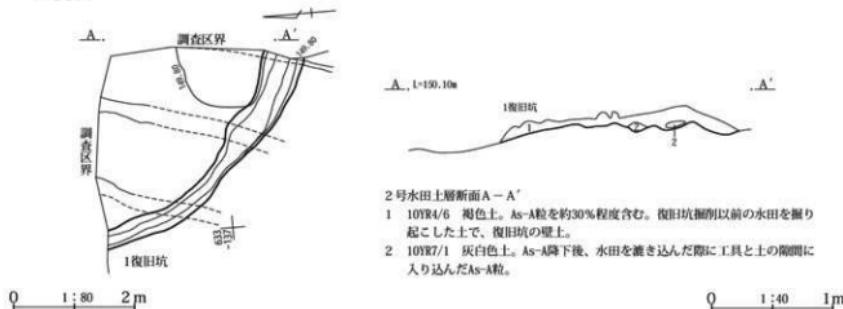
2号溝の中央からやや北寄りの位置と南端近くの2箇所で、2号溝からの水口と考えられる部分が検出された。

中央からやや北寄りの位置から検出された水口は、両側を径約0.70～0.80m程度の橢円形状の大きな川原石で固め、水口部分は径0.10m前後の小ぶりな川原石を並べて塞いでいる様子が伺えた。水口の北側を固める大石の背後にも川原石を組んだような造作が認められた。

一方、南端近くの方の水口は大きく攢乱されており、詳細は明らかに出来なかった。

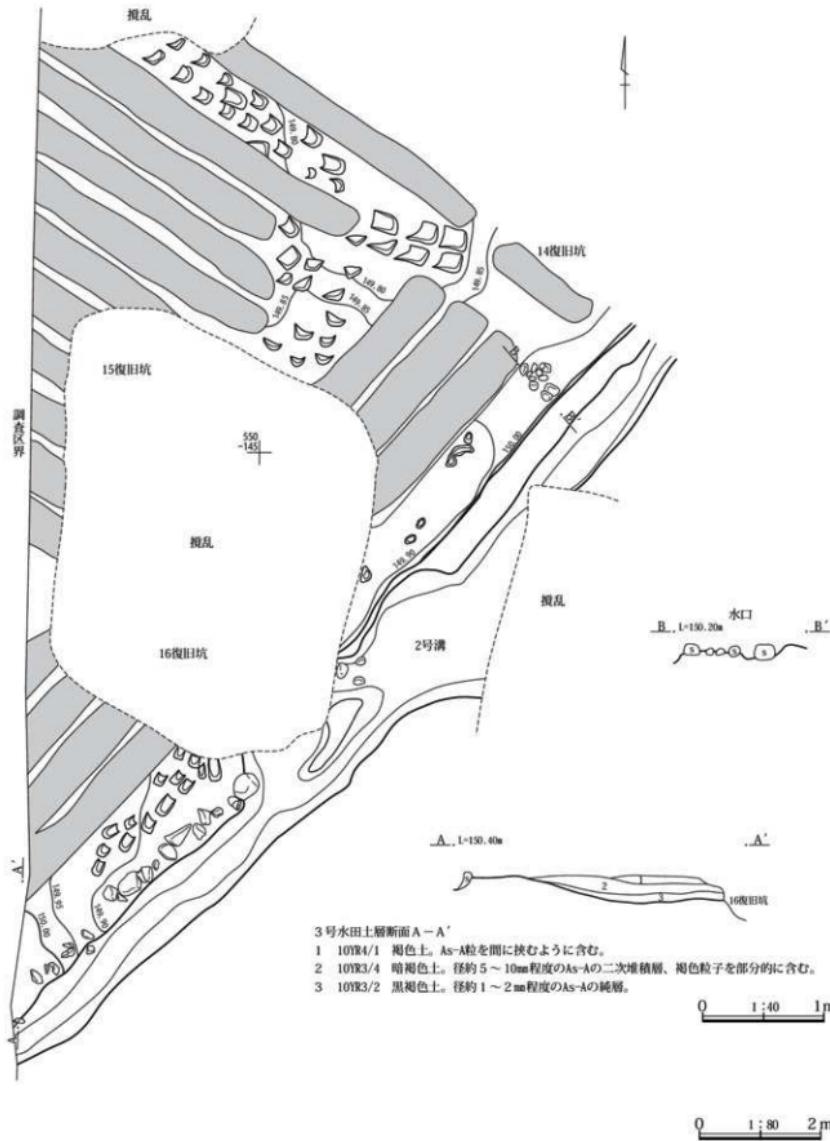
時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

2号水田



第24図 大島田Ⅱ遺跡2号水田

3号水田と掘削工具痕



第25図 大島田Ⅱ遺跡 3号水田と掘削工具痕

第4項 溝

本遺跡からは、調査区の中央からやや北寄りの位置から東西方向の1号溝、調査区南端寄りから北東—南西方向の2号溝がそれぞれ検出された。両溝とも天明3年の浅間山噴火に伴って降下したAs-Aによって埋もれた水田の水路として機能していたものと考えられる。

1号溝(第26図、PL. 5・20～22)

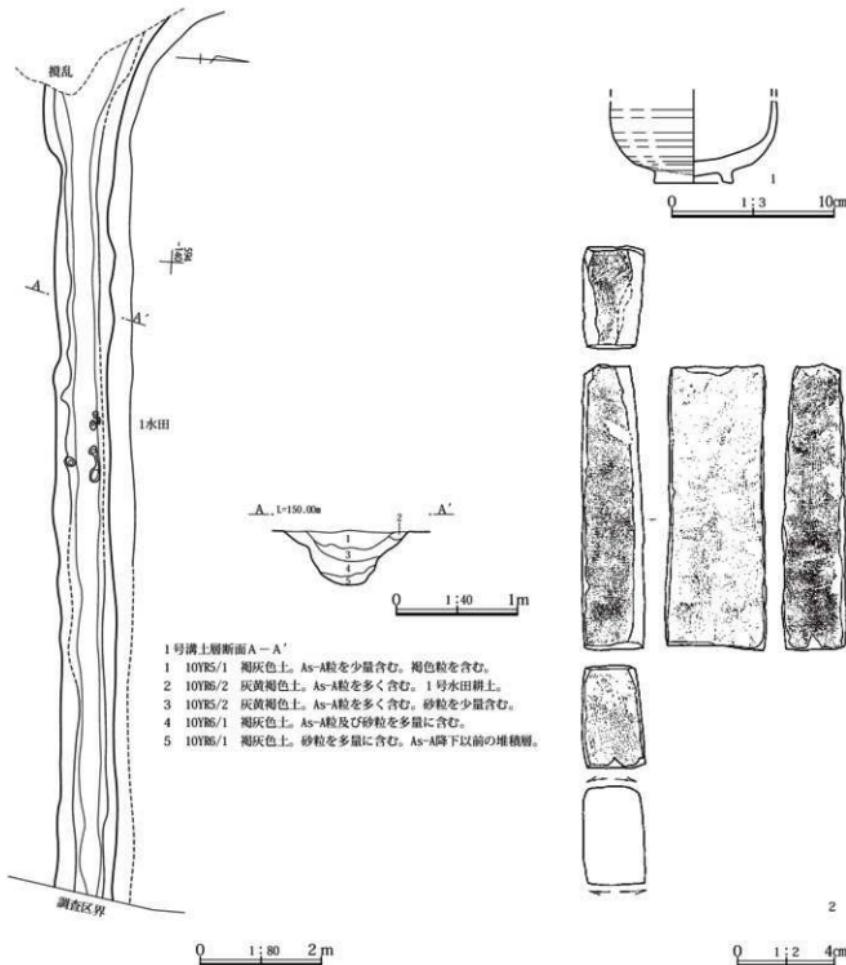
位置 調査区中央からやや北寄り。X=37591～37593、

Y=-85129～85143。

重複 なし。

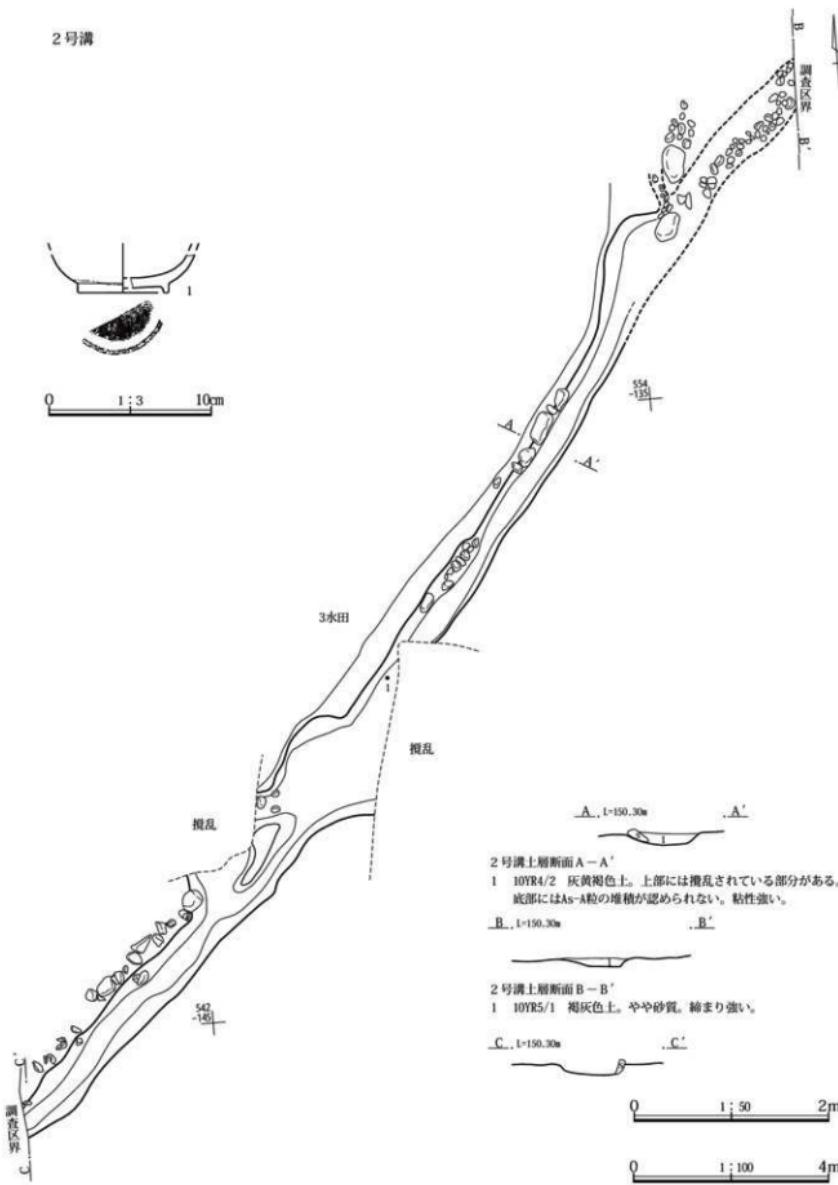
主軸方位 N-85°-E。

規模 検出全長13.70m、幅約0.70～0.95m前後、深さ約0.31～0.47m前後。



第26図 大島田II遺跡1号溝、出土遺物

2号溝



第27図 大島田II遺跡2号溝、出土遺物

埋土 As-Aを含む褐色土をベースとするが、最下層にはAs-Aは含まれない。

遺物 埋土中より、瀬戸・美濃陶器碗1/2片が出土。内面から高台脇に灰釉。貫入する。18世紀前～中葉頃のものと考えられる。また、磁石片1点が出土。

所見 東西方向の溝で、検出範囲における西端側が広がっていると共に、北西方向へもわずかに屈曲しているため、1号水田の南西端に沿って北西方向に伸びる溝と、西側へほぼ直進する溝とに分岐していた可能性を考えられる。

溝の北側から検出された1号水田と、溝の南側に位置し、9群復旧坑掘削の前段階に存在していた水田に伴う水路と考えられるが、検出範囲内では各水田への水口は検出されなかった。

溝の断面は、口が大きく開いたU字型を呈しており、しっかりととした掘り方を有している。最下層の埋土を除くすべての埋土からAs-Aが多く検出されており、天明3年の浅間山噴火後の水田の廃絶と同時に溝も機能を停止したことがうかがえる。ただ、最下層の埋土にはAs-Aの混入が全く見られない、浅間山噴火に伴うAs-Aの降下前に、溝底が若干埋もれた状態であったと考えられる。

溝底の標高はおおむね149.46～149.52m程度で、東西両端の高低差はほとんどない。

また、溝の北側である1号水田側には畦畔が取り付いている。高さ約0.03～0.06m前後である。溝の南側からは畦畔状の高まりの痕跡はまったく確認することが出来なかつた。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

2号溝(第27図、PL.15・16・20・21)

位置 調査区南端寄り。X=37540～37560、Y=-85131～-85149。

重複 なし。

主軸方位 N-40°-E。

規模 検出全長26.70m、幅約0.80～1.25m前後、深さ約0.07～0.25m前後。

埋土 灰黄褐色粘質土及び褐色砂質土が堆積。

遺物 埋土中より肥前陶器碗底部1/3片が1点出土。内面から高台脇に透明釉。釉は灰色味を帯びる。高台内に「清」押印。17世紀後葉頃のものと考えられる。

所見 北東～南西方向の溝で、検出範囲内では大きな屈曲や分岐は全く認められない。

検出範囲内の中央からやや北寄りの位置と、南端近くの2箇所で、3号水田への水口と考えられる部分が検出された。

溝の西岸側には大きめの川原石や小礫が組まれた箇所が検出された。溝の斜面が全面的に石組によって護岸されていた可能性も考えられる。

断面は浅いレンズ状を呈しており、埋土は、北寄りでは褐色砂質土、南寄りでは灰黄褐色粘質土がそれぞれ堆積しているが、As-Aの混入はほとんど見られない。

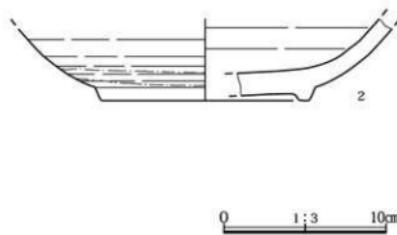
また、底面の標高はおおむね149.81～150.04m程度であるが、北東端と南西端における底面の高低差は最大でも約0.08m程度に過ぎない。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

第5項 遺構外出土遺物(第28図、PL.22)

擾乱内から瀬戸・美濃陶器鉢か皿底部1/4片が1点出土している。内面から高台脇に黄瀬戸釉。底部内面に目痕1カ所。近世のものと考えられる(2)。

また、10群復旧坑付近遺構外表土から繩文土器加曾利E4式深鉢胴部小片が1点出土している(1)。



第28図 大島田II遺跡遺構外出土遺物

第2部 沼田遺跡

はじめに

沼田遺跡では表土層直下から検出された洪水堆積物層下の遺構確認面を1面、天明3(1783)年の浅間山噴火の際に降下した浅間山軽石As-A層直下とその二次堆積層下を遺構確認面として近世の遺構を2面として調査した。

大島田II遺跡で検出された遺構と対応するのは本遺跡では2面目から検出された遺構群ということになり、本遺跡1面目において検出された遺構は、大島田II遺跡から検出された主な遺構群よりも若干新しい時期の遺構ということになる。ただし、大島田II遺跡から検出された復旧坑群の上面から検出された新1群及び新2群復旧坑と直接対応する時期のものであるか否かについては、両遺跡の距離が若干離れており、地形の状況も異なるので、単純には言い切れない。

発掘調査は、現在の生活道路を挟んで、路線幅と、現在使用されている道路への取り付く部分において行われ、調査区は、3本の現道を挟んで北西から南東にかけて細長く、やや南西側に湾曲した平面形状を呈している。4箇所の調査区に分割して発掘調査が行われた。北側から1~4区と呼称している。

このうち北東側に突出した、現道への接続部分である3区と、その西側に隣接する長大な2区の北側約半分の部分からは、遺構は全く検出されなかった。また、最も北寄りの調査区である1区からは1面の遺構のみが検出された。

2区の南側約半分の部分と、現道を挟んでその南側に隣接する4区では、1・2面にわたって復旧坑群や水田、溝等の遺構が検出されたが、全体的に検出状況はあまり良い状態とは言えなかった。

1面からは復旧坑が3群検出された。2面では復旧坑が7群、復旧坑掘削以前の水田が2枚、水田に伴う水路と考えられる溝3条とピット群が1群、木杭列が1条検出された。

また、大島田II遺跡から検出された復旧坑群と同様、各群の復旧坑は、方向や深さが各々で異なっているので、復旧坑各群は、復旧坑掘削前段階の地割に即していた可

能性が高いものと考えられる。

かつて安中市教育委員会が今回調査区の近接地点を発掘調査した際にAs-A降下後の復旧坑が検出されていたが、今回の発掘調査によっても同種の遺構が検出され、さらに今回の調査では、安中市教育委員会による発掘調査において検出された復旧坑群よりも新しい段階のものも検出することが出来た。

また、復旧坑の間の高まりの部分から検出された掘削痕は、各復旧坑によって掘り込まれていたり、削平せたりしていることから、大島田II遺跡から検出された掘削痕と同様、復旧坑掘削の前段階における復旧作業に伴うものと考えられる。大島田II遺跡と同様、天明3年の浅間山噴火の際に、まず、降下した軽石を鎧き込んで水面の復旧を試みていたことが判明するのである。

また、2面から検出された木杭列は、復旧坑群の境に当たる場所に、垂直に近い状態で列を成して打ち込まれていたことから、土留めないし地境としての目的で打設されたものと考えられる。

本遺跡における今回の発掘調査によって、

- (1) 浅間山軽石As-A降下前水田
- (2) 浅間山軽石As-A降下直後の掘削工具痕
- (3) 浅間山軽石As-A降下後の復旧坑

の3時期にわたる遺構が検出された点は、大島田II遺跡と同様であるが、浅間山軽石As-A降下後復旧痕掘削後の復旧坑では、新旧2時期のものが、明確に面を異にして検出された点は、本遺跡における今回の調査の成果であると言えよう。

このように、天明3年の浅間山噴火に伴う火山災害とそれに伴って発生した洪水・土石流などの被災後の耕地復旧が数次にわたってなされてきたことが発掘調査によって確認出来た事例としては、先述したように、大島田II遺跡の他、県内では中南部平野部の玉村町内における事例などによっても知られている。今回の調査成果によって、安中市域の九十九川流域のみならず、その北側に位置する丘陵を越えた秋間川流域においても、また、同様の状況であったことが明らかになった。

大島田II遺跡における調査成果と同様、この秋間川流域においても、この地に住まつた人々が、天明3年の災害の後、いかに耕地を復旧し、生活再建を図っていたかということを知る上での大きな手掛かりが得られたと

と言えよう。

第4表 沼田遺跡検出遺構数一覧表

検出遺構の種類	検出数	時期
1面復旧坑群	3	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火後に発生した洪水被害後
2面復旧坑群	7	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火直後
掘削工具痕		江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火直後
溝	3	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火以前
水田	2	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火以前
ピット	7	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火以前
木杭	21	江戸時代中期 天明3(1783)年浅間山噴火以前

第5表 沼田遺跡検出復旧坑一覧表

区	面	群	面積m ²	主軸方位	長さm	幅m	深さm	高まりの上幅m
1	1	1	5.26	N-46°-E	(1.80)	0.80	0.10～0.20	0.50
2	1	2	247.82	N-42～46°-W	(20.90)	0.50～0.90	0.02～0.10	0.10～0.40
4	1	3	218.68	N-50°-W	(19.00)	1.20～1.30	0.07	0.10～0.20
4	2	4	24.56	N-20°-E	(5.50)	0.60～0.90	0.20	0.10～0.20
4	2	5	9.75	N-21°-E	(4.40)	0.35～0.50	0.04～0.13	0.05～0.20
4	2	6	51.11	N-45°-E	(7.00)	0.45～0.65	0.09～0.22	0.10～0.25
2	2	7	132.73	N-42°-W	(17.50)	0.35～0.50	0.08～0.17	0.20～0.35
2	2	8	130.49	N-32～42°-W	17.15	0.35～0.60	0.06～0.23	0.10～0.30
2	2	9	6.80	N-11°-E	(2.55)	0.35～0.50	0.18～0.29	0.10～0.25
2	2	10	26.68	N-33°-W	3.40～4.10	0.30～0.45	0.05～0.19	0.05～0.15

第6表 沼田遺跡検出ビット一覧表

No.	木杭	平面形状	長径×短径m	深さm
1		円形	0.18×0.17	0.24
2	木杭10	円形	0.14×0.12	0.14
3		円形	0.14×0.13	0.11
4		楕円形	0.16×0.12	0.15
5	木杭15	円形	0.10×0.10	0.05
6		円形	0.09×0.09	0.05
7	木杭24	楕円形	0.15×0.11	0.16

第7表 沼田遺跡出土木杭一覧表

No.	ビット	長さm	幅m	深さm
1		0.37	0.05	0.25
5		0.57	0.03	0.35
6		0.58	0.05	0.06
7		0.31	0.03～0.06	0.06
8		0.45	0.05	0.08
9		0.23	0.02	0.11
10	ビット2	0.25	0.04	0.13
11		0.39	0.04	0.30
12		0.41	0.04	0.30
13		0.45	0.04	0.30
14		0.39	0.03	0.29
15	ビット5	0.15	0.02	0.03
16		0.37	0.02	0.29
17		0.37	0.06	0.25
18		0.25	0.02	0.21
19		0.42	0.02	0.37
20		0.24	0.03	0.20
21		0.34	0.02	0.27
22		0.35	0.02	0.33
23		0.34	0.04	0.09
24	ビット7	0.30	0.03	0.14

第1節 1面から検出された遺構と遺物

沼田遺跡では、現地表面下約1.50～2.00mは盛土であり、これを取り除くと3群の復旧坑が検出された。

第1項 復旧坑

天明3年の浅間山噴火に伴いAs-Aが降下・堆積し、それらを取り除いて埋没した水田を本格的に復旧するため、復旧坑群が掘削された後、この地は洪水に見舞われ、掘削された復旧坑群は埋没してしまった。さらにそれを復旧するため、新たに掘削されたものが1面目1・2・

4区において検出された復旧坑群である。

各復旧坑の幅は約0.80～1.00m前後で、後述する2面から検出された復旧坑よりも概して幅が広い。また、2面目の各復旧坑群の検出面積は平均100m²前後であるのに対し、1面目において検出された復旧坑群の検出面積は平均約200m²前後と、およそ倍の大きさである。復旧坑群の1区画当たりの面積が、2面から検出されたものよりも大きかったということになる。これらの復旧坑の底面や壁面、坑と坑の間の高まりの部分などには工具痕と見られる凹凸がみられるところもあったが、明瞭に検出来た訳ではなかった。

1群復旧坑(第29図、PL.25・26)

区 1区

位置 北西—南東に細長い1区北西寄り。中央部と北西侧と南東側は大きく攪乱され、破壊されている。北東側と南西側とは調査区外に出る。X=38333～38343、Y=-85039～-85047。

重複 なし。

坑の平面形状 北東—南西方向に細長い形状を呈しているものと考えられるが、北東・南西両側とも調査区外に出、長さわずか2.00m弱しか検出されなかったので、詳

細は不明である。

主軸方位 N-46°-E。

群の規模 検出された範囲は最大で北西—南東方向約2.60m、北東—南西方向約1.76m。2条。

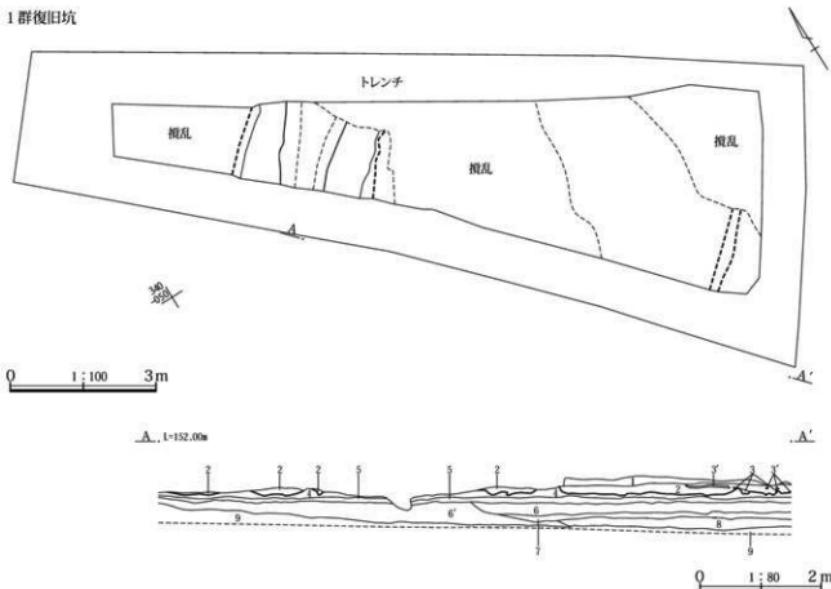
検出面積 5.26m²

坑の規模 検出された坑の長さは1.80m以上、幅約0.80m前後、深さ約0.10～0.20m前後、坑の間の高まりの幅は約0.50m前後。

埋土 黒褐色砂質土。

遺物 なし。

1群復旧坑



1群復旧坑土層断面A-A'

1 10TR4/1 褐灰色土。As-A粒を少量含む。天地返して掘り起こされた土。

2 10VR3/1 黒褐色砂質土。径約1～2mm程度の砂粒層。

3 10TR4/4 褐色砂質土。極小の粒子で構成される。粘性なし。

3' 10TR4/4 褐色砂質土。2層中に塊状に認められる。

4 10TR4/1 褐灰色土。As-A粒を少量含む。

5 10TR4/6 褐色土。As-A粒を多く含む。復旧坑掘削以前の天地返しの後の耕作土と考えられる。

6 10TR4/1 褐灰色土。As-C粒を多く含み、厚さ約10mm程度の褐色土の堆積層が2枚、部分的に堆積。

6' 10TR4/1 褐色土。6～8層の混土層。

7 10TR4/6 褐色土。As-C粒を多く含む。

8 10TR4/1 褐色砂質土。As-C粒を非常に多く含む。

9 10TR2/1 黒色砂質土。As-C粒を多く含む。As-YF粒を少量含む。粒子粗い。

第29図 沼田遺跡1区1面1群復旧坑

所見 復旧坑の北東端及び南西端はいずれも調査区外に出るため、全容が検出されたものは一つもない。長さ約1.80m以上の北東一南北方向に細長い坑が北西一南北方向に2条並列して検出されたが、北東・南北両側は調査区外にさらに広がっており、また、中央部と北西及び南北両側は擾乱されている。擾乱が甚だしく大きく破壊されており、全容はほとんど不明である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

2群復旧坑(第30・31図、PL.27～29)

区 2区

位置 北西一南北方向に細長く、北西寄りにやや湾曲する2区の南北側約半分を占める。X=38248～38288、Y=-84985～85007。

重複 2面から検出された7・8・10群復旧坑、1号ピット群・1号木杭列等の上面に位置するが、2面から検出された遺構群を掘り込んでいない。

坑の平面形状 ほぼ北西一南北方向に細長い長大な溝状を呈する。

主軸方位 検出範囲の中央部を横断する擾乱の北側ではN-46°-W、南側ではN-42°-W。

群の規模 検出された範囲は、最大で北西一南北方向約42.40m、北東一南北方向約7.10m。17条。

検出面積 247.82m²

坑の規模 検出された坑の長さは、検出範囲のほぼ中央部を横断する擾乱の北側では約14.50m以上、南側では約20.90m以上、幅は、検出範囲のほぼ中央部を横断する擾乱の北側では約0.50～0.80m、南側では約0.60～0.90m、深さは、検出範囲のほぼ中央を横断する擾乱の北側で約0.03～0.10m前後、南側で約0.02～0.05m前後、高まりの幅は、検出範囲のほぼ中央を横断する擾乱の北側では約0.10～0.40m前後、南側では約0.10～0.25m前後。

埋土 明褐色砂質土。

遺物 なし。

所見 復旧坑の北西・南北の両端はいずれも調査区外に出るため、全容が検出されたものは一つもない。長さ約40.00m以上に及ぶ北西一南北方向に細長く長大な坑が北東一南北方向に17条並列して検出されたが、北東・南北両側ともに調査区外にさらに広がっており、また、南

東側の東壁に掛かる部分の一部は擾乱されている。

検出範囲のほぼ中央部を北東一南北方向に横断するよう、幅1.40～2.70mにわたって擾乱されているが、この擾乱を境とした北側と南側とで、底面の標高は大きく異なっている。擾乱の南側では標高はおむね149.40～149.46m前後、北側ではおむね標高149.80～149.87m前後であり、約0.40～0.50m異なっている。

元来は北側が高く南側に低い水田面が形成されていたことがうかがえ、検出範囲のほぼ中央部を横断する擾乱の位置付近に段差が設けられ、南側と北側とに棚田状の水田となっていたものと推測出来る。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

3群復旧坑(第32図、PL.30)

区 4区

位置 北西一南北方向に長い4区の南北側約4/5の範囲で検出された。X=38201～38228、Y=-84963～84980。

重複 2面から検出された5・6群復旧坑、1号水田、2号溝の上面に位置するが、2群復旧坑と同様、2面から検出された遺構群を掘り込んでいない。

坑の平面形状 北西側と中央部が擾乱されているが、北西一南北方向に長い長大な溝状を呈しているものと考えられる。坑の南北端は、調査区の南北端寄りで止まっている部分が確認出来た箇所もある。坑の北西側は擾乱されており、不明瞭である。

主軸方位 N-50°-W。

群の規模 検出された範囲は最大で北西一南北方向約16.70m、北東一南北方向約11.80m。12条。

検出面積 218.68m²

坑の規模 検出された坑の長さは約19.00m以上、幅約1.20～1.30m前後、深さ約0.07m前後、坑の間の高まりの幅は約0.10～0.20m前後。

埋土 不明。

遺物 なし。

所見 復旧坑の北西端の全てが擾乱され、南北端も調査区外に出るため、全容が検出されたものは一つもない。長さが約20.00m以上に及ぶであろう北西一南北方向に長大な坑が北東一南北方向に12条並列して検出された。検出範囲の中央からやや北西寄りの部分も大きく擾乱さ

れている。また、検出範囲内における北東隅部も不明瞭である。

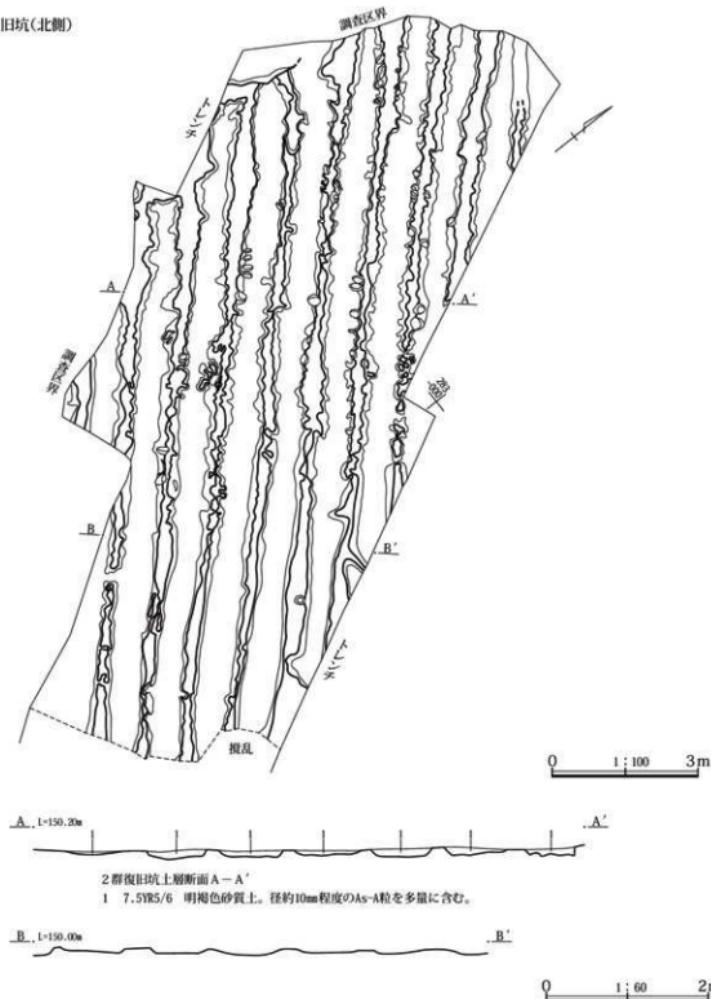
2区から検出された2群復旧坑とは、主軸方向は近いが、坑の幅は異なっており、非調査箇所を含んで2・3群の復旧坑が継続していたとは考えにくい。なお、3群

復旧坑では、一部の坑内に長さ約0.70～0.90m前後の仕切り壁が設けられていた箇所が確認出来たが、あまり明瞭には検出することは出来なかった。

坑底の標高はおむね148.83～148.93m前後である。

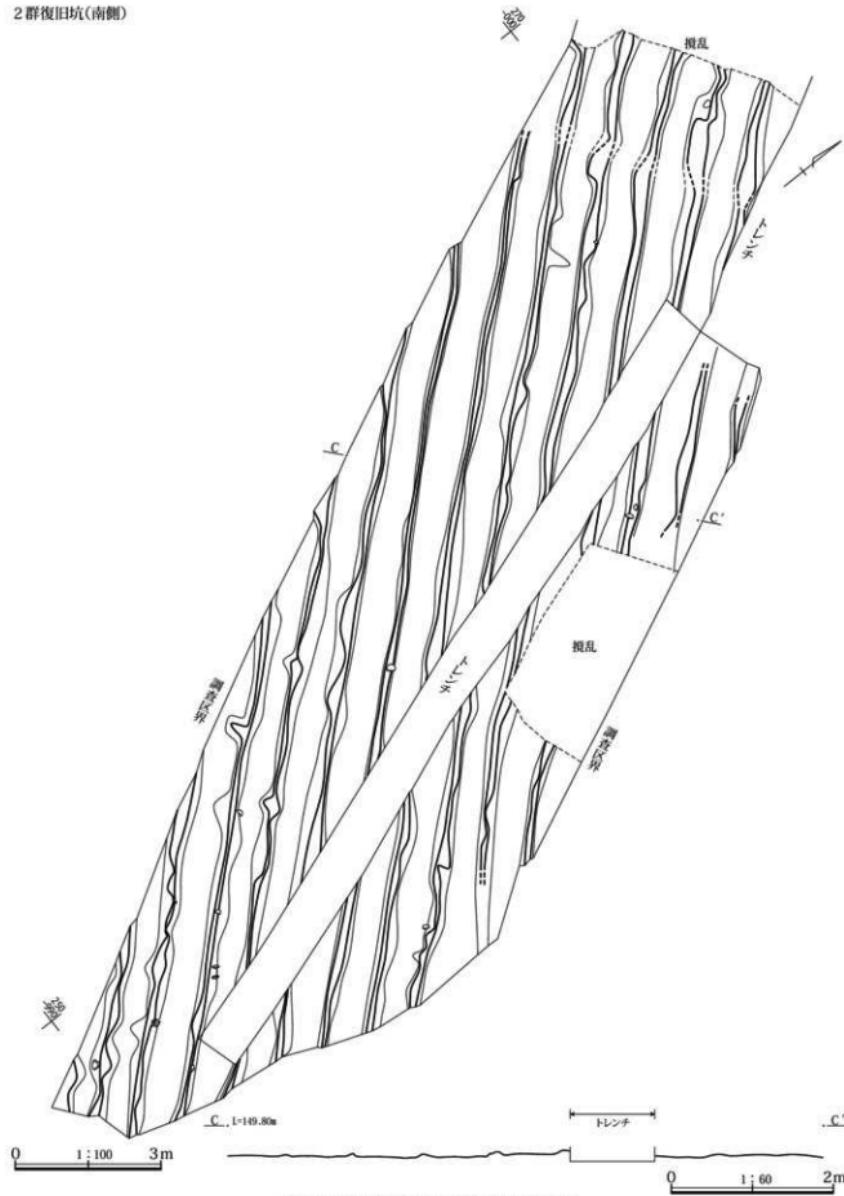
時期 天明3(1783)以降、江戸時代中期。

2群復旧坑(北側)



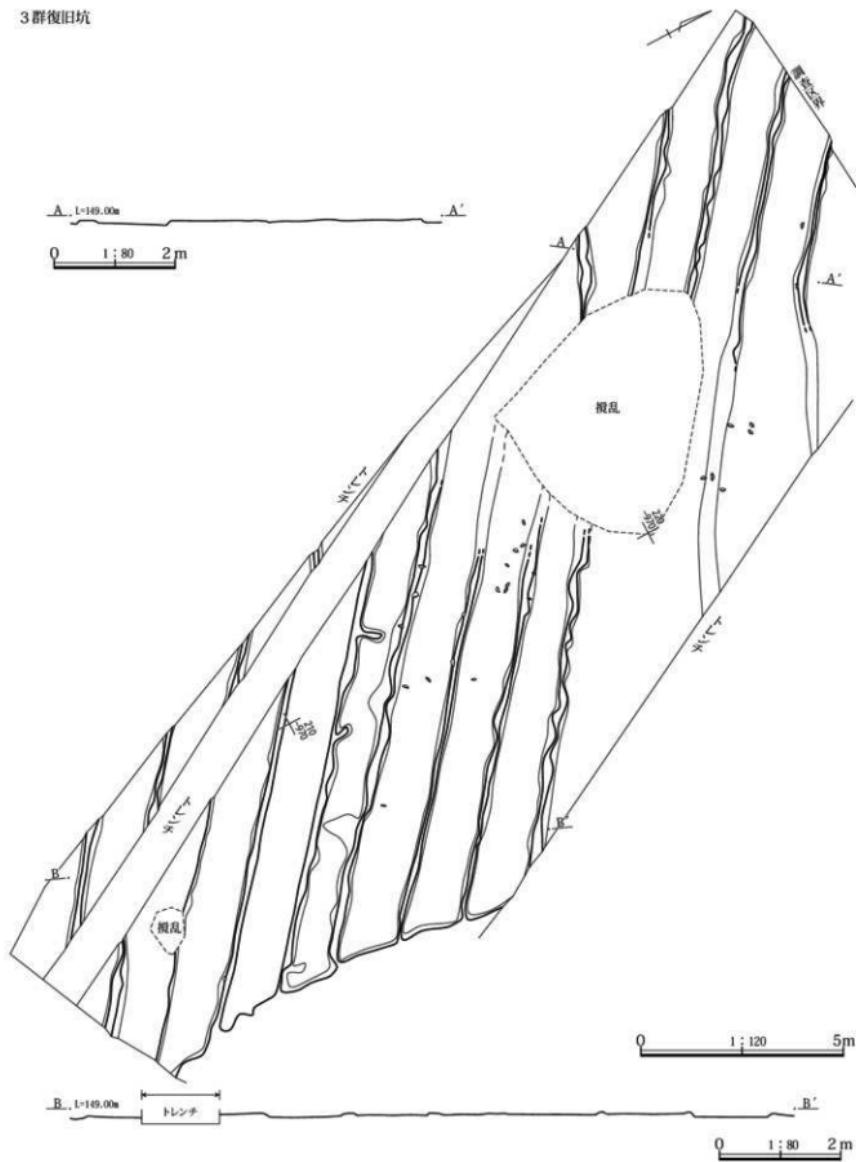
第30図 沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)

2群復旧坑(南側)



第31図 沼田遺跡2区1面2群復旧坑(南側)

3群復旧坑



第32図 沼田遺跡4区1面3群復旧坑

第2節 2面から検出された遺構と遺物

調査対象範囲において、1面目の、洪水堆積層によって埋没した遺構確認面から厚さ約0.20～0.30m程度の堆積層を取り除くと、天明3(1783)年の浅間山噴時による軽石As-Aの一次堆積層ないし二次堆積層下から復旧坑群を7群、水田2枚、溝3条、ピット群1群、木杭列1条などの遺構が検出された。

第1項 復旧坑

1面目の遺構確認面から厚さ約0.20～0.30m程度の堆積土を取り除いて、As-Aの二次堆積層の下から復旧坑群が7群検出された。各復旧坑の深さは約0.10～0.20m前後であるが、幅は0.30m前後のものから0.60m前後のものまでと、また、主軸方位も復旧坑群によって大きく異なっている。

また、一部においては面的な広がりをもって検出されており、各復旧坑の間の、幅約0.10～0.20m程度の高まりの部分には、掘削工具痕の凹凸が明瞭に見出されるものも存在している。工具痕の幅は約0.20m前後であり、ほぼ水平に並んだ状態で検出された。これらの復旧坑や掘削工具痕の間に残存するような形でAs-Aの一次堆積物が認められた。

4群復旧坑(第33図、PL.31)

区 4区

位置 北西～南東方向に細長い4区の北東寄り。北・東・西側は調査区外に出る。1号溝及び5群復旧坑の北側に隣接する。X=38230～38237、Y=-84972～84981。

重複 なし。

坑の平面形状 北東～南西方向に長い形状を呈していたものと考えられるが、北・東・西側とも調査区外に出るため、全容は不明である。

主軸方位 N-20°-E。

群の規模 検出された範囲は最大で東西約9.00m、南北約5.60m。11条。

検出面積 24.56m²

坑の規模 検出された坑の長さは約5.50m以上、幅約0.60～0.90m前後、深さ約0.20m前後、坑の間の高ま

りの幅は約0.10～0.20m前後。

埋土 明黄褐色砂質土。

遺物 なし。

所見 復旧坑の北端はいずれも調査区外に出るため、全容が検出されたものは一つもない。検出最大長約5.50mの北東～南西方向に長く、やや幅広な隅丸長方形状を呈する坑が北西～南東方向に11条並列して検出されたが、北西・北東両側は調査区外にさらに広がっている。

坑底の標高はおよそ148.70～148.90m前後で、縱方向3列3段の工具痕と、それらとは別にランダムな工具痕が検出された。

検出範囲の西寄りの部分では、南側に5群復旧坑が隣接するが、中央から東端にかけては、南側約16.00m離れて、2号溝とその南側の6群復旧坑群が検出された。本群と南側2号溝、6群復旧坑との間に、標高約148.65～148.88m前後の何も遺構が検出されない空間が存在しているのみである。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

5群復旧坑(第33図、PL.31・32)

区 4区

位置 北西～南東に細長い4区の北西寄り。南西側は調査区外に出る。4群復旧坑の南側に隣接する。X=38227～38231、Y=-84978～84982。

重複 1面から検出された3群復旧坑の下層に位置するが、1面からの掘り込みによる破壊は受けていない。

2面から検出された1号溝の西端を振り込む。

坑の平面形状 北東～南西方向に細長い形状を呈していたものと考えられるが、南・西側とも調査区外に出るため、全容は不明である。

主軸方位 N-21°-E。

群の規模 検出された範囲は最大で東西約4.00m、南北約4.22m。7～8条。

検出面積 9.75m²

坑の規模 検出された坑の長さは約4.40m以上、幅約0.35～0.50m前後、深さ約0.04～0.13m前後、坑の間の高まりの幅は約0.05～0.20m前後。

埋土 As-A二次堆積の褐灰色砂質土。

遺物 なし。

所見 復旧坑の南端はいずれも調査区外に出るため、全

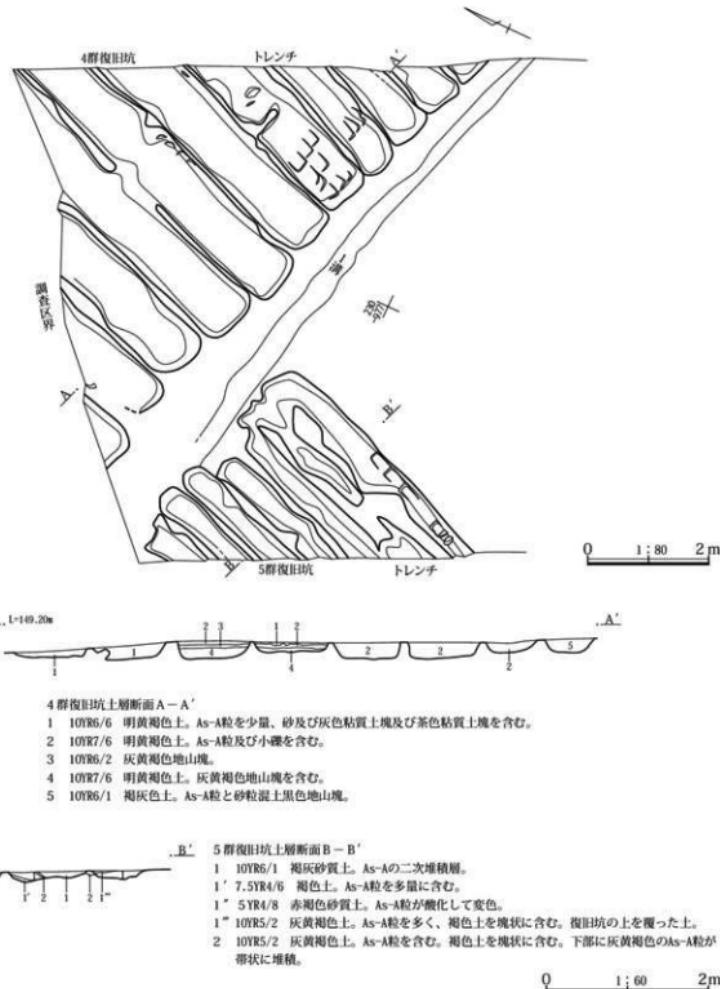
容が検出されたものは一つもない。検出最大長約4.40mの北東—南西方向に細長い坑が北西—南東方向に7~8条並列して検出されたが、南西側は調査区外にさらに広がっている。最東端側の坑は、検出状態があまり明瞭ではない。主軸方位は北側に隣接する4群復旧坑と類似す

るが、坑の幅は4群に比べてかなり狭小で掘り方は粗い。坑底の標高はおよそ148.70m前後で、縦方向1列の工具痕が検出された。

東側に隣接する構造は検出されなかった。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

4・5群復旧坑



第33図 沿田遺跡4区2面4・5群復旧坑

6群復旧坑(第34図、PL.31～33)

区 4区

位置 北西—南東方向に細長い4区の南西寄りの位置で検出された。北西—南東方向から南に屈曲する2号溝の南西及び西側に隣接する。X=38201～38212、Y=-84963～-84973。

重複 1面から検出された3群復旧坑の下層に位置するが、1面からの掘り込みによる破壊は受けていない。

2面から検出された1号水田を掘り込んで造成されており、1号水田を復旧するための造作と考えられる。

坑の平面形状 西側と南側が調査区外に出るため、全容は不明であるが、北東—南西方向に細長い溝状を呈して

いるものと考えられる。

主軸方位 N-45°-E。

群の規模 検出された範囲は最大で南北約7.50m、東西約6.10m、21条。

検出面積 51.11m²

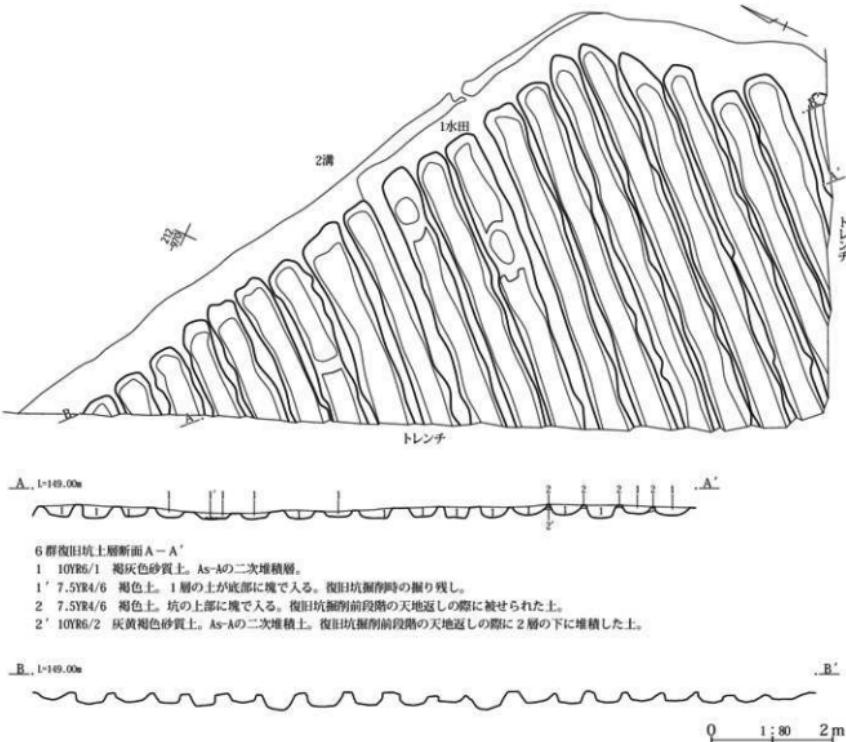
坑の規模 検出された坑の長さは約7.00m以上、幅約0.45～0.65m前後、深さ約0.09～0.22m前後、坑の間の高まりの幅は約0.10～0.25m前後。

埋土 As-A二次堆積の褐色砂質土。

遺物 なし。

所見 西及び南端が調査区外に出るため、全容が検出されたものは一つもない。長さが約7.00m以上に及ぶであ

6群復旧坑



第34図 沼田遺跡4区2面6群復旧坑

ろう北東—南西方向に細長い坑が北西—南東方向に21条にわたって並列して検出された。2号溝西側の1号水田の範囲を踏襲しており、1号水田の復旧のための造作であることは明瞭である。

坑底の標高はおおむね148.50～148.60m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

7群復旧坑(第35・36図、PL.33)

区 2区

位置 北西—南東方向に長い2区の南東寄りの位置で検出された。 $X=38248 \sim 38271$ 、 $Y=-84985 \sim 84997$ 。

重複 1面から検出された2群復旧坑の下層に位置するが、1面からの掘り込みによる破壊は受けていない。

坑の平面形状 東・西・南側が調査区外に出るため、全容は不明であるが、北西—南東方向に細長い溝状を呈しているものと考えられる。

主軸方位 $N-42^{\circ}-W$ 。

群の規模 検出された範囲は最大で南北約23.00m、東西約7.10m、18条。

検出面積 132.73m²

坑の規模 検出された坑の長さは約17.50m以上、幅約0.35～0.50m前後、深さ約0.08～0.17m前後、坑の間の高まりの幅は約0.20～0.35m前後。

埋土 As-A二次堆積の褐色砂質土、一部下層にAs-Aの二次堆積層が地下水の影響で酸化したものと考えられる暗赤褐色砂質土が堆積。

遺物 なし。

所見 東・西・南端が調査区外に出るため、全容が検出されたものは一つもない。長さが約17.50m以上に及ぶであろう北西—南東方向に細長く長大な溝状の坑が北東—南西方向に18条にわたって並列して検出された。

各坑底からは掘削痕が多数、明瞭に検出されている。また、坑の間の高まりの部分からは、一部で復旧坑掘削前段階の工具痕が検出された。坑底の標高はおおむね149.10～149.15m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

8群復旧坑(第37・38図、PL.34・41)

区 2区

位置 北西—南東方向に長い2区の中央からやや南東寄

りの位置にかけて検出された。1号ビット群・1号木杭列の北西側、9群復旧坑の南側に隣接する。 $X=38272 \sim 38290$ 、 $Y=-84994 \sim 85007$ 。

重複 1面から検出された2群復旧坑の下層に位置するが、1面からの掘り込みによる破壊は受けていない。

坑の平面形状 東・西・南端が調査区外に出るため、全容は不明であるが、北西—南東方向に細長い溝状を呈しているものと考えられる。

主軸方位 $N-32^{\circ} \sim 42^{\circ}-W$ 。

群の規模 検出された範囲は最大で南北約19.00m、東西約11.00m、18条。

検出面積 130.49m²

坑の規模 検出された坑の長さは約17.15m以上、幅約0.35～0.60m前後、深さ約0.06～0.23m前後、坑の間の高まりの幅は約0.10～0.30m前後。

埋土 As-A二次堆積の灰黄褐色砂質土。

遺物 埋土中より製作地不詳の火入れ口縁部～体部片が1点出土。口縁部から体部は輪花状に作る。口縁部内面から外面向に灰軸。外面に黄緑色の上絵。灰軸には貫入があり、上絵は白濁する。江戸時代か。

所見 東・西・南端が調査区外に出るため、全容が検出されたものは検出された坑の半数のみであった。

北東側には9群復旧坑が隣接するが、北西側からは2区北端までの間約35.00mは遺構が検出されていない。

長さが約17.15m以上に及ぶであろう北西—南東方向に細長く、西側に湾曲した長大な溝状の坑が北東—南西方向に18条並列して検出された。

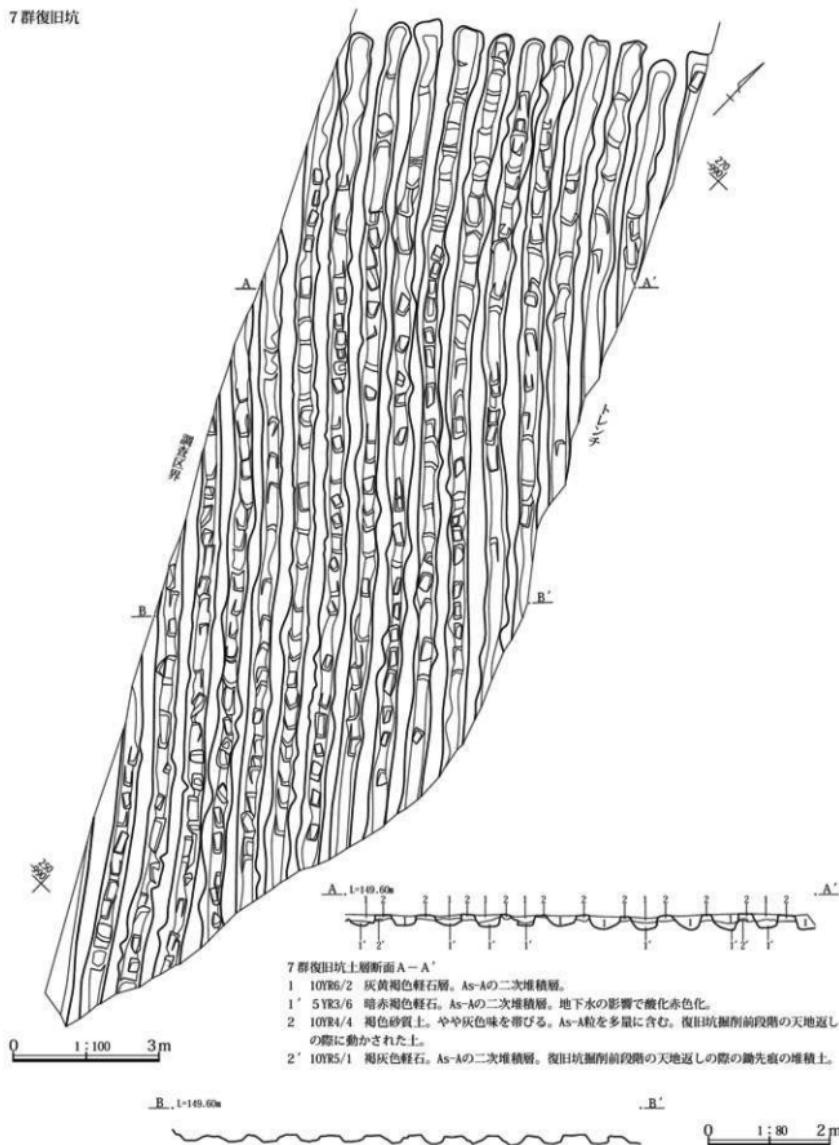
調査区の東端から約7条目までの坑は、西側に湾曲する北西—南東方向の溝状の細長く長大な形状を呈しているが、それよりも西側から検出された坑は、北側に長さ約2.40～8.25m程度の比較的短い坑と、その南側に長さ約11.00m程度のやや長めの坑とが連続するような形状を呈している。

坑底からは縦方向で坑底とほぼ同程度の幅の掘削痕が多数、明瞭に検出されている。特に東側から検出された長大な坑において顕著である。また、坑の間の高まりの部分からは、一部で復旧坑掘削前段階の工具痕が検出されたが、あまり多くはなく、また明瞭ではない。

坑底の標高はおおむね149.40～149.50m前後である。

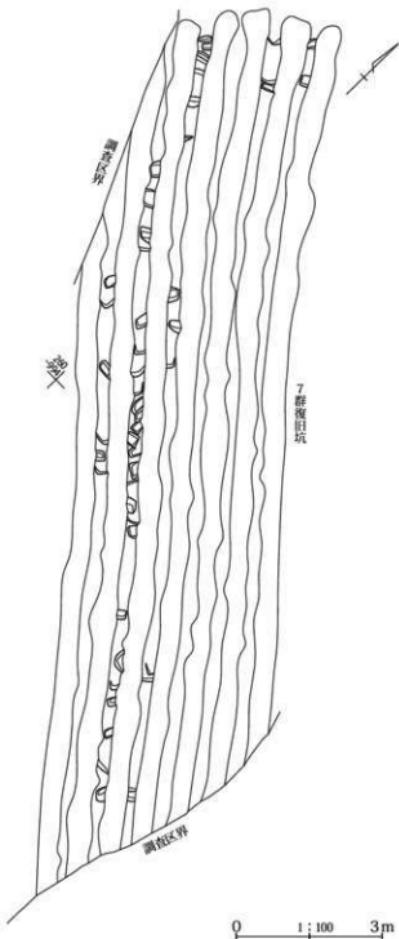
時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

7群復旧坑



第35図 沼田遺跡2区2面7群復旧坑

掘削工具痕



第36図 沼田遺跡2区2面7群復旧坑掘削前の掘削工具痕

9群復旧坑(第37図、PL.34)

区 2区

位置 北西—南東方向に長い2区のほぼ中央、東寄りの位置から検出された。8群復旧坑の北側に隣接する。 $X = 38289 \sim 38295$ 、 $Y = -85001 \sim 85004$ 。

重複 なし。

坑の平面形状 北及び東側が調査区外に出るため、全容は不明であるが、ほぼ南北に長い溝状を呈しているものと考えられる。

主軸方位 $N-11^{\circ}-E$ 。

群の規模 検出された範囲は最大で南北約6.54m、東西約2.00m。7条。

検出面積 6.80m²

坑の規模 検出された坑の長さは約2.55m以上、幅約0.35～0.50m前後、深さ約0.18～0.29m前後、坑の間の高まりの幅は約0.10～0.25m前後。

埋土 As-A二次堆積の灰黃褐色砂質土。一部底部にAs-Aが酸化して赤味を帯びたと考えられる褐色土が堆積している。

遺物 なし。

所見 北及び東側大部分が調査区外に出るため、全容が検出されたものは皆無であり、明らかにし難いが、検出された北西端の坑の西側は北西側に向かってやや急傾斜しており、北西側には復旧坑は掘削されていない。

南西側には8群復旧坑が隣接するが、北西側から2区北端までの間約35.00mは遺構が検出されていない。

長さが約2.55mの南北方向に長い坑が北西—南東方向に7条並列して検出された。

坑底からは掘削痕は検出されず、また、坑の間の高まりの部分からも復旧坑掘削前階の工具痕は検出されなかつた。

坑底の標高はおおむね149.45m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

10群復旧坑(第39図、PL.35・41)

区 2区

位置 北西—南東方向に長い2区の南東寄りの位置から検出された。7群復旧坑の北側、1号ピット群・1号木杭列の南側に隣接する。特に南西端部は7群復旧坑の北西端とは端部を接している。 $X = 38267 \sim 38274$ 、 $Y =$

8・9群復旧坑

9群復旧坑土層断面 A-A'

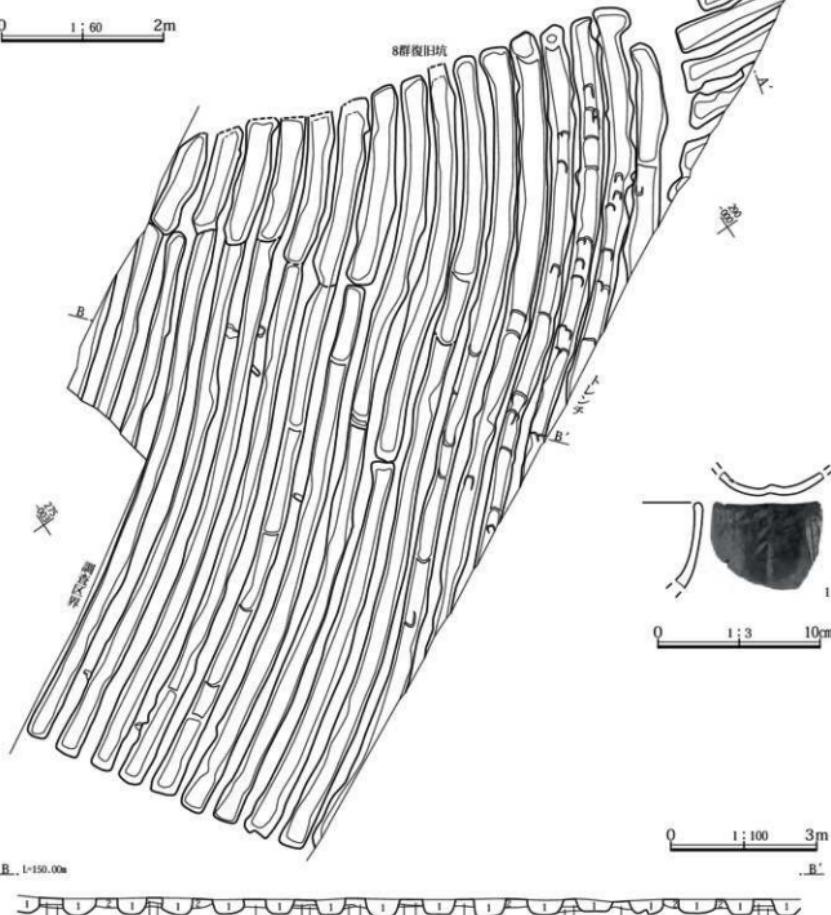
- 1 10YR6/2 灰黄褐色輕石。As-Aの二次堆積層。
- 1' 7.5Y4/4 褐色土。As-Aの二次堆積層。酸化して赤味を帯びている。
- 2 7.5Y4/6 褐色土。As-A粒を僅かに含む。粘性強い。

0 1:60 2m

A-A', L=150.00m

A'

9群復旧坑

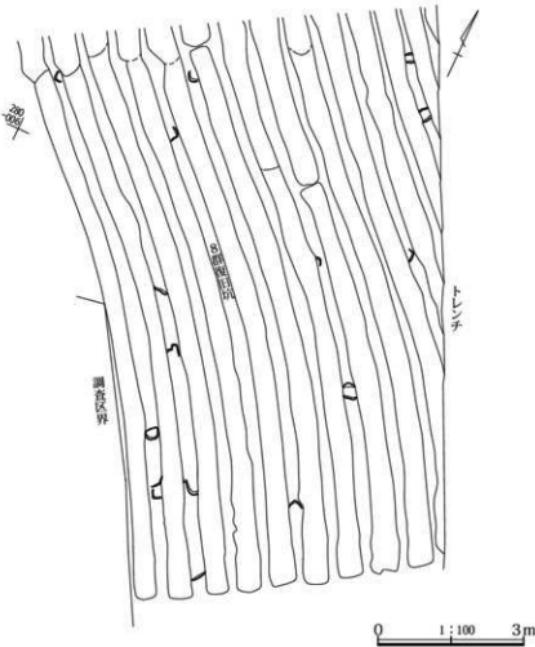


8群復旧坑土層断面 B-B'

- 1 10YR6/2 灰黄褐色輕石。As-Aの二次堆積層。
- 2 10YR4/4 褐色砂質土。As-A粒を多く含む。やや灰色を帯びた上。
- 2' 10YR5/1 褐灰色輕石。As-Aの二次堆積層。1層より粒子が細かい。

0 1:60 2m

第37図 沼田遺跡2区2面8・9群復旧坑、8群復旧坑出土遺物



第38図 沼田遺跡2区2面8群復旧坑掘削前の掘削工具痕

-84991 ~ 84999。

重複 なし。

坑の平面形状 北西-南東方向に長い闊丸長方形状を呈するが、他群の復旧坑に比べて、極端に短い。

主軸方位 N-33°-W。

群の規模 検出された範囲は最大で南北約4.00m、東西約7.00m。17条。

検出面積 26.68m²

坑の規模 検出された坑の長さは約3.40 ~ 4.10m、幅約0.30 ~ 0.45m前後、深さ約0.05 ~ 0.19m前後、坑の間の高まりの幅は約0.05 ~ 0.15m前後。

埋土 As-Aを多量に含む灰白色土。

遺物 墓土中より砥石片1点が出土。

所見 東西両側が調査区外に出るため、全容は不明であるが、長さ約3.40 ~ 4.10m前後の北西-南東方向に長

い闊丸長方形状を呈する坑が、北東-南西方向に17条並列して検出された。なお、中央からやや南東寄りの位置を幅約0.40 ~ 0.50m程度、北東-南西方向に帯状に搅乱されている。

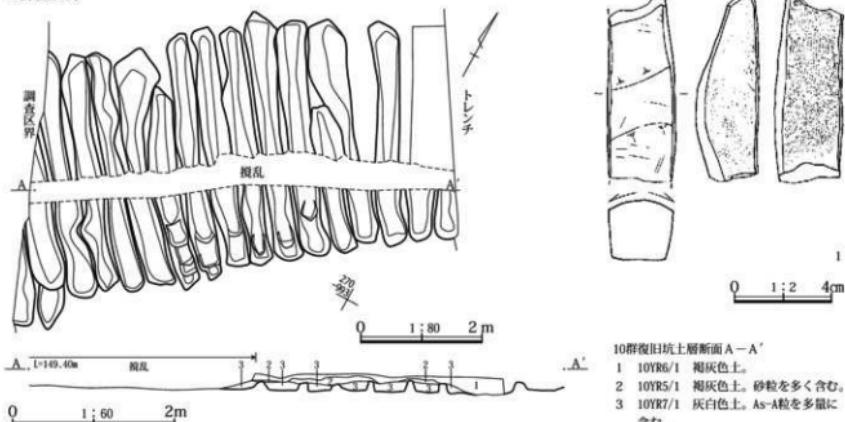
南西端部は、南側の7群復旧坑の北西端と完全に接しており、坑の配列もほぼ揃っていて、両群の坑は恰も接続するかの様相を呈している。本群は7群復旧坑と一体のものであった可能性が指摘できる。

坑の南西側からは掘り直された痕跡と共に縱方向の掘削痕が底部から明瞭に検出されている。また、坑の間の高まりの部分の範囲は狭いため、復旧坑掘削前段階の工具痕は検出されなかった。

坑底の標高はおおむね149.00 ~ 149.30m前後である。

時期 天明3(1783)年以降、江戸時代中期。

10群復旧坑



第39図 沼田遺跡2区2面10群復旧坑、出土遺物

第2項 水田

本遺跡からは復旧坑が掘り込まれた部分の間や周囲の部分から、復旧坑掘削以前の段階の水田の残骸が検出された箇所が2箇所存在した。いずれもAs-Aの一次堆積層の下から検出されていることから、天明3(1783)年の浅間山噴火以前に機能していた水田面と考えられる。

下層からは秋間川の礫が検出され、遺構は全く検出されなかったので、近世以前の段階においても水田が継続的に営まれていたのか否かについては明らかに出来なかったが、水田に伴う水路が3条検出され、水田への水口が検出された箇所もある。

1号水田(第40図、PL.38・39)

区 4区

位置 北西—南東方向に細長い4区の南北寄りの位置で検出された。北西—南東方向から南北方向に屈曲する2号溝の南西及び西側に隣接する。 $X = 38203 \sim 38209$ 、 $Y = -84963 \sim 84970$ 。

重複 1面から検出された3群復旧坑の下層に位置するが、1面からの掘り込みによる破壊は受けていない。6群復旧坑に掘り込まれる。

規模 検出された範囲は、最大で北東—南西方向約6.62

m、北西—南東方向約7.50m。

検出面積 58.51m²

遺物 水田面から木杭6点が出土(非掲載)。他に瀬戸・美濃陶器皿底部片が1点出土。内面から高台内周縁に長石軸、底部内外面に目痕3箇所。17世紀頃のものと考えられる。

所見 ほぼ全域を6群復旧坑によって掘り込まれており、6群復旧坑掘削以前の水田面は各坑の北東端から北東側を北西から南東方向にかけて一部屈曲して流れる、この水田に伴う水路と考えられる2号溝までの間の幅約0.20～0.50m前後の、帯状に復旧坑に掘り残された部分のみである。西側と南側は調査区外へと広がっており、水田の北東側の一部が検出された状態である。

6群復旧坑は、坑間狭く、ほぼ境を接して密に掘り込まれているため、坑間の部分からの、復旧坑掘削以前の水田の検出はほとんど不可能な状態であった。

この部分における水田面の標高は、おおむね148.67～148.69m前後で、配水がどの方向に向かってなされたのかという点は明らかにすることが出来なかつた。

水田面に足跡等は全く検出されなかつたが $X = 38207.3 \cdot Y = -84963.9$ 付近から $X = 38210 \cdot Y = -84968$ 付近にかけての2号溝との境の部分からは、長さ約5.00mにわたって畦畔状の高まりが検出された。検出

された畦畔の高まりは約0.01～0.04m前後。基底部幅は約0.10～0.20m前後あり、残存状態は良くない。

検出された長さ約5.00mに及ぶ畦畔のほぼ中央から2号溝からの水口が検出された。X=38209・Y=-84966付近の位置である。検出された開口部の幅は約0.08～0.20m前後であった。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

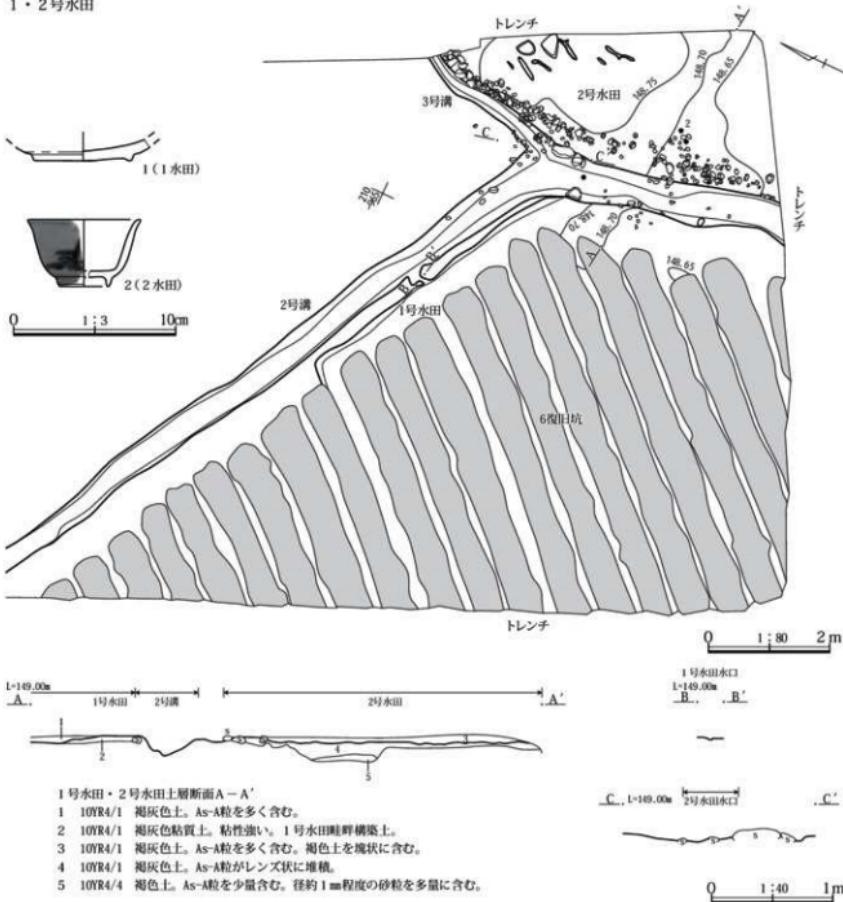
2号水田(第40図、PL.38・39・41)

区 4区

位置 北西—南東方向に細長い4区の南東寄りの位置で検出された。北西—南東方向から南北方向に屈曲する2号溝の屈曲部分以南と、2号溝屈曲部分に北東側から合流する3号溝の東側に隣接する。X=38204～38210、Y=-84960～84963。

重複 なし。

1・2号水田



第40図 沼田遺跡4区2面1・2号水田、出土遺物

規模 検出された範囲は、最大で北東—南西方向約2.72m、北西—南東方向約5.28m。

検出面積 10.23m²

遺物 水田面から製作地不詳の小杯1/3片1点が出土。内面は無文。外面は簡略化した文様の染付。口縁部外面に1条、高台境に2重圓線。高台内周縁に1重圓線。19世紀前葉～中葉頃のものと考えられる。

所見 東側及び南側の大部分が調査区外に出るため、不明な部分が多い。水田の西際のごく一部が検出されているに過ぎない。

調査対象範囲内において、復旧坑は検出されておらず、被災後の復旧がどのような形で行われたのかは不明である。

2・3号溝と接する西際には径0.10m以下の自然礫を積み上げて構築された畦畔が検出された。2号溝に面してX=38207.5・Y=-84963付近で検出された水口は、径約0.20～0.50m大きな川原石を並べて作られている。これら畦畔や水口を構成した礫は、水田面の下層の地山である秋間川の礫層のものを使用している。

水田面は、標高約148.63～148.79m前後の、北から南に向かって緩やかに傾斜する平坦面が形成されており、検出範囲内における南北の標高差は最大で約0.16m程度であった。

足跡等は全く検出されなかった。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

第3項 ピット群・木杭列

8群復旧坑と南東側に隣接する10群復旧坑との間は、約0.80～1.00m前後空いているが、この部分に北東—南西方向に1列に継列する木杭群とピット群が検出された。

復旧坑群の間から検出されたことから、復旧坑掘削前段階に存在していた天明3(1783)年の浅間山噴火以前に機能していた水田の地割の境を示すためのものと考えられる。

ピットには、木杭が打ち込まれた状態で出土しているものが3基あり、ピット群は、元来、木杭が打ち込まれていた痕跡と考えられ、両者は一体のものと見られる。とは言うものの、木杭のみが検出された例では、木杭のみが出土し、掘り方が全く検出出来なかった箇所も存在している。

調査対象範囲においてピット7基、木杭21本が検出・出土した。本遺跡において木杭列が検出された箇所は、ここのみである。木杭列・ピット群の北西側と南東側としては、約0.30～0.50m前後の標高差があり、木杭列はその段差の土留めの補強として打設されていたものと考えられる。

1号ピット群・1号木杭列(第41・42図、PL.35～38・41) 区 2区

位置 北西—南東方向に長い2区の南東寄りの位置から検出された。7群復旧坑の北側、10群復旧坑の北西側、8群復旧坑の南東側に隣接する。X=38272～38275、Y=-84993～84998。

重複 なし。

平面形状と規模 不整円形状を呈するピットが7基、木杭が21本北東—南西方向に隣接して継列する。但し、必ずしも全てのピット・木杭がほぼ一直線上に整然と継列しているような状況ではなく、南北にズレしており、ややランダムな印象を受ける。

大きさ・深さともそれぞれまちまちであるが、共通する傾向を見出すことが出来る部分もある。

所見 1～4号ピットは、東からほぼ直線状に、芯々間約0.75m間隔で並び、柱穴列状を呈する。平面形状は長径約0.14～0.18m前後×短径約0.12～0.17m前後の不整円形状であり、深さまおおむね類似している。

また、木杭22から18・19・20を経て、1号木杭列の中で最も西側から検出された木杭21までは、段差法面にほぼ直線的に約0.25m前後の間隔で継列している。

木杭は、いずれも自然木を用いたものであったが、中には土中に刺した先端を工具によって尖らせる加工が施されたものも存在した。また、木杭列を構成する木杭のほとんどのは、地面に対して垂直に近い状態で検出された。

これらの木杭列及びピット群は、復旧坑によって全く掘り込まれていないことから、復旧坑は、元來の水田の地割を忠実に踏襲して掘削されていたことが判明する。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

(1) 1号ピット

位置 東から2基目のピット。木杭8～10の東側、木

杭1・6・7の南西側に位置する。1～4号ピットは、東からほぼ直線状に、芯々間約0.75m間隔で並び、柱穴列状を呈する。平面形状や深さもよく類似する。

平面形状：ほぼ円形状を呈する。

規模：長径0.18×短径0.17×深さ0.24m。

埋土：褐灰色粘質土。

遺物：なし。

(2) 2号ピット・木杭10

位置：東から3基目のピット。木杭11の東側、木杭8・9の南西側に位置する。

平面形状：ほぼ円形状を呈する。

規模：長径0.14×短径0.12×深さ0.14m。木杭10(2)は長さ0.25m×幅0.04m×土中部分の深さ0.13m。

埋土：褐灰色粘質土。

遺物：中心に木杭10が直立して埋め込まれている。

(3) 3号ピット

位置：東から4基目のピット。木杭14の東側、木杭13の西側に位置する。

平面形状：ほぼ円形状を呈する。

規模：長径0.14×短径0.13×深さ0.11m。

埋土：不明。

遺物：なし。

(4) 4号ピット

位置：東から5基目のピット。5・6号ピットの北側、木杭14の南西側に位置する。

平面形状：北西—南東方向にやや長い楕円形状を呈する。

規模：長径0.16×短径0.12×深さ0.15m。

埋土：褐灰色粘質土。

遺物：なし。

(5) 5号ピット・木杭15

位置：東から6基目のピット。4号ピットの南側に位置する。西側6号ピットと接する。

平面形状：ほぼ円形状を呈する。5・6号ピットは、1～4号ピットに比べて大きさ・深さが格段に小規模である。

規模：径0.10×深さ0.05m。木杭15は長さ0.15m×幅

0.02m×土中部分の深さ0.03m。

埋土：不明。

遺物：北寄りに木杭15が頭部を北西側にやや傾けた状態で出土。

(6) 6号ピット

位置：東から7基目のピット。4号ピットの南西側に位置する。東側5号ピットと接する。

平面形状：ほぼ円形状を呈する。

規模：径0.09×深さ0.05m。

埋土：不明。

遺物：なし。

(7) 7号ピット・木杭24

位置：最も東側から検出されたピット。木杭5の北側に位置する。

平面形状：東西に長い楕円形状を呈する。

規模：長径0.15×短径0.11×深さ0.16m。木杭24は長さ0.30m×幅0.03m×土中部分の深さ0.14m。

埋土：褐灰色粘質土。

遺物：西寄りから木杭24が直立に埋め込まれた状態で出土。

(8) 木杭1

位置：東側から3番目に検出された木杭。7号ピットの南側に位置する。頭をやや南東側に傾けた状態で検出された。

大きさ：長さ0.37×幅0.05×土中部分の深さ0.25m。

(9) 木杭5

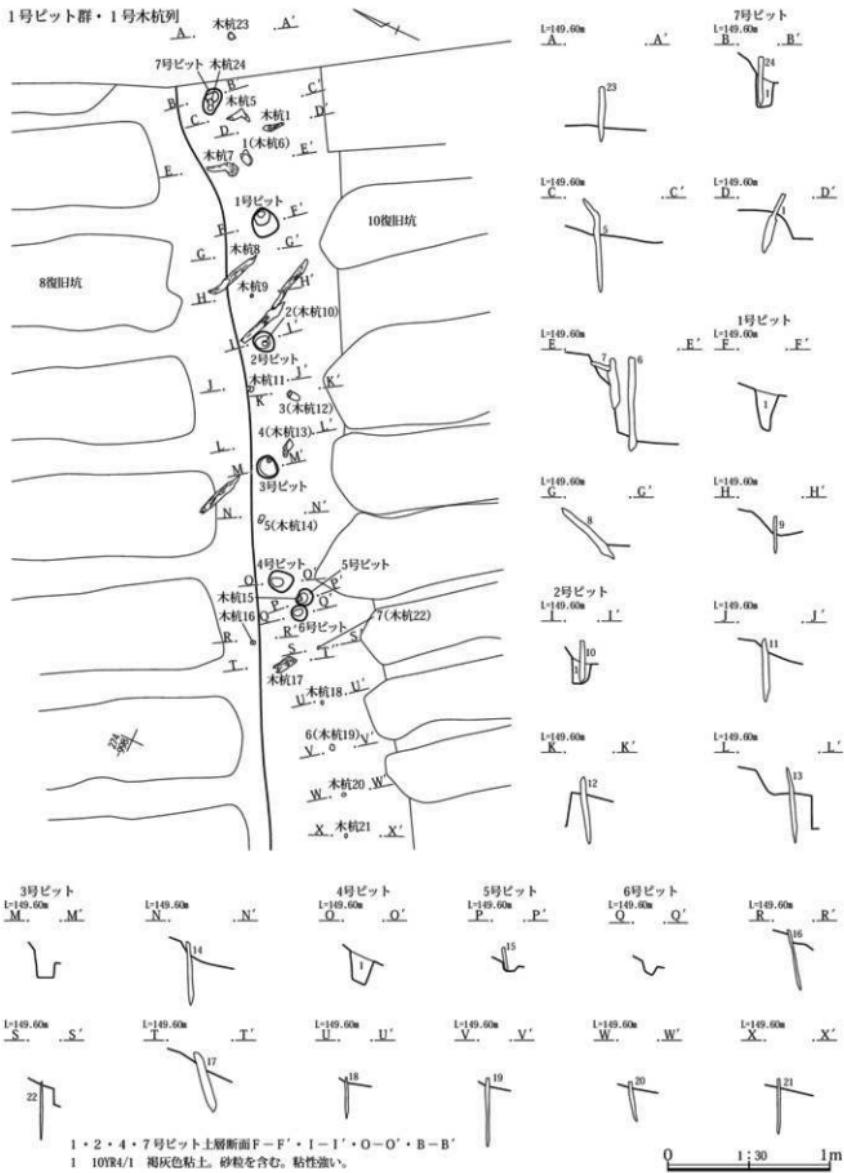
位置：東側から2番目に検出された木杭。7号ピットの南側に位置する。

大きさ：長さ0.57×幅0.03×土中部分の深さ0.35m。

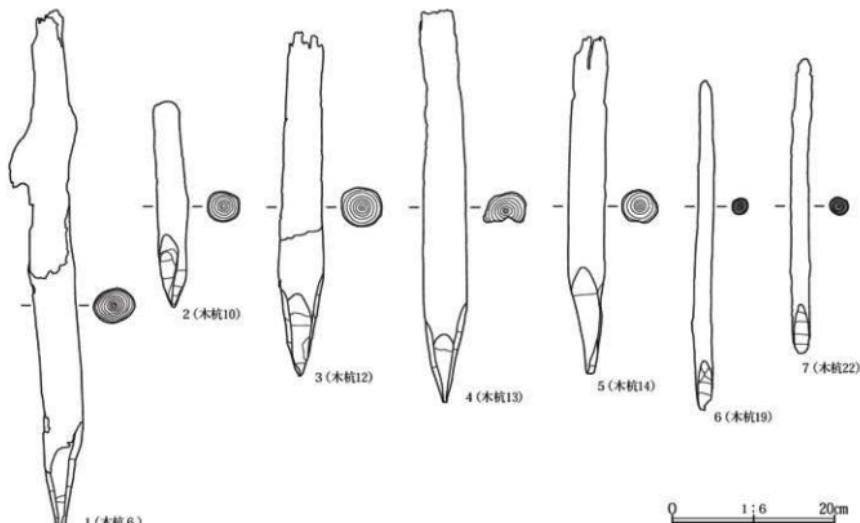
(10) 木杭6

位置：東側から4番目に検出された木杭(1)。木杭1の西側、木杭7の東側に位置する。大部分が露出し、直立した状態で検出された。

大きさ：長さ0.58×幅0.05×土中部分の深さ0.06m。



第41図 沼田遺跡2区2面1号ビット群・1号木杭列



第42図 沼田遺跡2区2面1号木杭列出土遺物

(11)木杭7

位置：東側から5番目に検出された木杭。1号ピットの北東側、木杭6の西側に位置する。段差の法面に懸るような状態で直立して検出された。

大きさ：長さ0.31×幅0.03～0.06×土中部分の深さ0.06m。

(12)木杭8

位置：東側から6番目に検出された木杭。木杭9の北側に位置する。頭が西側に大きく傾いた状態で、大部分が露出して検出された。土中部分は非常に少ない。

大きさ：長さ0.45×幅0.05×土中部分の深さ0.08m。

(13)木杭9

位置：東側から7番目に検出された木杭。木杭8の南側、木杭10の北東側に位置する。直立した状態で、段差法面の直下から、約半分が地上に露出した状態で検出された。

大きさ：長さ0.23×幅0.02×土中部分の深さ0.11m。木杭1～8に比べると格段に細く、短い。木杭16・18・19・21・22同様細い。

(14)木杭11

位置：東側から8番目に検出された木杭。木杭10の西側、木杭13の北東側に位置する。直立した状態で、段差法面に、大部分が地下に埋設された状態で検出された。

大きさ：長さ0.39×幅0.04×土中部分の深さ0.30m。

(15)木杭12

位置：東側から9番目に検出された木杭(3)。木杭13の北東側に位置する。直立した状態で、段差中段に約2/3が地下に埋設された状態で検出された。

大きさ：長さ0.41×幅0.04×土中部分の深さ0.30m。

(16)木杭13

位置：東側から10番目に検出された木杭(4)。3号ピットのすぐ東側、木杭12の南西側に位置する。北西側にわずかに傾いた状態で、段差中段に約2/3が地下に埋設された状態で検出された。

大きさ：長さ0.45×幅0.04×土中部分の深さ0.30m。

(17)木杭14

位置：東側から11番目に検出された木杭(5)。3号ピット

トのすぐ南西側に位置する。わずかに北西側に傾いた状態で、段差法面に約4/5が地下に埋設された状態で検出された。

大きさ：長さ0.39×幅0.03×土中部分の深さ0.29m。

(18)木杭16

位置：西側から7番目に検出された木杭。他の木杭に比べて大きく北西側に寄った位置から検出された。わずかに北西側に傾いた状態で、段差法面に約4/5が地下に埋設された状態で検出された。

大きさ：長さ0.37×幅0.02×土中部分の深さ0.29m。木杭9・18・19・21・22同様細い。

(19)木杭17

位置：西側から5番目に検出された木杭。他の木杭に比べてやや北西側に寄った位置から検出された。やや北西側に傾いた状態で、段差法面に約4/5が地下に埋設された状態で検出された。

大きさ：長さ0.37×幅0.06×土中部分の深さ0.25m。検出された木杭群の中では最も太い部類に入る。

(20)木杭18

位置：西側から4番目に検出された木杭。段差法面に大部分が地下に埋設され直立した状態で検出された。木杭22から18・19・20を経て1号木杭列の中で最も西側から検出された木杭21までは、段差法面にほぼ直線的に約0.25m前後の間隔で継続している。

大きさ：長さ0.25×幅0.02×土中部分の深さ0.21m。木杭9・16・19・21・22同様、検出された木杭群の中ではかなり細い部類に入る。

(21)木杭19

位置：西側から3番目に検出された木杭(6)。段差法面に大部分が地下に埋設され、直立した状態で検出された。

大きさ：長さ0.42×幅0.02×土中部分の深さ0.37m。木杭9・16・18・21・22同様、検出された木杭群の中ではかなり細い部類に入る。

(22)木杭20

位置：西側から2番目に検出された木杭。段差法面に大

部分が地下に埋設され、頭をやや北西に傾けた状態で検出された。

大きさ：長さ0.24×幅0.03×土中部分の深さ0.20m。

(23)木杭21

位置：1号木杭列の中で最も西側から検出された木杭。段差法面に大部分が地下に埋設され、直立した状態で検出された。

大きさ：長さ0.34×幅0.02×土中部分の深さ0.27m。木杭9・16・18・19・22同様細い。

(24)木杭22

位置：西側から6番目に検出された木杭(7)。5・6号ピットの南側、木杭17の南東側に位置する。段差上段にはほとんどの部分が地下に埋設され、直立した状態で検出された。

大きさ：長さ0.35×幅0.02×土中部分の深さ0.33m。木杭9・16・18・19・21同様細い。

(25)木杭23

位置：調査区東端の法面上に位置する。7号ピット・木杭24の東側。ほとんどの部分が地上に露出し、直立した状態で検出された。

大きさ：長さ0.34×幅0.04×土中部分の深さ0.09m。

第4項 溝

本遺跡4区からは水田に伴う溝が3条検出された。4区の北寄りを南東から北西方向に流れる1号溝、調査区南寄りの位置を北西-南東方向から南北方向へと屈曲する2号溝、2号溝の屈曲点と合流するほぼ南北方向の3号溝がそれぞれ検出された。いずれも天明3年の浅間山噴火に伴って降下したAs-Aによって埋もれた水田の水路として機能していたものと考えられる。

1号溝(第43図、PL.39・41)

区 4区

位置 調査区北寄り。4群復旧坑の南側、5群復旧坑の北側。X=38229～38232、Y=-84972～84981。

重複 5群復旧坑に掘り込まれる。

主軸方位 N-71°-W。

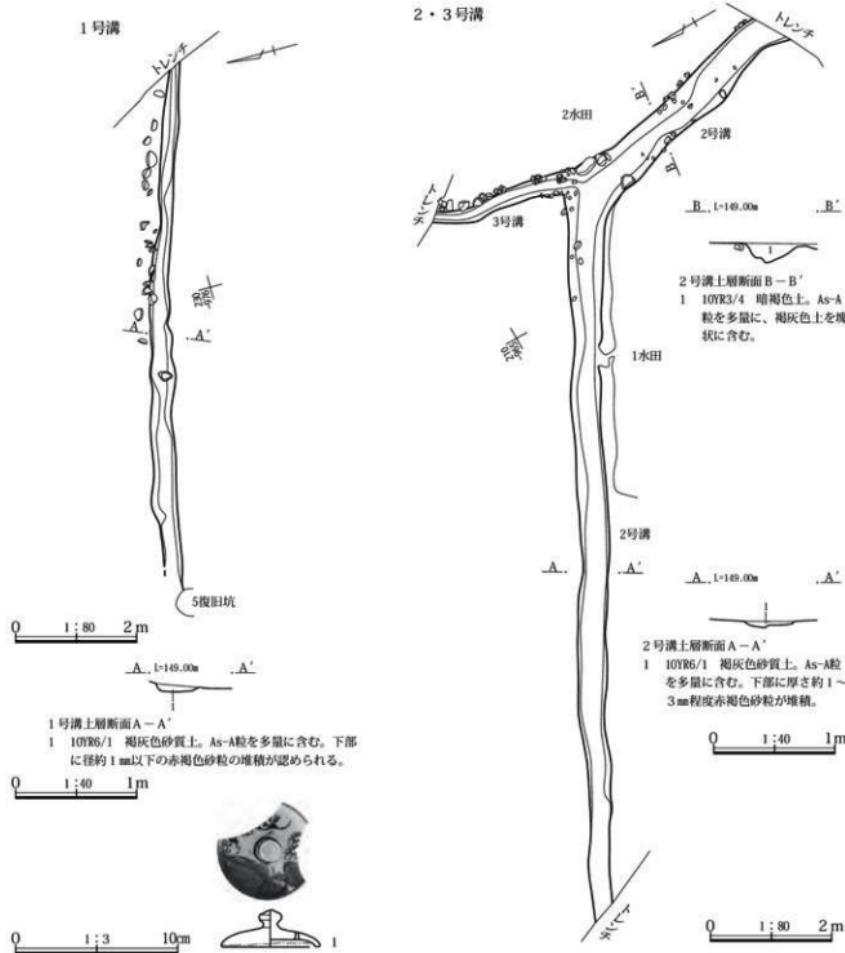
規模 検出全長8.50m、幅約0.19～0.41m前後、深さ約0.05～0.18m前後。

埋土 As-Aを多量に含む褐灰色砂質土。

遺物 埋土中から製作地不詳急須蓋2/3片が1点出土。口縁端部は無釉。天井部外面に酸化コバルトによる染付。近現代のものと考えられる。

所見 南東側端は調査区外へと伸びている。北西側端は南側5群復旧坑によって掘り込まれ、破壊されている。

北側の4群復旧坑と南側の5群復旧坑を掘り込んで復旧しようとした水田に伴う水路と考えられるが、4・5群復旧坑共、復旧坑掘削以前の水田の遺構は全く検出することが出来なかった。



第43図 沼田遺跡4区2面1～3号溝、1号溝出土遺物

南東側から北西方向に向かって流れしており、比高差は約0.15m前後である。北側の4群復旧坑との境の部分の東側約半分では、約4.50mにわたって川原石を組んだ畦畔状の高まりが設けられていた様子が検出されたが、あまり明瞭ではない。

しっかりとした掘り方を呈するが、浅く、断面は扁平なレンズ状を呈している。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

2号溝(第43図、PL.38・39)

区 4区

位置 調査区南寄り。6群復旧坑、1号水田の北東～東側。 $X = 38203 \sim 38213$ 、 $Y = -84962 \sim 84974$ 。

重複 なし。

主軸方位 $N - 58^\circ - W$ 。

規模 検出全長15.70m、幅約0.50～0.68m前後、深さ約0.03～0.12m前後。

埋土 As-Aを多量に含む暗褐色土。

遺物 なし。

所見 北西側及び南側両端は調査区外へと伸びている。

西壁から約12.00m程度北西～南東方向で、 $X = 38208$ ・ $Y = -84963$ 付近で屈曲し、南北方向寄りとなる。屈曲部分には北北東方向から3号溝が合流する。

溝底の標高はおむね148.60～148.65m前後であり、流れた方向については調査範囲内においては明らかにすることが出来なかった。3号溝についても同様である。

西側の1号水田と東側の2号水田に伴う水路と考えられる。1号水田の項で触れた通り、 $X = 38207$ ・ $Y = -84964$ 付近から $X = 38210$ ・ $Y = -84968$ 付近にかけての1号水田との境の部分からは、長さ約5.00mにわたって畦畔状の高まりが検出され、そのほぼ中央からは水口が検出された。

しっかりとした掘り方を呈するが、浅く、断面はやや扁平で上側が大きく開いた逆U字状を呈している。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

3号溝(第43図、PL.38・39)

区 4区

位置 調査区南東寄り。 $X = 38208 \sim 38210$ 、 $Y = -84962 \sim 84963$ 。

重複 なし。

主軸方位 $N - 13^\circ - E$ 。

規模 検出全長2.15m、幅約0.18～0.30m前後、深さ不明。

埋土 不明。

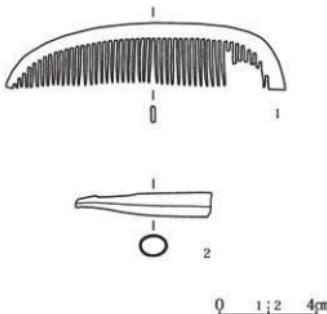
遺物 なし。

所見 北北東～南南西方向の溝で、北端は調査区外へと伸びている。西端は $X = 38208$ ・ $Y = -84963.5$ 付近で2号溝と合流するが、流れた方向は明らかにすることが出来なかった。

時期 天明3(1783)年浅間山噴火以前、江戸時代中期。

第5項 遺構外出土遺物(第44図、PL.41)

遺構外出土遺物としてベッ甲製の櫛1点と金属製の煙管を掲げた。



第44図 沼田遺跡遺構外出土遺物

第4章 調査成果の整理とまとめ

1. 大島田II遺跡

先述した通り、大島田II遺跡では、天明3年浅間山噴火の際に降下した軽石や、噴火直後に発生した泥流によって埋没した水田を復旧するために掘削された復旧坑群17群、土坑群1条、溝2条、復旧坑群掘削以前に営まれていた水田が部分的ではあるが3カ所検出された。

発掘調査では、ほぼすべての遺構は同一の確認面から検出されているが、古い時代から

(1) 浅間山軽石As-A降下前水田

(2) 浅間山軽石As-A降下直後に耕地復旧のために耕地の鋤き込みが行われた際の掘削工具痕

(3) 浅間山軽石As-A降下直後に復旧のため行われた

耕地の鋤き込み程度では処理しきれなくなった火山噴出物を埋蔵し、その上面に新たに耕地を復旧するために掘削された復旧坑と土坑群

の3時期にわたる遺構が検出された。

(1) 復旧坑

検出された17群の復旧坑のうち、調査区の壁の土層断面でのみ確認できた新1群復旧坑以外の復旧坑の深さは、おおむね約0.60m前後である。

ごく一部ではあるが、復旧坑の重複が確認出来た箇所があることから、一度、復旧坑掘削により天地返しを行ったものの、更なる火山噴出物の堆積があったためか、あるいは埋もれていた軽石が浮上して土壤が悪化したためか、再度の天地返しが行われたことが明らかである。ただ、実際に、再度の天地返しの痕跡が確認出来たのは、調査区の中でもごく狭い範囲に限られており、また、上層から検出された再度掘り込まれた復旧坑の検出状態も全体的にあまり良くないので、全面的に複数回の復旧坑掘削による天地返しが行われたとは考えにくく、部分的に行われた措置であったものと考えられる。

大島田II遺跡において検出された各群の復旧坑は、長さ・深さ・方向とも各々異なっている。調査区の北側では南北ないし、北東-南西、北西-南東方向とまちまち

であるが、調査区の中央よりやや北側を東西に貫流する1号溝の南側では、西北西-東南東方向に統一されている。規模はまちまちであり、一端が調査区外に出るため、全長が検出できなかったようなものが多い。坑の幅は、おおむね約0.50～0.70m前後、深さはおおむね約0.60m前後であった。

水田に伴う水路や畦畔などを掘り込んでいるような箇所はなく、それらを意図的に避けて、計画的に掘削されている様子が伺えるので、天明3年の浅間山噴火以前に機能していた水田や、それに伴う水路などの地割と対応しており、火山災害被災前に機能していた水田の範囲を忠実に復旧しようとした意図が強く感じられる。

(2) 復旧坑掘削以前の段階の掘削工具痕

また、復旧坑の間に掘り残された約0.10～0.20m程度の高まりの部分には、恐らくは天明3年に起った浅間山噴火直後の時点において、鋤き込みによって耕地を何とか復旧しようとした際に付けられた掘削工具痕の凹凸が検出された。掘削工具痕の幅は約20cm前後であり、ほぼ水平に並列した状態で検出された。

検出された掘削工具痕は、各復旧坑によって削平されたり、掘り込まれていたりしているので、復旧坑掘削前の造作ということになる。これらの掘削工具痕の検出状況から、天明3年の浅間山噴火時に機能していた水田の面よりもおおむね約10cm程度深くなるまでに、全面的に平坦に掘り下げられている様子が判明した。

天明3年の浅間山噴火直後に、まず、水田面上に降下した軽石を鋤き込んで耕地の復旧を試みようとしたのであろうが、その後、噴火の進展に伴って降下する火山噴出物の量がますます増大し、厚く堆積するようになってしまったために、その程度の鋤き込みではとても耕地の復旧は出来ない状態にまで状況は悪化していったものと想像出来る。そのため、抜本的な天地返しによって耕作地を復旧・再現するしか方法がなくなったため、一連の復旧坑が掘削されたのだと考えられる。

(3)水田

さらにこれらの復旧坑や掘削工具痕の間やそれらの周囲にはAs-Aの一次堆積層が部分的に認められる箇所があり、その下からは、水田が3枚と、それらの水田に水を引き入れるための用水の溝2条が検出された。溝との間からは約50cm前後の礫を使用した畦畔状の高まりや、畦畔の間に設けられた水口も検出された。水田は、復旧坑やそれに先行する掘削工具痕によって掘り残された部分から検出された訳であり、言わば、残骸として検出された状態である。

水田の表面からは僅か乍ら凹凸が検出され、畦畔に沿って足跡が検出された部分もある。水田は、As-Aの一次堆積層下から検出されていることから、天明3(1783)年の浅間山噴火以前のものと考えられる。

この水田面の下層からは九十九川の礫層が検出され、遺構は検出されなかったので、検出来た水田は1面のみであった。近世以前からこの地において水田耕作が営まれていたか否かについては、今回の調査では明らかにすることは出来なかった。

(4)大島田II遺跡発掘調査の成果

安中市教育委員会が平成3(1991)年に圃場整備事業に先立って、今回調査地点に隣接する場所を大島田遺跡として発掘調査した際には、As-A層下から水田やそれに伴う畦畔の遺構は全く検出されなかった。しかしながら、同遺跡の発掘調査報告書では、As-A層下の水田の存在の可能性について言及されていた。今回の発掘調査によつて、そのことが証明できたことは、地域の歴史を解明する上で意義があることであったということが出来よう。

2. 沼田遺跡

沼田遺跡は大島田II遺跡の北東約0.6kmに位置している。両遺跡はその間に南側を九十九川、北側を秋間川によってそれぞれ浸食された丘陵を挟んでいるが、隣接する遺跡同士である。

沼田遺跡では、表土層直下から検出された洪水堆積物層下の遺構確認面を1面、天明3(1783)年の浅間山噴火の際に降下した浅間山軽石As-A層及びその二次堆積層下を遺構確認面とする遺構を2面として調査した。

沼田遺跡では、天明3年の浅間山噴火以後に発生した

洪水によって、火山災害と、それが原因の一つとなって引き起こされたであろう水害と、二重に被災した状況が明らかになったのである。

すなわち、天明3年の浅間山噴火に伴いAs-Aが降下・堆積し、それらを取り除いて埋没した水田を本格的に復旧するために、2面から検出された2・4区の4~10群の復旧坑が掘削されたが、その後、この地は洪水に見舞われ、掘削された復旧坑群は完全に埋没してしまったわけである。さらにそれを復旧するため、新たに掘削されたものが1面目1・2・4区において検出された1~3群の復旧坑なのである。

大島田II遺跡で検出された遺構と対応するのは本遺跡では下面の遺構確認面において検出された遺構群ということになり、本遺跡上面の遺構確認面において検出された遺構は、大島田II遺跡から検出された主な遺構群よりも若干新しい時期の遺構ということになる。

ただし、沼田遺跡の1面から検出された遺構群が、大島田II遺跡から検出された復旧坑群の上面から検出された新1群及び新2群復旧坑と直接対応する時期のものであるか否かについては、調査の中では明らかにすることが出来なかつた。両遺跡の距離が若干離れており、地形の状況も異なるので、一概には同定し難いところである。

発掘調査は、現在の生活道路を挟んで、路線幅と、現在使用されている道路への取り付く部分において行われ、調査区は、3本の現道を挟んで北西から南東にかけて細長く、やや南西側に湾曲した平面形状を呈している。北側から1~4区と呼称した4箇所の調査区に分割して発掘調査が行われた。

このうち北東側に突出した、現道への接続部分である3区と、その西側に隣接する長大な2区の北側約半分の部分からは、1・2面通して遺構は全く検出されなかつた。また、最も北寄りの調査区である1区からは上面である1面の遺構のみが検出された。

2区の南側約半分の部分と、現道を挟んでその南側に隣接する4区では、1・2面にわたって復旧坑群や水田、溝等の遺構が検出されたが、全体的に検出状況はあまり良い状態とは言えなかつた。

1面からは復旧坑が3群検出された。

2面からは、1面目の、洪水堆積層によって埋没した遺構確認面から厚さ約0.20~0.30m程度の堆積層を取

り除いて検出された天明3(1783)年の浅間山噴火時における火山噴出物As-Aの一次堆積層ないし二次堆積層下から、復旧坑7群、水田2枚、溝3条、ピット群1群、木杭列1条などの遺構が検出された。

(1) 復旧坑

復旧坑は、大島田II遺跡から検出された復旧坑群と同様、各群の復旧坑は、方向や深さが各自で異なっているので、復旧坑各群は、復旧坑掘削前段階の、天明3年の浅間山噴火前に機能していた水田の地割に対応して掘削された可能性が高いものと考えられる。

ただし、大島田II遺跡において検出された各群の復旧坑に比べて、連続して掘削されているものや、復旧坑群同士が接続しているような状態で掘り込まれているものが存在するなど、大島田II遺跡から検出された復旧坑のように、それらを掘削することによって復旧しようとした元の水田の範囲や形状を明確にしにくいものが中に存在していた。

かつて安中市教育委員会が今回調査区の近接地点を発掘調査した際にAs-A降下後の復旧坑が検出されていたが、今回の発掘調査によっても同種の遺構が検出され、さらに今回の調査では、安中市教育委員会による発掘調査において検出された復旧坑群よりも新しい段階のものも検出することが出来た。

1面から検出された復旧坑 1面から検出された復旧坑は、各復旧坑の幅は約0.80～1.00m前後で、2面から検出された復旧坑よりも概して幅が広い。また、2面目の各復旧坑群の検出面積は平均100m²前後であるのに対し、1面目において検出された復旧坑群の検出面積は平均約200m²前後と、およそ倍の大きさである。

復旧坑群の1区画当たりの面積が、2面から検出されたものよりも大きかったということになる。これらの復旧坑の底面や壁面、坑と坑の間の掘り残された部分などには工具痕と見られる凹凸がみられるところもあったが、明瞭に検出出来た訳ではなかった。

2面から検出された復旧坑 1面目の遺構確認面から厚さ約0.20～0.30m程の堆積土を取り除くとAs-Aの二次堆積層が検出された。その下から復旧坑群が7群検出された。

各復旧坑の深さは約0.10～0.20m前後であるが、幅

は0.30m前後のものから0.60m前後のものまでと、また、主軸方位も復旧坑群によって大きく異なる。

また、一部においては面的な広がりをもって検出されており、各復旧坑の間の、幅約0.10～0.20m程度の掘り残された部分には、掘削工具痕の凹凸が明瞭に見いだされるものも存在している。工具痕の幅約0.20m前後であり、ほぼ水平に並んだ状態で検出された。これらの復旧坑や掘削工具痕の間に残存するような形でAs-Aの一次堆積物が認められた。

(2) 2面から検出された復旧坑掘削以前の段階の

掘削工具痕

また、復旧坑の間の高まりの部分から検出された掘削痕は、各復旧坑によって掘り込まれていたり、削平されたりしていることから、大島田II遺跡から検出された掘削痕と同様、復旧坑掘削の前段階における復旧作業に伴うものと考えられる。

大島田II遺跡と同様、天明3年の浅間山噴火の際に、まず、降下した軽石を鏪き込んで水田面の復旧を試みていたことが判明する。

(3) 2面から検出された水田

復旧坑が掘り込まれた部分の間や周囲の2箇所において、復旧坑掘削以前の段階の水田の残骸が検出された。いずれもAs-Aの一次堆積層の下から検出されていることから、大島田II遺跡から検出された水田と同様、天明3(1783)年の浅間山噴火前に機能していた水田面と考えられる。ただし、水田の検出状況は大島田II遺跡に比べて悪く、大島田II遺跡において検出された水田に見られたような足跡等は一切検出することが出来なかつた。

下層からは秋間川の礫が検出され、遺構は全く検出されなかつたので、大島田II遺跡と同様、近世以前の段階においても水田が継続的に営まれていたのか否かについては明らかに出来なかつた。

なお、水田に伴う水路が3条検出され、水田への水口が検出された箇所もあった。

(4) 2面から検出されたピット群・木杭列

2区の南寄りの位置から検出された8群復旧坑と南東側に隣接する10群復旧坑との間の約0.80～1.00m前後

の部分からは、北東—南西方向に1列に継列する21本からなる木杭群と7基のピット群が検出された。

復旧坑群の間から検出されたことから、復旧坑掘削前段階に存在していた天明3(1783)年の浅間山噴火以前に機能していた水田の地境を示すとともに、北西側と南東側で約0.30~0.50m前後の標高差があるため、段差の土留め補強の機能を有していたものと考えられる。

ピットには、木杭が打ち込まれた状態で出土しているものが3基あるので、元来、木杭が打ち込まれていた痕跡と考えられ、ピット群と木杭列とは一体のものであったと見られるが、木杭のみが検出された例では、木杭が直接地山に打設され、掘り方が全く検出出来なかった箇所も存在している。

(5)沼田遺跡発掘調査の成果

本遺跡における今回の発掘調査によって、

(1)浅間山軽石As-A降下前水田

(2)浅間山軽石As-A降下直後に耕地復旧のために耕

地の鋤き込みが行われた際の掘削工具痕

(3)浅間山軽石As-A降下直後に復旧のため行われた

耕地の鋤き込み程度では処理しきれなくなった火
山噴出物を埋蔵し、その上面に新たに耕地を復旧

するために掘削された復旧坑

の3時期にわたる遺構が検出された点は、大島田Ⅱ遺跡と同様であるが、復旧坑については、浅間山軽石As-A降下後のものと、さらにその後に当地を襲った水害被災後に掘削されたものとの新旧2時期のものが、明確に面を異にして検出された点は、今回の発掘調査における最も大きな成果であったと言えよう。

平成10(1998)年に安中市教育委員会が、今回の調査対象地の隣接地を圃場整備事業に先立って発掘調査した際には、浅間山軽石As-A降下後における復旧坑は検出されていたが、噴火後に発生した洪水被災後の遺構は検出されていなかった。

1面の遺構確認面において検出された遺構群形成の契機となった洪水が、天明3年の浅間山噴火からどれほどの時期を経たものであるのか、今回の発掘調査において、明確に年代を確定することは出来なかったが、遺構の検出状況や、洪水堆積層の土壤の状況から見て、然程には時間差はなかったものと考えられる。

天明3年の浅間山噴火とその後に起きた洪水という、短期間における相次ぐ大災害に被災し、度重なる耕地の全滅を経験しながらも、耕土の鋤き込みによる耕作地の復旧、復旧坑掘削による堆積した火山噴出物の埋蔵とその上面における新たな耕地の形成、さらにその後に襲った水害から耕地を再度復旧するための復旧坑掘削による堆積土埋蔵とその上面におけるさらに新たな耕地の形成と、飽くなき耕地の復興による生産性の確保を図った当地の人々の苦闘の営みの軌跡を今回の調査によって明らかに出来たことは、地域の歴史を考える上で大きな成果である。

まとめ

大島田Ⅱ遺跡と沼田遺跡における発掘調査によって明らかになったような、天明3年の浅間山噴火に伴う火山災害とそれに伴って発生した洪水・土石流などの被災後の耕地復旧が数次にわたってなされていたことが発掘調査によって確認出来た事例としては、群馬県内においては、県中南部平野部の玉村町内における事例などがある。

今回の発掘調査の成果によって、県中西部である安中市の九十九川流域や秋間川流域においても、ほぼ同様の状況であったことが明らかになった。

九十九川流域や秋間川流域に住まつた人々が、天明3年の災害の後、いかに耕地を復旧し、生産を確保し、生活再建を図っていたかということを知る上での大きな手掛かりが得られたこと、その飽くなき耕地復旧の営みの軌跡を明らかにすることが出来たことが、本調査の大きな成果であったと言えることが出来る。

第8表 遺物観察表

種類 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			施上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第26回 PL.22	瀬戸・美濃 陶器 碗	埋土 体部から底部 1/2	口 底	-高 4.9重	-	灰白/-/-	内面から高台脇に灰釉。貫入る。	18世紀前葉-中葉。
第26回 PL.22	石製品 砥石	埋土 完形	長 幅	11.7 2.6厚	4.1 218.2重	変質ディサイト/- /-	表面が主要な砥面であり全体的に非常に滑らかである。左右両側面と上下小口面及び裏面には櫛歯タガネ痕が認められる。左右両側面と裏面には滑らかな部分が認められ便宜的な砥面と考えられる。	近世。
第27回	肥前陶器 碗	埋土 底部1/3	口 底	-高 (5.6)重	-	淡黄/-/-	内面から高台脇に透明釉。釉は灰色味を帯びる。高台内に「清」押印。	17世紀後葉。
第28回 PL.22	織文土器 深鉢	表土(10群復田 坑付近) 胴部破片	口 底	-高 重	-	中量の円周度の進 んだ長石と少量の 珪質乳白色・灰白 色・赤色・黒色岩片 や石英の粒・細砂 を含むや緻密な 胎土。 /-/-	やや繊細なL字縫文を縱位に施文。	加曾利E式
第28回	瀬戸・美濃 陶器 鉢か皿	埋土 底部1/4	口 底	-高 (12.9)重	-	灰白/-/-	内面から高台脇に黄瀬戸釉。底部内面に目痕1箇所。	近世。
第37回 PL.41	製作地不詳 陶器 火入れか	埋土 口縁部から体部 片	口 底	-高 重	-	にぶい黄緑/-/-	口縁部から体部は輪花状に作る。口縁部内面から外面上に灰釉。外面上に黄緑色の上締。灰釉には貫人が入り、上締は白瀬する。	近世か。
第39回 PL.41	石製品 砥石	埋土 1/2	長 幅	(7.7) 2.8厚	2.6 77.5重	変質ディサイト/- /-	表面が主要な砥面であり上下方向に向かい研ぎ減りする。左右両側面と裏面には櫛歯タガネ痕がわずかに認められるが滑らかな部分もあり便宜的な砥面と考えられる。	近世か。
第40回	瀬戸・美濃 陶器 皿	埋土 底部	口 底	6.0 重	-	灰白/-/-	内面から高台内周縁に長石釉。底部内外面に目痕3箇所。	17世紀。
第40回 PL.41	製作地不詳 小杯	埋土 1/3	口 底	(7.0) 3.0高 重	4.1 -	白/-/-	内面は無文。外面は簡略化した文様の染付。口縁部外面に1条、高台境に2重巻頭。高台内周縁に重巻頭。	19世紀前葉～中葉。
第42回 PL.41	木製品 机	一部欠損	長 幅	63.9 8.4重	4.5 948.4	-/-/-	広葉樹。クリとみられる。丸木を使用。瘤が残る。上部は劣化が激しい。先端部の加工痕ははっきりしている。	近世。
第42回 PL.41	木製品 机	ほぼ完形	長 幅	25.5 3.6重	3.75 210.8	-/-/-	広葉樹。散材使用。丸木を使用。先端を4面切り落とす。他と比べて細く、短い。	近世。
第42回 PL.41	木製品 机	一部欠損	長 幅	42.6 5.9重	4.8 612.9	-/-/-	針葉樹。マツとみられる。樹皮付き。丸木を使用。上部は欠損している。加工痕の残存は良好。断面が5角形から、先端に向けて尖る。	近世。
第42回 PL.41	木製品 机	一部欠損	長 幅	48.3 5.7重	3.9 593.0	-/-/-	広葉樹。クリとみられる。先端に加工痕が見られる。全体的に劣化が激しい。	近世。
第42回 PL.41	木製品 机	ほぼ完形	長 幅	41.4 4.5重	4.2 445.0	-/-/-	広葉樹。マツとみられる。丸木を使用。上部が劣化による収縮か、欠損か判別ができない。先端の加工痕は良好。	近世。
第42回 PL.41	木製品 机	ほぼ完形	長 幅	40.5 2.0重	1.95 141.7	-/-/-	針葉樹。マツとみられる。樹皮付きの枝を使用。先端を斜めに切り落とすのみの加工をおこなう。	近世。
第42回 PL.41	木製品 机	ほぼ完形	長 幅	36.1 2.3重	2.3 125.2	-/-/-	針葉樹。マツとみられる。樹皮付きの枝を使用。先端を斜めに切り落とすのみの加工をおこなう。	近世。
第43回 PL.41	製作地不詳 急須蓋	埋土 2/3	口 底	6.0 1.3重	2.3 -	白/-/-	口縁部は無釉。天井部外面に施化コバルトによる染付。	近現代。
第44回 PL.41	べっ甲 櫛	埋土 一部欠損	長 幅	11.5 2.6重	0.2 2.7	-/-/-	べっ甲と思われる櫛。齒数45。一部歯が欠損している。左右で、峰の湾曲の仕方が異なる。	近世。
第44回 PL.41	銅製品 煙管(吸口)	埋土 一部欠損	長 幅	5.6 10.1重	10.1 5.1	-/-/-	つなぎ目が明瞭で羅子が残存する。全面的に表面は劣化による崩れが見られる。口付部分は潰れている。	近世。

第9表 大鳥田Ⅱ遺跡、沼田遺跡、非堤城遺物集計表

遺跡	区	遺構	土崩器			須走器			灰輪			梅・皿			圓底燒成陶器			圓底燒成陶器			在地系割・ 輪			近現代			陶磁器			土器類						
			点数	重量g	大型製品	点数	重量g	小型製品	点数	重量g	大型製品	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g					
大鳥田Ⅱ遺跡		1号溝							2	85						3	3	5	27	3	91															
		2号溝														3	10	2	27																	
		1群復旧坑	1	22												1	1	1	26																	
		3群復旧坑														1	6	2	38																	
		4群復旧坑														1	6	2	38																	
		8群復旧坑	1	42												2	5	1	1																	
		9群復旧坑														2	9	1	6																	
		10群復旧坑				1	10	1	4							1	2	2	2	1	5															
		11群復旧坑														1	2	2	2	1	5															
		12群復旧坑																																		
		14群復旧坑																																		
		新2群復旧坑																																		
		発丘																																		
		大鳥田Ⅱ遺跡計	2	64	1	10	3	89	1	2	15	40	24	240	3	91	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
沼田遺跡		1 通構外			1	10										1	23																			
		2 2群復旧坑																																		
		2 7群復旧坑			1	5										1	1	5	46																	
		2 8群復旧坑														1	6	3	30	1	12															
		2 1号木杭列					1	11		1	2					1	1	1	1																	
		2 通構外																																		
		4 1号水田																																		
		4 2号水田																																		
		4 1号溝																																		
		4 2号溝																																		
		4 5群復旧坑																																		
		4 通構外																																		
		沼田遺跡計	0	0	0	2	15	1	11	1	2	9	41	27	295	3	33	2	9	0	0	0	1	3	1	8										
		總計	2	64	3	25	4	100	2	4	24	81	51	535	6	124	2	9	1	3	1	8														

報告書抄録

書名ふりがな	おおしまだにいせき・ぬまたいせき
書名	大島田II遺跡・沼田遺跡
副書名	西毛広域幹線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	高島英之・石坂茂
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20190703
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	おおしまだにいせき
遺跡名	大島田II遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあんなかしあんなかあざおおしまだ
遺跡所在地	群馬県安中市安中字大島田
市町村コード	211
遺跡番号	558
北緯(世界測地系)	362004
東経(世界測地系)	1385308
調査期間	20170101-20170228
調査面積	3,970
調査原因	道路建設
種別	水田
主な時代	近世
遺跡概要	江戸時代中期一水田+復旧坑17+土坑群1+溝2
特記事項	天明3(1783)年浅間山噴火による火山災害被災後の耕地復旧に関わる遺構群
遺跡名ふりがな	ぬまたいせき
遺跡名	沼田遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあんなかしあもあきまあざやなぎちよう、あざぬまた
遺跡所在地	群馬県安中市下秋間字柳町、字沼田
市町村コード	211
遺跡番号	555
北緯(世界測地系)	362026
東経(世界測地系)	1385317
調査期間	20170601-20170731
調査面積	3,411
調査原因	道路建設
種別	水田
主な時代	近世
遺跡概要	江戸時代中期一水田+復旧坑10+ビット群1+木杭列1+溝3
特記事項	天明3(1783)年浅間山噴火による火山災害被災後の耕地復旧に関わる遺構群
要約	群馬県南西部に位置する安中市内において、西毛広域幹線道路整備事業に伴って平成28年度に発掘調査された大島田II遺跡と、丘陵を挟んで北東約0.6kmに位置する平成29年度に発掘調査された沼田遺跡の発掘調査の成果である。大島田II遺跡は九十九川左岸の低地に、沼田遺跡は秋間川右岸の低地にそれぞれ立地し、ともに天明3年浅間山噴火の際に降下した火山灰や、噴火直後に発生した泥流によって埋没した水田を復旧するために掘削された復旧坑群や土坑群などとともに、部分的に被災前に機能していた水田やそれに伴う水路などの遺構が検出された。検出された遺構は古い順に（1）浅間山軽石As-A降下前水田とそれに伴う水路や木杭列、（2）浅間山軽石As-A降下直後に耕地復旧のために耕地の働き込みが行われた際の掘削工具痕、（3）耕地上に多量に堆積した浅間山軽石As-Aなど火山噴出物を埋め、その上面に新たに耕地を復旧するために掘削された復旧坑や土坑群などである。沼田遺跡では、さらにもう一段階新しい（4）復旧坑掘削後に襲った洪水被害から耕地をさらに復旧するために再度掘削された復旧坑が検出された。天明3年の浅間山噴火に伴う火山災害とそれと伴って発生した洪水・土石流などの被災後の耕地復旧が數次に亘ってなされていたことが確認でき、九十九川や秋間川流域に住まつた人々が、天明3年の災害の後、いかに耕地を復旧し、生産を確保し、生活再建を図つていったかということを知る上で大きな手掛かりが得られ、その胞くなき耕地復旧の営みの軌跡を明らかにすることができた。

大島田II遺跡
写真図版



1. 大島田Ⅱ遺跡全景(西から)



2. 大島田Ⅱ遺跡調査区北半部全景(東から)



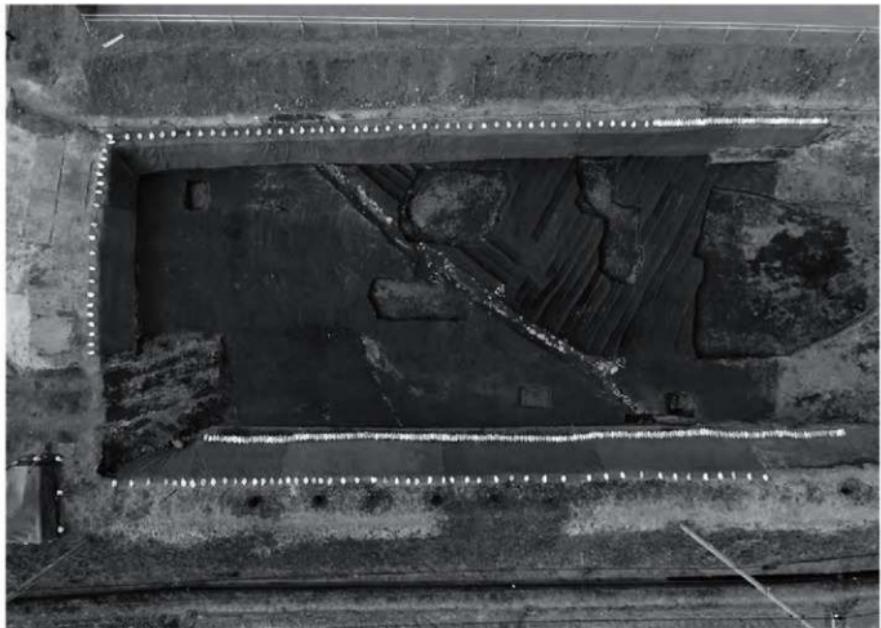
1. 大島田II遺跡調査区北半部全景(南から)



2. 大島田II遺跡調査区北半部全景(西から)



1. 大島田Ⅱ遺跡調査区南半部全景(北から)



2. 大島田Ⅱ遺跡調査区南半部全景(東から)



1. 大島田Ⅱ遺跡調査区北半部全景(南から)



2. 大島田Ⅱ遺跡調査区南半部全景(南東から)



1. 大島田Ⅱ遺跡1~8群復旧坑、1号土坑群、1号水田全景(西から)



2. 大島田Ⅱ遺跡8~11群復旧坑、1号水田、1号溝全景(西から)



1. 大島田 II 遺跡新 2 群復旧坑検出状況(南東から)



2. 大島田 II 遺跡 1 群復旧坑北側、2 号水田検出状況(東から)



3. 大島田 II 遺跡 1 群復旧坑北側検出状況(南西から)



4. 大島田 II 遺跡 1 群復旧坑検出状況(北西から)



5. 大島田 II 遺跡 1 群復旧坑検出状況(南から)



1. 大島田Ⅱ遺跡1群復旧坑検出状況(南西から)



2. 大島田Ⅱ遺跡1群復旧坑検出状況(北西から)



3. 大島田Ⅱ遺跡1群復旧坑北壁土層断面A-A' (南から)



4. 大島田Ⅱ遺跡1群復旧坑北壁土層断面A-A' (南から)



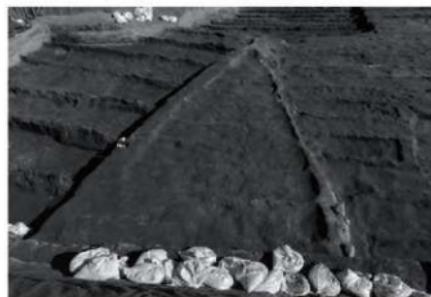
5. 大島田Ⅱ遺跡2・5・6群復旧坑検出状況(南から)



1. 大島田Ⅱ遺跡2・新1群復旧坑北壁土層断面A-A'（南から）



2. 大島田Ⅱ遺跡2・新1群復旧坑北壁土層断面A-A'（南から）



3. 大島田Ⅱ遺跡3群復旧坑検出状況（西から）



4. 大島田Ⅱ遺跡4群復旧坑検出状況（北西から）



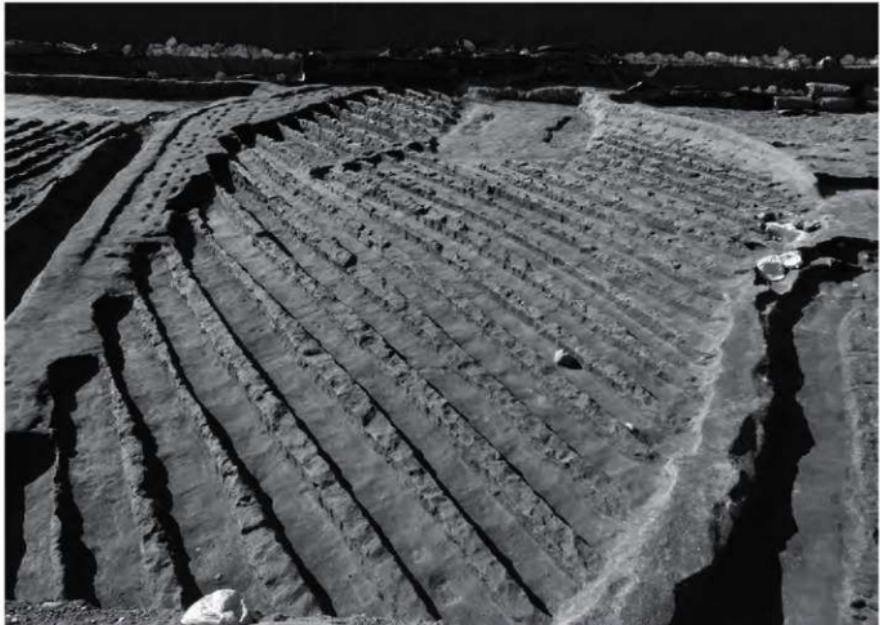
5. 大島田Ⅱ遺跡4・7群復旧坑検出状況（北西から）



1.大島田Ⅱ遺跡4群復旧坑掘削前の掘削工具痕(南から)



2.大島田Ⅱ遺跡2・5～7群復旧坑検出状況(北から)



1.大島田Ⅱ遺跡8群復旧坑跡、1号水田検出状況(東から)



2.大島田Ⅱ遺跡8群復旧坑跡検出状況(南東から)



1. 大島田II遺跡8群復旧坑掘削時工具痕(南東から)



2. 大島田II遺跡8群復旧坑掘削時工具痕(南東から)



3. 大島田II遺跡8群復旧坑掘削前の掘削工具痕(東から)



4. 大島田II遺跡8群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北東から)



5. 大島田II遺跡8群復旧坑掘削前の掘削工具痕(南東から)



6. 大島田II遺跡8群復旧坑、1号水田畔土層断面A-A' (南東から)



7. 大島田II遺跡8群復旧坑、1号水田畔土層断面A-A' (南東から)



8. 大島田II遺跡8群復旧坑土層断面B-B' (南西から)



1. 大島田II遺跡9群復旧坑検出状況、土層断面A-A'（東から）



2. 大島田II遺跡9・10群復旧坑掘削前の掘削工具痕(南西から)



1. 大島田Ⅱ遺跡9群復旧坑掘削前の掘削工具痕(南東から)



2. 大島田Ⅱ遺跡9群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北東から)



1. 大島田Ⅱ遺跡10群復旧坑検出状況、土層断面A-A'（東から）



2. 大島田Ⅱ遺跡11群復旧坑検出状況(北から)



1.大島田Ⅱ遺跡11群復旧坑検出状況(南から)



2.大島田Ⅱ遺跡12・14群復旧坑、2号溝検出状況(南東から)



1.大島田II遺跡12群復旧坑、2号溝検出状況(北東から)



2.大島田II遺跡12群復旧坑土層断面A-A' (南東から)



3.大島田II遺跡12群復旧坑土層断面B-B' (南東から)



4.大島田II遺跡13群復旧坑検出状況(西から)



5.大島田II遺跡13群復旧坑検出状況(北東から)



1.大島田Ⅱ遺跡13群復旧坑検出状況(北から)



2.大島田Ⅱ遺跡13群復旧坑土層断面A-A' 西端(北から)



3.大島田Ⅱ遺跡13群復旧坑土層断面A-A' 西寄り(北から)



4.大島田Ⅱ遺跡13群復旧坑土層断面A-A' 東寄り(北から)



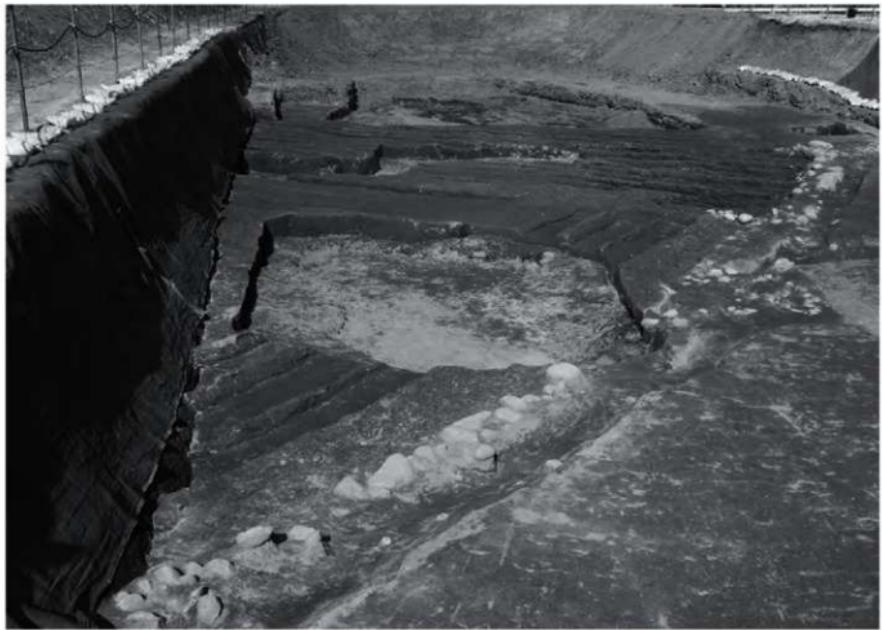
5.大島田Ⅱ遺跡13群復旧坑土層断面A-A' 東端(北から)



1.大島田Ⅱ遺跡14・15群復旧坑、3号水田検出状況(東から)



2.大島田Ⅱ遺跡16群復旧坑検出状況(東から)



1.大島田Ⅱ遺跡16群復旧坑、3号水田検出状況(南から)



2.大島田Ⅱ遺跡16群復旧坑、3号水田検出状況(南西から)



1.大島田II遺跡1号溝全景(東から)



2.大島田II遺跡2号溝全景(北東から)



1.大島田Ⅱ遺跡1号溝土層断面A-A'（東から）



2.大島田Ⅱ遺跡2号溝土層断面A-A'（南西から）



3.大島田Ⅱ遺跡2号溝土層断面B-B'（西から）



4.大島田Ⅱ遺跡基本土層2（東から）



5.大島田Ⅱ遺跡基本土層2近接(東から)



6.大島田Ⅱ遺跡調査区南端部擾乱状況(北東から)



7.大島田Ⅱ遺跡調査区遠望(東から)



8.大島田Ⅱ遺跡調査区西側掘削深度状況(南から)

1号溝



1



2

遺構外出土遺物



1

沼田遺跡
写真図版



1.沼田遺跡調査区遠景(北西から)



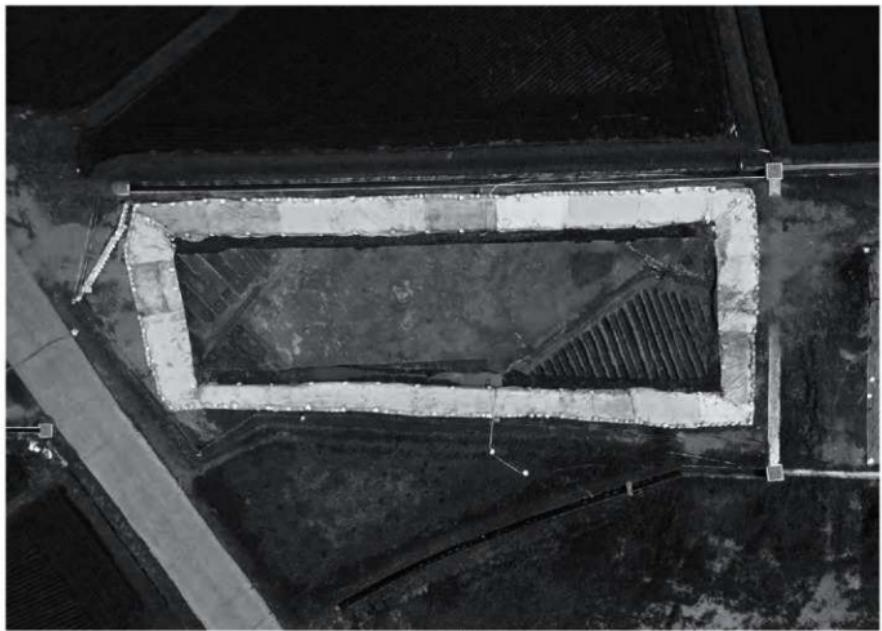
2.沼田遺跡1~3区全景(南西から)



1.沼田遺跡調査区全景(南東から)



2.沼田遺跡2区2面遺構検出状況(南西から)



1.沼田遺跡4区2面遺構検出状況(南西から)



2.沼田遺跡1区1面1群復旧坑検出状況(北西から)



1.沼田遺跡1区1面1群復旧坑検出状況(北から)



2.沼田遺跡1区全景(南東から)



1.沼田遺跡2区1面2群復旧坑検出状況(南東から)



2.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)検出状況(南東から)



1.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)検出状況(南西から)



2.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(南側)検出状況(南東から)



1.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南西から)



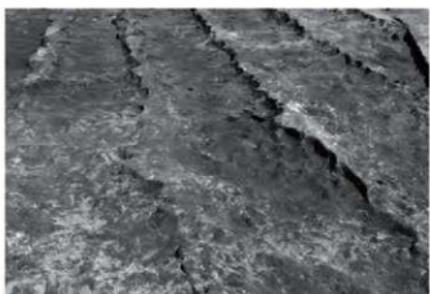
2.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(北西から)



3.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南西から)



4.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南から)



5.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南から)



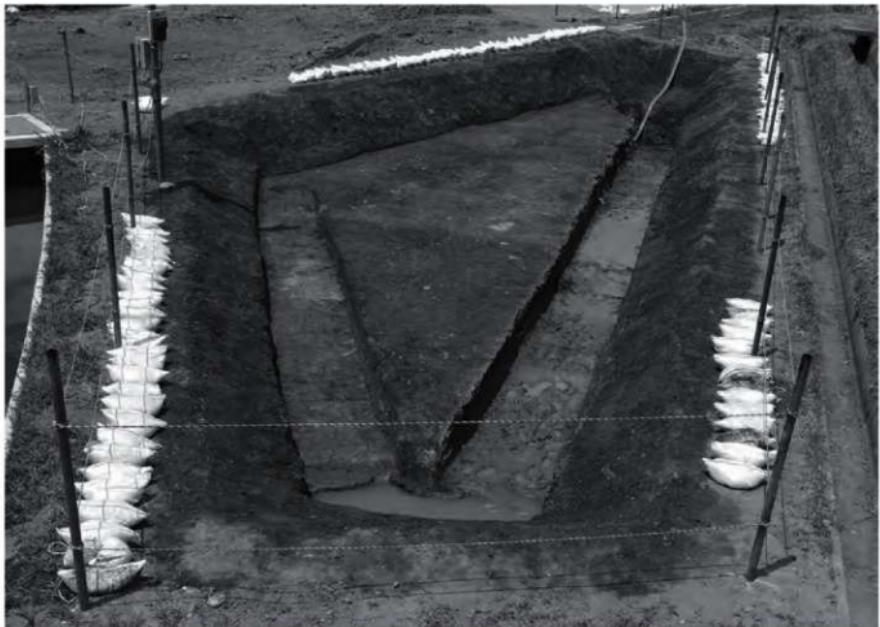
6.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南西から)



7.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(南から)



8.沼田遺跡2区1面2群復旧坑(北側)掘削時工具痕(西から)



1.沼田遺跡3区全景(東から)



2.沼田遺跡4区1面3群復旧坑検出状況(北西から)



1. 沼田遺跡 4区 2面 4群復旧坑検出状況(南から)



2. 沼田遺跡 4区 2面 4群復旧坑土層断面A-A' (南から)



3. 沼田遺跡 4区 2面 5群復旧坑土層断面B-B' (南から)



4. 沼田遺跡 4区 2面 4・5群復旧坑検出状況(南から)



5. 沼田遺跡 4区 2面 6群復旧坑土層断面A-A' 東端(南西から)



1.沼田遺跡4区2面5群復旧坑検出状況(南から)



2.沼田遺跡4区2面6群復旧坑検出状況(南東から)



1.沼田遺跡4区2面6群復旧坑検出状況(北東から)



2.沼田遺跡4区2面6群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北東から)



3.沼田遺跡4区2面6群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北から)



4.沼田遺跡4区2面6群復旧坑掘削前の掘削工具痕(北から)



5.沼田遺跡2区2面7群復旧坑検出状況(南東から)



1.沼田遺跡2区2面8群復旧坑検出状況(南東から)



2.沼田遺跡2区2面9群復旧坑検出状況(南から)



1.沼田遺跡2区2面10群復旧坑検出状況(南東から)



2.沼田遺跡2区2面1号木杭列検出状況(南から)



1.沼田遺跡2区2面1号木杭列検出状況(南から)



2.沼田遺跡2区2面1号木杭列検出状況(南東から)



3.沼田遺跡2区2面1号ピット群1号ピット全景(南西から)



4.沼田遺跡2区2面1号ピット群1号ピット土層断面F-F' (南西から)



5.沼田遺跡2区2面1号ピット群2号ピット全景(南西から)



6.沼田遺跡2区2面1号ピット群3号ピット全景(南から)



7.沼田遺跡2区2面1号ピット群4~6号ピット全景(南西から)



8.沼田遺跡2区2面1号ピット群7号ピット全景(南西から)



1.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭1(南西から)



2.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭5(南西から)



3.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭6・7(南西から)



4.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭8・9(南から)



5.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭11～13(南から)



6.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭14(南から)



7.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭17・22(南から)



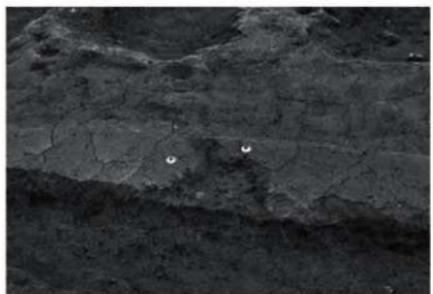
8.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭18～21(南から)



1.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭23(南西から)



2.沼田遺跡2区2面1号木杭列木杭24、1号ピット群7号ピット土層断面-8(南から)



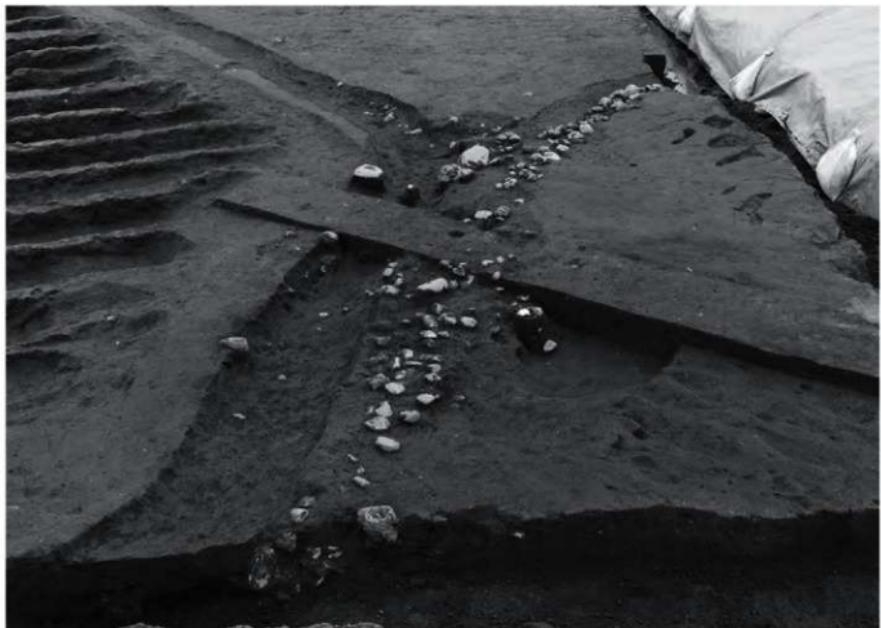
3.沼田遺跡4区2面1号水田畦畔水口検出状況(北から)



4.沼田遺跡4区2面2号水田畦畔水口検出状況(南東から)



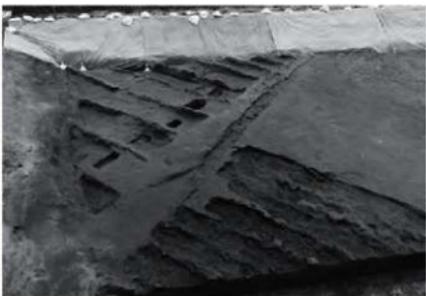
5.沼田遺跡4区2面1・2号水田、2・3号溝、6群復旧坑検出状況(南東から)



1.沼田遺跡4区2面1・2号水田、2・3号溝検出状況(南東から)



2.沼田遺跡4区2面2号溝土層断面A-A' (南東から)



3.沼田遺跡4区2面1号溝全景(西から)



4.沼田遺跡1区西壁土層断面A-A' (東から)



5.沼田遺跡1区西壁土層断面A-A' (部分)(北東から)



1.沼田遺跡1区西壁土層断面A-A'（部分）（北東から）



2.沼田遺跡2区北東壁基本土層（南西から）



3.沼田遺跡3区北壁土層断面（南から）



4.沼田遺跡4区南西壁基本土層（北東から）



5.沼田遺跡1区北側下層確認状況



6.沼田遺跡4区南西壁下層確認状況

沼田遺跡2区2面8・10群復旧坑、1号杭列、4区2面2号水田、1号溝、遺構外出土遺物

2区2面 8群復旧坑



1

2区2面 10群復旧坑



1

4区2面 2号水田



2

4区2面 1号溝



1

2区2面 1号杭列



1(木杭6)



2(木杭10)



3(木杭12)



4(木杭13)



5(木杭14)



6(木杭19)



7(木杭22)

遺構外出土遺物



1



2

公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第657集

大島田Ⅱ・沼田遺跡

西毛広域幹線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和元(2019)年6月26日 印刷
令和元(2019)年7月3日 発行

編集・発行／公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県邑楽郡大泉町下大泉784番地2

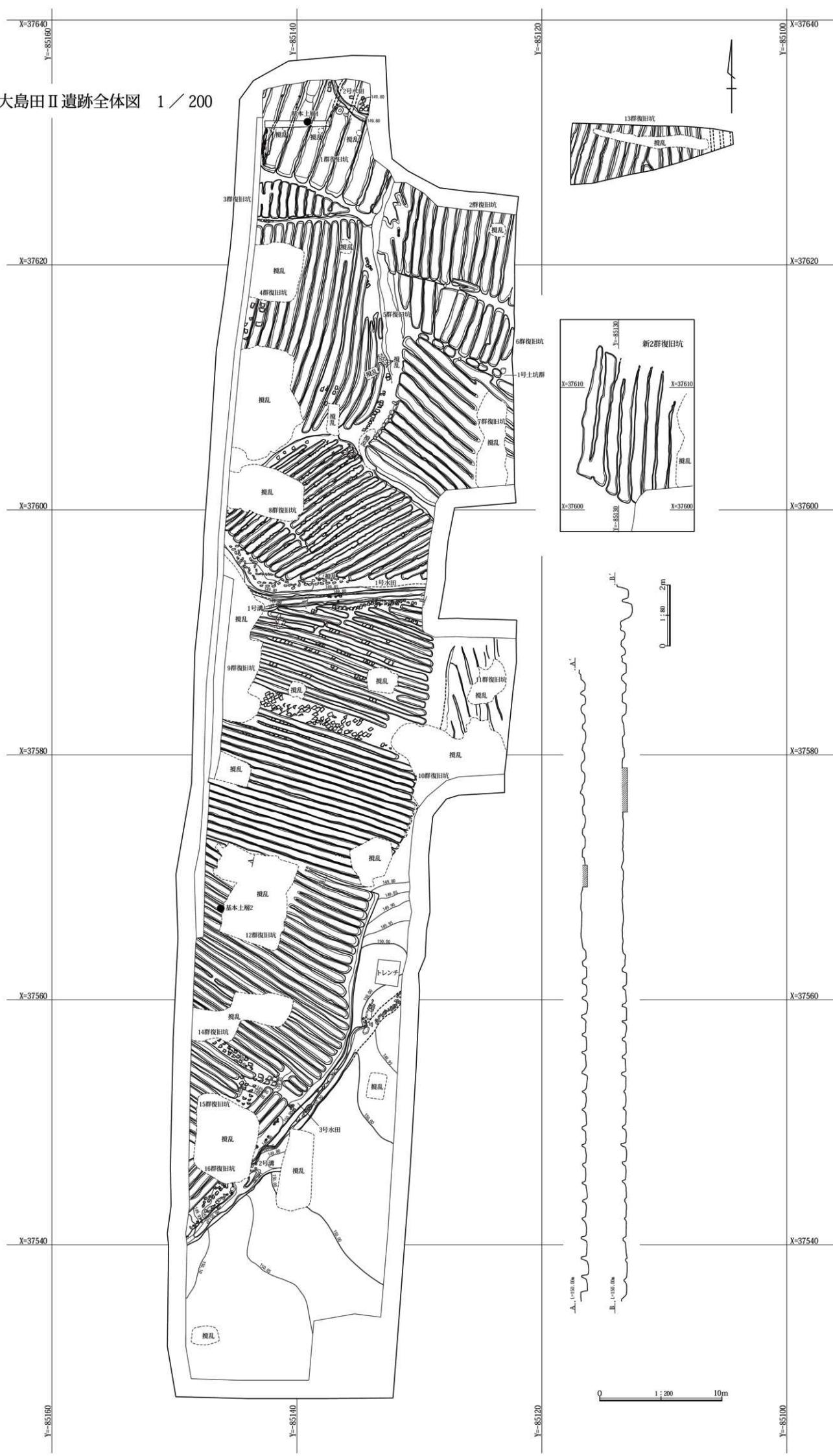
電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社



付図1 大島田Ⅱ遺跡全体図 1 / 200



付図2 沼田遺跡1・2面全体図

沼田遺跡 1面全体図 1/250



沼田遺跡 2面全体図 1/250

